
帰宅途中

Tigerina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰宅途中

【Nコード】

N27710

【作者名】

Tigerina

【あらすじ】

お肌だけが自慢の平凡を絵に描いたような25歳女子、妻木立花。

コンビニで買った傘を開いたら知らない場所に来ちゃいました。

なぜか自己紹介するたびに男に間違われるんだけど……

お肌のお手入れ命！の主人公が異世界で出会った一癖も二癖もある人たちから、時に助けを借り、時に求愛されながらも帰宅を目指す恋愛ファンタジー。

人物紹介（少々ネタバレ有り）（前書き）

7日目 3までの時点で分かっている人物紹介です。
人物が新しく出るたびに足して行きます。

人物紹介（少々ネタバレ有り）

登場人物紹介

（ ）内の数字は分かっている年齢。

妻木立花（25）・・・日本の百貨店で美容部員をしている。お肌が自慢。シューディツカ王国に「運ばれて」来た人間。シューディツカでの通称は「サイキ」。

デイゲア（16）・・・立花が一番最初に会ったシューディツカの人間。林の中の一軒家で一人暮らし。両親は王都で忙しくしているらしい。規格外の美人（立花・談）

フィンエルタ（22）・・・デイゲアの父の下で働いている若干ナルシスト入った女好き。艇ふねの操縦が出来る。背が高い。通称エルタ。オルティガ・・・城で働いている。デイゲアとは知り合いらしい。プロっばい（立花・談）

アイウン（22）・・・近衛隊王室師団所属で現在は立花の護衛兼侍従。外見小悪魔の中身女神様。有名な男装の麗人に似ているらしい。

<四大老>

西大老 レイジエ・・・見た目サンタクロースそっくりのおじいちゃん。

東大老 ニージーク・・・若作りのおばさん（立花・談）。若干ネチっこい性格。

北大老 バルデナ・・・いかつい体の寡黙なおじさん。驚いた時にすっごい大きく口が開く。

南大老 エイカー・・・見た目も実年齢も恐らく四大老で一番若い。爽やかさん。

ラオアラ・・・ニージークの秘書。以前はマリグエラの側近。

<王族>

ウォルシオラ・・・シューディツカ王国の現国王。

マリグエラ・・・第一王子。2年前に事故死するまで王太子を務めていた。享年46。

オルバ・・・第二王子。現在王位継承権第1位。

イーシン・・・第二王子妃。控えめな美人。

ガルダ（19）・・・オルバの長子。柄が悪い。勉強が苦手。

メリエヌ（17）・・・ガルダの妹。姫カットのお姫様。

レットシーム・・・第一王女。娘と同じであまり平民が好きではない。王位継承権第2位。

ライナン・・・第一王女の長女。選民意識が高く、平民が嫌い。

レシュカ（16）・・・ライナンの弟。ディゲアに背格好が似ている。

セルキア・・・第三王子。フィンエルタの上司。

ウーシュ・・・ディゲアの母。第三王子妃。美人らしい（ディゲア父・談）

プロローグ

人生って本当に何があるか分かんない。

私の今までの25年の人生を振り返ってみて、他人に胸張って自慢できるようなことと言えば、特に道を踏み外すこともなく大きな怪我也も病気もせずにこれたことくらい。

宝くじが当たったとか、芸能人の恋人が出来たとか、実は音信不通になっていた家族が富豪の一族ですごい莫大な遺産の相続人になったとか、そういうネタになるような話は一切無い。

宝くじは社会人になってから年末に買うだけで、それも4桁の金額すら当たったこと無いし。

恋人は学生時代にはそれなりにいたけど、今は仕事忙しいし出会いも無いし。

家族は曾祖父の時代から同じとこに住んでるってだけで父親は普通のサラリーマンだったし。

日本中を探したらそれこそ同じような人生なんて、ごろっごろ転がってると思う。

そんな一般的な現代日本の25歳女子である私が、何故に冒頭のよくなセリフを吐いているかと言うと。

答えは簡単、予想もしてなかった『何か』が私の人生にコンニチハして来たから。

自己紹介が遅れましたが私、妻木立花さいきりつかと言います。
そして現在地、知ってる方が居ましたら私がお尋ねしたいです。

ココハドコ？

プロローグ（後書き）

拙い作品ですが、頑張っ て続けて行きたいと思 います。
誤字脱字等ありましたら遠慮なくご指摘下さい。

今日は金曜で、珍しく早番だったから同じフロアの子に合コンに誘われてて。

ノリノリだった訳じゃないけどそれなりに気合い入れて、普段は着ないかわいいワンピースとか着ちゃってたのよ。

でも結局いいなって思える人も居なくて、明日朝から仕事だからって理由で2次会には行かなかった。

まだ時間あるからDVDでも借りて来ようと思って、いつもとは違う道で帰って。

それでDVD借りた後にコンビニでビールとからあげと仕事の参考用にファッション雑誌買って。

コンビニ出たら雨降り出してたから、もっかいコンビニ入ってビニール傘買ってポンと開いたら。

雨なんて降ってなかった。

それどころかたった今出て来たばかりのコンビニも無くなってたし、夜だった筈なのに空には燦々と太陽が。

買った傘はビニール製だから日除けになんないじゃん……………とか思っちゃった私は思いつきり職業病ですヨ。

とりあえず周りを見回してみる。

私が立っているところは農道と言うのかな、舗装されてない幅1メートルほどの道。

両側にはそれはキレイなお花畑が。

れんげの花に似てるそれは高さもそれほどなくて、色もかわいいピク。

目の前にある道はかなりまっすぐ伸びてる。それはもう地平線まで。反対側も見てみる。

まあぶっちゃけ気がついてすぐに周りはぐるっと全部見たんだけどね。

反対側は木立ちというか林みたいなとこに続いている。森という程の規模ではなさそう。

地平線の方に歩くのはしんどそうなので、まずはその林に行ってみることにした。

ずっとここに居ても仕方ないし。紫外線から逃れたいってのもあるけど。

林までは200メートルくらい。

でもその200メートル、私はコンビニで買ったファッション雑誌を頭に掲げ、紫外線を浴びないようにするのに必死で歩いた。

だってこの日差し、日本の真夏並みにキツイ。雑誌を持つ手にジリジリと容赦なく降り注いでくる。

コンビニを出るまで私が居た場所は5月の初め。

日中はそれなりの日差しになるけど、それでもまだ日傘は持ち歩いてない。

心持ち早歩きで林に着いた頃にはうっすらと汗をかくくらいになっていた。

容赦ない日光のせいだけでなく、ヒールで舗装されていない道を歩いたせいもある。

ようやく紫外線の恐怖から逃れられた私は、日陰に入った途端に喉

の乾きを覚えた。

しかし悲しいかな、手元にあるのはビールのみ。

しかも周りに人家の見当たらないこの場所で、唯一の水分を今飲んでしまうのは危険かもしれない。

今一度ビールに目をやる。

．．．．．温くなってから飲んでも美味しくないし、と誰に言う訳でもなく自分を正当化して私は一気にビールを呷った。

かつてこんなにビールを美味しいと感じたことがあっただろうか。
いや、ない（反語）。

そしてビールを飲み終えて分かったんだけど、私ってばそれなりに混乱してみたみたい。

そりゃいきなり全然知らない場所にポンと立たされてた訳だし、混乱するなってほうが無理な話なんだけど、ビールの空き缶を持つ自分の手がちよつと震えてるのを見て「やだ、私も女の子だったのね」なんて妙に感心してしまった。

ここで「やだ、アル中？」って思わなかった自分を褒めてあげたい。言っとくけどそんなビールばっか飲んでるわけじゃないから。

今日はたまたまだから。

さて、ちよつと落ち着いたところでこれからどうしよう。

どう見てもここは私のアパート（築7年、鉄筋オートロック、1D K南向き）がある場所には見えない。

しかも私は仕事終わりで一日中立ちっぱなしだったせいも足がむくんできて痛い。

出来ることなら今すぐ横になりたい。

今着てるのがこのワンピースじゃなかったら横になるのは無理だとしても、その辺の草の上に座るくらいなら出来た。

でもこのワンピースはお気に入りのだし、何と言っても色がオフホワイトなのよ！

草の上に座ったらお尻のところがみっともなく緑になりそう……。

そう言えば小学生の頃、学校の近くの草がいっぱい生えた丘みたいなところで、滑り台みたいに滑って遊んでたらその時履いてたコットのキュロットどころか中のパンツまで緑色に染まっちゃって、お母さんにすごい怒られたなあ。

ってイカンイカン。現実逃避したらダメだ。とりあえず現状をなんとかしないと。

思ったんだけどこれっていわゆるトリップとか、神隠しみたいなものかな。

映画でも男の子が白い毛に覆われた犬みたいなきみみたいなのに乗って冒険したりするのや、女の子が自分の妹だか弟だかを取り戻すために迷宮に行くみたいなのがあったよね。

問題は、だ。

今私がいるこの場所が

1番 全くの異世界

2番 元居た世界と同じ時間で違う場所

3番 元居た世界の違う時間（タイムトリップってやつ？）

のどれだったってことですよ。

希望としては2番であってほしいけど、もし同じ世界でも何万光年

も離れた星とかだつたら困るなあ。

それにしてもこの林、さつきから鳥の鳴き声一つ、葉っぱの擦れる音すらしない。

聞こえるのは自分の足が地面を踏む音だけ。

うーん、いきなりモンスターとエンカウトってな事態は勘弁してよー。

私はガサガサとコンビニの袋を揺らしながら手にはコンビニ傘を構え、林の中を進んだ。

出来るなら最初に遭遇するのは人間がいいと祈ったのは言うまでもない。

1 目 1 (後書き)

誤字脱字等ありましたら連絡頂けると幸いです。

1 日目 2

私の願いが通じたのかどうか、しばらくしてから少し開けた場所
で人家のようなものを発見した。

残念なことに日本家屋ではないけど。

レンガに似た薄い茶色のブロックのようなものを積み上げて出来て
るみたいで、窓にはちゃんとガラスのようなものが嵌っている。

〜のようなという表現が多いのはご了承ください。

周りに人影はないけど、煙突のようなものから煙が出ているところ
を見ると中に誰か居るみたい。

私は右手に構えていた傘を普通に持ち直し、しかし力は抜かずに人
家に少しずつ近づいた。

第一希望はやさしそうなおばあさんでお願いします！と扉をノック
しようとしたところで、思い掛けず、内側から扉が開いた。

扉は西洋式だった。

言い直そう。

外開きだった。

強かにおでこを打った私。

思わず唯一の武器である傘も落としてしまった。

心持ち睨むようにして顔を向けたその先には。

肩ほどのストレートの金髪にオレンジ色の目を見開いた美少女が立
っていた。

言い忘れていたけど、私の職業は美容部員である。

大手の百貨店にある女性なら誰でも知ってるであろう有名な化粧品メーカーのカウンターで働いている。

客層は比較的若いけれど、それでも大体20代半ば以降。

毎日色んな人の肌を見るけど、肌はとっても正直。

やっぱり手入れをきちんとしてる人の肌はつやつやで、化粧のノリもいい。

私は仕事柄、普段から肌のお手入れには気を遣っているつもりだけど.....

この目の前に立つ美少女の肌の輝きを見たら「私の顔にモザイク入れて！」と叫びたくなる。

美少女は肌もキレイなんだな〜なんてことを考えていたら、当の美少女は驚きから立ち直ったようで、私に向かってすこし顎を下げた。そう、美少女は私よりも背が高かった。

「大丈夫か？まさか外に誰か居るとは思わなくて」

なんと、声まで美しい！

思ってたよりはちよつとハスキーな感じだけど、それがまた中性的な感じでいい。

「いえ、こちらこそ驚かせてしまったみたいでごめんなさい」

私は赤くなっているであろうおでこを押さえつつ、仕事で培った人ウケのする笑顔を浮かべる。

美少女は扉に当たる物体に気がつきそれを拾い上げると、さして珍しくもないビニール傘をしげしげと見つめ出した。

.....嫌な予感がする.....。

「これは何だ」

ビニール傘のないところなんて現代の地球にだっていっぱいある！
まだ希望を捨てちゃダメよ！立花！！

「か、傘ですよ。ビニールで出来てるんです」

「かさ」

「傘です」

ヤバイ、傘が通じてないっぽい！

ていうか今気がついたけどこんなに明らかに日本人じゃない人に日本語通じてるじゃん！

これは異世界フラグか………！！

「かさとはなんだ」

思わず私がそこにくっきりと膝をついて頂垂れたのを誰が責められよう。

いきなり私が膝をついて頂垂れたものだから、美少女は再びびっくりしたようで、慌てて私の前にかがみ込んでオロオロしだした。

「すまない。やはり頭を強く打っていたんだろう。気分が悪いのか？」

ああ、美少女は全く悪くないのに。
ある意味では彼女によってもたらされた真実に衝撃を受けたわけだから、彼女のせいと言えなくもないけど。

でも美少女からしたら不審人物がよくわからないもの（傘）を持って家の前に立ってたあげく、そこでいきなり跪かれてる状況な訳で。

あまり不審者っぷりを発揮するのもしかと思うので、精神的ダメージはともかくとしてとりあえず立ち上がることにした。
立ち上がることに。

思ったよりもダメージが大きかったのと、やはり頭を打った衝撃のせいか立ち上がった途端にクラクラとした目眩に襲われる。
貧血なんて一度も体験したことのない健康優良児の私が目眩に！

あわや再びドアに激突か、というところで目の前に居た美少女が体を支えてくれた。

うわ、なんかいい匂い。
うちで扱ってる香水とかの人工的な香りじゃなくて、お花の香りみたいな。

にしても美少女、意外に力が強い。
足元の覚束ない（ビールのせいでは決してない）私を軽々と横抱き

にするとそのまま家の中に入ってしまった。

まさか初めてのお姫様抱っこを年下であるう同性にされてしまった私。

不可抗力ではあるけども、さすがに情けないのでこのことは誰にも言うまいと固く心に誓った。

美少女はドアのすぐ内側にあったりリビングダイニングのようなところ（目眩のせいで上手く確認出来ず）の一角にあるソファのような場所に私をおろした。

すぐ傍にはまわりの石が煤けた暖炉があるけど、さすがに今の季節は使っていないようで火は入っていない。

さつき煙突から出た煙はどこから来たんだろう、そんなことをぼんやりと考えながら遠慮なく横になる。

靴をどうしようか迷ったけど、日本人としては家具に土足で足をあげるの抵抗があるので脱いでおいた。

美少女は私をおろしてすぐに奥の方へと消えた。

どうやらすぐ隣がキッチンになってるみたいで、何やら美味しそうな匂いが漂って来る。

あの煙はキッチンで使っていた火から出てたらしい。ということとは電気はないということか。

この部屋にも照明器具のようなものは何もなく、天井には梁がむき出しに走ってるだけだし。

夜になったらランプでも点けるのかな。

そうして天井やら壁やらを見ていると美少女が手に何かを持って戻って来た。

「痛むか？一応薬を塗っておいた方がいいかも知れん」

そう言っつて美少女はその美しい指先で私のおでこにそっと触れた。

ひんやりとしていて気持ちいい。

触られてもそれほど痛くないし、赤くなっているだけだろうけど折角用意してくれたみたいなので大人しく薬を塗られる。

NOと言えない日本人です。はい。

薬は薄い飴色で、見た感じは蜂蜜みたい。そのままだとベタつくので上から薄い布切れみたいなのを当ててもらおう。

特に何かで留めるということはせずにそのままで手当は終了のよう
だ。

「もう少し横になっていた方が良くも知れないな。今食事の支度
をしているから出来上がった頃には気分もよくなっているだろう」

美少女は惜しげも無く微笑みをその顔に浮かべると、何か液体の入
った器を渡して来た。

容器の形状からすると飲み物っぽいんだけど、ここは異世界（推定）
だし。

もし飲んでしまったてから実はこれも塗り薬でした、なんてオチは嫌
だ。

容器を手に固まる私を見て、美少女は何やら困ったような顔になっ
てしまった。

「うちで飲んでる茶なんだ。喉が渴いていないんなら無理に飲むこ
とはない」

どうやら口に合わないものを出されて困ってる様に誤解されてしま
った。

別にそういう意味で固まっていたわけではないので焦ってしまっ
て。相手がキラッキラの美少女だけに特に。

「いえ、頂きます！」

見た目は茶褐色の日本でもよく見る麦茶っぽい。
じろじろ見るのも無作法なので、ここはえいや！と思い切って一口
飲んでみた。

お、おいしいじゃないか！！

お茶というよりも柑橘系の清涼飲料水みたい。さっぱりとしてて喉
越しもいい。

ゴクゴクと一気に飲み干してしまった。

「すごくおいしいお茶ですね！」

「口に合ったようで良かった。まだ要るようなら遠慮せずに言っ
てくれ」

「じゃあお言葉に甘えてもう一杯頂けますか？」

もちろん、と言って美少女はまた奥へと消えて行った。

初めて飲んだ異世界（推定）の飲み物がとんでもなく口に合わない
ものじゃなくて一安心。

味覚が違いすぎると食生活に困るもんね。

さて、この異世界（推定）にある程度の文明があるらしいことは分
かった。

家具や家の作りを見ても、地球にある技術とそんなに変わらないみ
たいだし。

そりゃ日本の住宅に比べたらだいぶカントリー調なんだけどね。

地球だって水道も電気もない場所もあれば便座だって電動で開く家もある。

ここにももしかしたらすごい科学の発達してる場所があつて、そこでなら私の帰宅方法も分かるかも知れない！

とりあえず地球人とはほぼ同じ外見、生活っぽいところにトリップしただけマシだと思わなきゃね。言葉も通じてるし。

ちょっと気分が浮上した。

美少女とお茶のおかげかな。

ちゃんとお礼言わなきゃね。

丁度そこへ美少女が戻って来た。

「あ、お茶ありがとうございます。あとおでこの手当ても」

「いや、元々ぶつけたのはこっちのせいだ。気にするな。そういえばまだ名前を聞いてなかったな」

「すみません！私、妻木立花と言います！！お茶頂く前に名乗っておけって話ですよ」

折角浮上した気分が再び落ち込む。

相手に言われるまで気付かないとか、社会人としてどうなの・・・

「さいき・・・りつか・・・？」

美少女は私の名前を聞いてぽかんとしている。

え、まさか『りつか』がこっちの言葉では卑猥な内容でピーが入るような意味とか？

それともハゲとかデブとかみたいな蔑称とか？

「お前、男だったのか……」

ちよつと思わぬところからの攻撃だったもんで、咄嗟に反応が出来ずに私までぼかんとしてしまった。

体の未発達な子どもの頃ならともかく、25歳にもなつて男に間違われるとか……

しかもなんか美少女の顔が心持ち冷たそうに見える。

確かに美少女の家にウハウハと上がり込んできた女装趣味の変態野郎と思われてるならその目つきも頷けるけど、それ誤解だから！

「ち、ちがいますよ！！私は生まれてから今までずーっと女です！！！」

全くの見当違いの疑いをかけられて美少女に軽蔑されるのは私の本意ではない。

ここはしっかり否定させて頂きます。

「す、すまん。りっかなんて名前だからてつきり男かと……………
。お前も難儀な名前を授けられたもんだな」

私の剣幕に驚いたのか、ちよつとタジタジになつてる美少女。

名前のせいで男に間違われるなんて、世界が違えばこんなこともあるのね。

こんなひらっぴらのワンピース着てるし、顔はぱっちりフルメイク（かなりよれて来てるけど）、それに自慢出来る程大きなサイズではないけど胸だつて人並みにはあるのに。

でもまあ美少女にも悪気があつたわけではなさそうだし。

何よりそんなことで自分より年下の女の子を怒るのも大人気ないので、ここは敢えてさらっと流すことにしよう。

「それで、あなたの名前は？」

美少女だからきつと名前も可愛いんだろうな。

「ディゲアだ」

「……………あんま可愛くなかった。」

「へ、へえ〜かつこいい名前ですね」

美少女ことディゲアさんは私の言葉にちよつと嬉しそう。

本人が気に入ってる名前ならまあいつか。

リリーとかレイチエルとか似合いそうなんだけどねえ。惜しいわ。

お互いの名前が分かったところで、ディゲアさんはやはり私かなん
でこの家を訪ねて来たのか気になったみたい。

「このあたりには他に家も無いし、一番近い町でも半日はかかる。
しかも一番日の高い時間に外を歩くなんて普通はしない」

私も好きで外を歩いてたわけじゃないんですけどね。

今日あの200メートルで浴びた紫外線によるダメージが恐ろしい。

「実は気がついたら林の外の道に居まして。日差しのきつさに耐え
かねてこっちに來たら家があったので一休みさせてもらえないかな
ーと……………」

「なんだ、お前は『運ばれて』来たのか」

デイゲアさんは何やら納得顔でうんうんと頷いている。

「運ばれて来た……?」

もちろん私にはさっぱり分かんない。

この場合運ばれて来たのは私。

どこからといえば、地球の日本から。

でも……なんで? どうやって? だれが?

「稀にこの世界には他の場所から運ばれて来る人がいる。運ばれて来る人間は性別も年齢も人種も様々だ。元居た世界も皆それぞれ違っている」

デイゲアさんの話が本当なら、ここにポンといきなり現れたのは私が初めてでは無いらしい。

でも元居た世界がそれぞれ違っていることは、私と同じ21世紀の地球から来た人はいないってことだよな?

ここが異世界ってことはこれで確定したけど、ここで気になるのはたった一つ。

「私って元の世界に帰れるんですか……?」

そう、この一つだけ。

1 日目 4 (後書き)

拙い作品ですが読んでくださってありがとうございます。
誤字脱字等ありましたらご連絡頂けると嬉しいです。

デイゲアさんは、バツババサの金色のまつ毛に縁取られたそのくりんくりんの双眸を真つすぐに私に向け、小さく息を吐く。

私は一言も聞き逃すまいと少し前傾姿勢になりながら傍らに立つデイゲアさんを見上げた。

「結論から言つと」

数秒の沈黙の後、目の前の美少女は再び口を開く。

「帰れるかもしれないし、帰れないかもしれない」

なんか曖昧な答え返つて来た！

まさか一番無難な返答しただけじゃないでしょうね．．．．．私がいささか胡乱げな目つきになっていたのに気がついたはずなのに、デイゲアさんはさして気にしていない。もうちょっと私を労るそぶりを見せてくれてもいいのに。ちえ。

「こちらに運ばれて来た人間には、みな『理由』があるんだ」

ディゲアさんは顎に手を当て、ひとつひとつ言葉を選ぶようにゆっくりと話す。

「有名なのだと、数十年前に運ばれて来た男の話だな。彼は医者で、運ばれて来た『理由』はこの世界で当時流行していた伝染病の原因をつきとめ、治療薬を完成させることだった」

なんでも彼の偉業は歴史の本にも載っているくらいらしい。

「その男は治療薬を完成させた後、自分の世界に帰ることが出来た」

「本当ですか!!?」

それはなんとも希望が持てる話。

過去に帰れた人が居るなら、私の帰宅だって可能かもしれないもんですね。

しかし私の希望は続くディゲアさんの言葉に、いきなり半分ほど打ち砕かれてしまった。

「ただ、その男は帰らなかったようだが」

「ええええ!なんで!!」

みすみす帰れるチャンスがありながら、それを蹴るなんて!なんならその帰宅権、私にくれたらいいのに。

ディゲアさんは私がよほど不満げな顔をしていたからか、若干苦笑しながらソファのようなものの肘掛け部分に腰を下ろした。

「彼が薬を作り上げた時には、もうすでに長い年月が経っていたんだろうな。彼はこの世界で自分の家族を手に入れていたんだ。長年携わって来た仕事も家族も置いて、元居た世界に戻るという選択肢を、彼は放棄した」

その医師だという男性はどんな気持ちで余生をこの世界で過ごしたんだろう。

元居た世界を思い出して、自分の下した判断を悔いたりはしなかったんだろうか……

正直言つて、今日こっちに来たばかりの私に、この世界に対する未練なんて微塵も無い。

でも長く居ればそれだけ情も移ることもあるんだってことよね。なら帰るのはなるべく早いほうがいいに決まってる。

バカンス気分でもうちよつとだけゝなんて思ってたら10年20年経ってましたじゃシャレにならない。

「で、私がここに運ばれて来た『理由』は何なんでしょう?」

私がそう質問した途端、ディゲアさんは何とも申し訳なさそうな顔をこちらに向けた。

憂い顔ももちろん美しいけども、いいお話ではなさそう……

「『理由』を知るのはお前をここに運んできた者だけだ」

「それは……………」

「私たちは『てんじょうのかた天上の方』と呼ぶ」

四十肩みたい、とか思ったけど口には出さなかった。

デイゲアさんの話によると、私たちの言葉でいう創造神のような存在が作った第二の神様のような存在らしい。別名は『干涉者』。

創造する力が無いので、この世界で何か凶事や天災が起きたとしてもそれを打破するものを生み出せないとか。

それでその代わりに該当する能力や技術を持った人間をよそから連れて来る、と。

なんてはた迷惑な！！っていうかまるつきり誘拐じゃないのよ。

「ようは過保護な親ばかりだったものか」

「ちょっと、自分のところの神様をそんなふうと言っちゃっていいの!？」

「この世界にとっては確かに有り難い存在なのかもしれないが、お前たち異世界から運ばれて来た人間にしてみれば疫病神もいいところなんじゃないか？」

なぜかディゲアさんの言葉に私が慌ててしまったわよ。

言った当の本人はどこ吹く風だ。口元には皮肉げな笑みまで

. .

1 目 目 5 (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると嬉しいです。

「そろそろ腹も空いて来ただろう。話は後にして食事にはないか。大したものは出せないがこうやって会ったのも何かの縁だ、食べて行くといい」

ディゲアさんはそう言って立ち上がった。

が、実を言うと私はさして空腹を感じてないんだよね。

よく考えたら合コンの席でそれなりにご飯は食べたし。

だからコンビニでもからあげしか買わなかったのよ。確か。からあげ。

「あ、すみません！食べ物少しならあるんでお気遣いなく！」

からあげの存在をあやうく忘れるところだった！

電気の無いこの家に冷蔵庫なんてある筈ないから、このからあげは今日食べてしまわないと明日には絶対傷んでるだろう。

何と言っても外は真夏なみの暑さだ。

「……………その持つてる食料、よかったら交換しないか。異世界の食べ物をお口に作る機会なんてこれが最後かもしれないしな」

しかしディゲアさんは私の発言にキッチンに向かわせていた足と止めると、くるりとこちらを向いてそんなことを言ってくる。

突然のデイゲアさんの申し出に少し考え込む私。

確かにこうやってトリップしちゃう暇もない限りそんな機会は無さそう
だ。

しかし今ここで私の世界の貴重な食料を手放してしまってもいいも
のか。

「もしかしたら似たような食べ物を知ってるかもしれない」

なるほど、そういう考え方もあるわよね。

今のところ帰れる見通しが立ってるわけでもないし、もし何日もこ
の世界に居なくちゃならないとなると、いつかは自分の慣れ親しん
だ味を食べたくなるに違いない。

卒業旅行でオーストラリアに遊びに行った時だって、3日目には寿
司食べてたくらいだし。

もし似たような料理、食材があれば頑張りようによっては限りなく
地球の食べ物に近い食事が作れるかもしれないし。

本音を言えば私もこちらの食事にちょっとは興味があったので、あ
りがたくその申し出を受けることにする。

「わかりました。でも本当にちょっとしかないんで、交換じゃなく
てこちらは差し上げます。さすがにこれだけじゃ足りないだろうし」

そうやって私は脇に避けていたコンビニの袋から少しくたっとなっ
たからあげの袋を取り出した。

デイゲアさんは袋を受け取ると少し顔を近づけて中を確認している。
多分臭いをかいでるんだろうなあ。気持ち分る。

「何かを揚げた料理のようだな」

「鳥肉という白身の肉に味付けをして揚げたものなんですよ。本当は熱々の時が一番おいしいんですけど、もう冷めちゃってますよね」

「いや、このままでも十分においしいそうだ。皿に移して来よう」

からあげはやつぱり出来立ての熱々がおいしいよね。

まあ私が買った時ですら出来立て、というほどでもなかったけど。

デイゲアさんが再びキッチンへと消えて行ったので、手伝うべきかなーと着いて行こうとしたけど、あまり人様の家を勝手に歩き回るのも気が引ける。

立ち上がったところでどうしようかと悩んでいる間に、デイゲアさんが手に大きなトレーのようなものを持って戻って来てしまった！私ってば「お手伝いします」って簡単な一言が何で言えないのよ！！

デイゲアさんがトレーをダイニングテーブルと思わしきところに置いたので、私もそちらに移動。

今度こそさりげなくお皿なんかをテーブルに置くのをお手伝い。飽くまでもさりげなく。

テーブルの上には何やらスープみたいなものと、野菜炒めみたいなもの、あとはナンに似た平べったいパンのようなもの、そしてからあげ。

こちらの世界の料理は見た目だけで言うなら、そんなに地球のものと違ってないように見える。

匂いもおいしそうだし。

「好きなところに座ってくれ」

とディゲアさんに勧められ、4脚ある椅子のうちのディゲアさんの向かい側に腰を下ろす。

まず食べ方がよく分からないので、ディゲアさんをじっくり観察させて頂こう。

「こっやってこれにこっちの具をのせて、巻いて食べるんだ」

そうやってナンのようなものに野菜炒めのようなものを適量のせ、くるくると巻いていく。

おお、なんか春巻きみたい。

スープみたいのはまんまスープかな。スプーンぽいの付いてるし。

と思ったらディゲアさんがスプーンぽいのでスープみたいなのを掬って食べている。当たった!!

ふとここで疑問。

「ディゲアさん、これってこっちでは何て言うんですか？」

私はスプーンぽいを持ち上げてディゲアさんに聞いてみた。

このスプーンぽいのは金属らしきもので出来ていて、形も地球にあるスプーンと変わらないように見える。

「スプーンだが、そちらの世界では違うのか？」

おおお！ナイス翻訳機能！！！！

言葉は通じてるから日本語はそのままでもいいかなーとは思ってたけど、外来語もセーフだったか。よかったー。

「いえ、一緒でした。言葉は通じてるけど名詞も一緒なのかどうか疑問だったんで」

これで大抵の言葉は通じることが分かったし、とりあえずは食事に集中しよう。

私はデイゲアさんが見せてくれた通りに春巻きもどきを作る。ちよつと不格好になっちゃったけど、まあ食べれなくはない。ではではいただきます。

声には出さず、手を合わせてからパクリと一口。

お、お、おいしいじゃないかああああ。

「これ、すっごいおいしいです！ー！」

味はどつちかというところ中華料理に近い感じ。甘辛い味付けで、ところどころにシャキシャキとしたもやしのような食感がある。

「気に入ったようで何よりだ。これはコル巻きという料理で、こっちの平べったいのがコル。これで巻いて食べるからコル巻きと言う。中身は色々あるんだが、肉や野菜を炒めたものが一般的だな。それでこっちのがミアンのスープだ」

そう言って今度はスープの方を指した。
スープを覗き込んでみると、何やら浮いている。

「あ、この花さつき見ました」

林の前に広がっていたお花畑で咲いていた、れんげに似たピンクの花。

それがスープにぶかぶかと浮いている。

スープ自体はコンソメスープのように透明で少し黄色っぽい。
他にも何か野菜のようなものが入っている。

「この花がミアンだ。花はスープに入れるだけでなく、さっきのコル巻きの具にしたりもするな。今日は茎の部分を使っているんで歯ごたえがあっただろう。根の部分はコルの原料だ。このあたりではこの花は主な食料だから、毎食何かしらは口にする」

そんな万能なお花が！

見た目はあんなに可愛らしいのに、捨てる部分も無く食べれちゃうなんて。

しかも美味しい。そりゃあんなに育ててるはずよね。

スープはあっさりとした味付けで、お花はちょっと甘い後味が残る。空腹を感じてなかった箸なのに、こっちのご飯が予想以上においしかったせいも箸が進む。いや、箸使っていないけどさ。

ふと前に目をやると、ちょうどデイゲアさんがからあげにフォークみたいなもの（多分フォークであっていると思う）を伸ばしているところだった。

うん、ちよつと緊張するわ。

謀らずしも『私の世界の食べ物代表』になってしまったコンビニからあげ。

あんたにこんな重責を負わせてしまって申し訳ないけど、全力を尽くせ！！

戦々恐々と成り行きを見守っていた私をよそに、からあげは見る者をうつとりとさせるようなツヤツヤピンクの唇の中に消えて行った。初・異世界の食べ物とか言ってたくせに、一口で食べたよこの美少女！！

1 日目 6 (後書き)

ちよつと復活したので更新です。
今日中にもう少し進めておきたい・・・

1日目 7

「ど、どうですか………?」

「普通に美味しいな。もっと突拍子もない味がするかと思ったんだが、肉はこちらで食べる家禽のものと大差ないように感じる」

「からあげは無事に異世界での合格点をもらえたようです!!
そうか、こっちでも肉用に鳥類を飼育してるのか。
食文化はそう違ってないみたいね。」

「一通り食事が終わったところで、再びさっきのお茶を頂く。
あー落ち着くわ。」

「それで話の続きなんだが」

「おおっと!そうでした、落ち着いてる場合じゃありませんでした。」

「さっきも言ったが、お前が運ばれて来た理由は『天上の方』しか知らない。だが、彼かのの方にはそう易々と会える訳ではないんだ」

「ってというか易々とじゃないにしろ会えるってことにビックリなんで」

すけど。

だって神様なんでしょ??

まあ実際に会えるんなら元の世界に帰してって直談判したいところではあるわね。

「この世界でもごく限られた人間しか、彼の方は姿を見せない。そうなるとお前が直に『理由』を聞くという手段は非現実的だな。また、そのごく限られた人間にそれを代わりにさせるのも同じで、まず不可能だろう」

「そつちで勝手に連れて来たくせに、帰してくれないだけじゃなくて、その『理由』を聞きに行くのもダメなんてちよっと理不尽すぎやしませんか」

「これは、『理由』が運ばれて来た人間のみでなく、この世界にも関わるからなんだ。ある意味双方に与えられた試練とも言える」

なんかその神様、いじわるくないかあ？

自分の世界の人に試練を与えるのは、まあ勝手にしてって感じだけど、他の世界から人さらってきて「仲良く解決してね」って私側には全くメリツトないじゃない!

そうは言っても自分自身が人質のようなもんだから、協力しないわけには行かないのが現実なんだけどね……

「それで、本人に直接聞くのは無理ってのは分かりましたけど、そうしたら私は一体これからどうしたらいいんでしょう?」

「『理由』を見つけ出し、それを解決することだな。それが唯一の帰る手だてでもある。また、『理由』は大抵の場合一番最初に着いた国にある。例外でその国以外にあることもあるが、それでもまず最初に着いた国が大きく関わっているのは確かだ。そして運ばれて来た人間は、その『理由』から逃れることは出来ない」

「逃れることが出来ないっていうと？」

「どこに居ようとその『理由』はお前の周りで確実に起きる」

「なんか怖いんですけど……」

しかもその『理由』とやらがどんなものか分かっていないだけに特に！

「『理由』は必ずしも悪いことばかりじゃないぞ。試練と先ほどいったからそう思ったのかも知れないが、教育制度を確立させた者もいるし、地下資源を発見し国を豊かにした者もいる」

えええ！前者はともかく、後者は石油王みたいじゃん！！
そういうのだったらいいなあ。

「じゃあ確実に起こるその『理由』を私はただ待つてればいいんですか？」

「いや、運ばれて来た人間が現れた国は、それを知る必要がある。」

慶事にしろ凶事にしろ、何かしらがその国に起こる訳だからな。そしてその国にはその人間を保護する義務もある。という訳で、お前はまず王都へ行くべきだろう」

仮にも神様が連れて来た人間なので、そのへんにばいと置いといてもいい訳じゃないらしい。

国でちゃんと保護してもらえるんなら当座の生活の心配も無さそう。

「で、その王都というのはここからどうやって行けるんですか？」

「手段にもよるが、歩いて行くなら1ヶ月以上かかるな」

「え」

1ヶ月って……もうどれくらいの距離なのか想像付きませ
ん！

しかもこの暑さの中を1ヶ月も歩いてたら真っ黒になっちゃっ
ないのよ。

それだけは避けたい。何としても！！

「半日歩いたところにある町からなら船を使って1週間くらいで着
く」

「本当ですか！！半日くらいならなんとか歩けると思います！！」

この暑さの中、半日でも紫外線に晒されるのは不本意なんだけど仕方が無い。

この世界に身寄りのない私には国の保護はかなり有り難いもんね。

右手をぎゅっと握りしめてやる気を見せる私に向かって、目に前に座る少女はニヤリと口元を歪ませた。

「2日後にここに来る私の家の者に頼めば、その日のうちに王都に届けてやれるぞ」

「お願いします」

半日の紫外線ですら浴びたくないっていう私を責めないで！

だって私もう25歳なのよ！！

紫外線ダメージを簡単に回復できるほどピチピチじゃないのよ！！！！

ということでは2日後にディゲアさんのお家の方が来るまで、この家にお世話になることになった。渡りに船とは良く言ったもんだ。

1日目 7 (後書き)

ちよつと慌てて更新したんで誤字脱字あるかもしれませぬ。
とりあえず今日はもう寝ます。おやすみさない！

さてさて、美少女に「泊まって行って（はあと）」と言われてホイホイ頷いてしまったけど、よく考えたらご両親の了解は得なくていいんだろうか。

遊びに来た友達とかならともかく、私は何と言っても異世界人なわけだし。

「デイゲアさん、話の流れでここに泊めてもらうことになったけど、ご両親にちゃんと聞いた方がいいんじゃないですか？」

食事の後片付けも終わり、再びリビング部分で寛いでいた私たち。もちろん後片付けはちゃんとお手伝いしました。私の名誉のために敢えて言うておく。

「いや、ここには私しか住んでいないから構わない。両親は王都に居る」

年頃の娘をこんな辺鄙なところに一人で生活させるなんて、どういう家庭状況なんだろう。

もしかしてご両親は出稼ぎにでも出てるのかな。なら悪いこと聞いちゃったかしら。デイゲアさんも何だかしかめっ面してるところを見ると、やっぱりご両親と離れて暮らすことに不安があるのかも。

この話題は早々に切り替えた方がよさそう。

「そうですね。あの、実を言うと私、というか私の世界はこっちに
来る直前まで夜でして。私は仕事帰りで後は家でお風呂入って寝る
だけだったんですよ。なので出来ればお風呂を貸して頂きたいんで
すけど………」

さすがに体のベタつきが気になる。っていうかメイクも落としたい
し。

ちなみに合コン行ってた下りは割愛！

見たところ16、7歳のデイゲアさんに大人の色恋沙汰は教育上よ
ろしくない。

それに下手に「合コンって何？」って聞かれても困る！

年頃の男女数人が出会いを求めて一緒に食事をするんです、とでも
言えというのか！！

それに仕事帰りだったのは本当だもんね。途中で色々寄ってただけ
で。

「ああ、気が利かなくてすまないな。こっちだ、案内しよう」

お風呂はどうやらキッチンのすぐ隣にあるみたい。

水場を近くに持って来るのはどこも一緒かあ。

リビングダイニングを出ると左手にキッチン、右手に廊下。

廊下は突き当たりで右に曲がっているようで、その突き当たりに行
く途中にあるドアが浴室らしい。

「中にあるものは好きに使って来て構わない。タオルはその戸棚の中にある」

簡単に説明を済ませると。デイゲアさんは着替えを取りに浴室を出て行った。

その間にぐるりと浴室を見回す。

浴室の中は結構広くて、ユニット式。右側にちょっと深めのバスタブ、真ん中の壁際に洗面台があつて上が戸棚になっている。そして左側にトイレ。

トイレは横に仕切りの壁みたいなのがあつて、ユニット式だけど他の部分からは見えない作りになっている。おお、なんか感動。床は全面にタイルが敷き詰めてあつて、一応排水溝もある。

「私の服で悪いが無いよりはマシだろう」

「何から何までありがとうございます」

渡されたのは、彼女が今着ている服に良く似た形のシンプルな生成り色のシャツ。丈は少し長めで、手触りはかなりいい。それと腰の部分に紐で絞るようになっていた紺色のパンツ。(この場合のパンツはもちろんボトムスのパンツよ！)

うう．．．．．下着の替えが無いのが痛い．．．．．

でも初対面の女の子に下着を借りるのはちょっと気が引ける。

仕方ないのでお風呂上がりにはとりあえずノーパンで我慢しよう。今着てる下着を洗って干せば明日はそれを着られるし。

それで明日の朝一番にこの借りた服を洗って干せば、この陽気だ。

その日のうちには乾くでしょ。

お風呂は地球のほぼ一緒だった。

ちゃんとシャワーも付いてたし。

石けんは分かったけど、シャンプーはどれがよくわからなかった。なんか小さな瓶がいくつか並んでいたんで、あれのどれかだろうか。もしかしたらあの中の一つにディゲアさんのサラサラの金髪秘密が隠されているのかもしれないが、片っ端から試してみるには私には勇気が無さ過ぎた。(だってカビ ラーみたいなのが入ってる可能性だってあるんだもん！)

そしてさすが腐っても美容部員なワタクシ。

手持ちの鞆の中には仕事場から頂戴して来たメイク落としや化粧水など、一通りのスキンケア商品の試供品が入っている。

下手に合コンだったから、とか勘ぐってはイケナイ。

これが彼氏の家にお泊まり、とかって言うならお風呂上がりにもちよこつとくらいメイクしておきたいところだけど、まあ相手は年下の同性なわけだし。

それにあんまり長時間メイクをするのもお肌には良くない。

ということぞノーメイクでいざ出陣!!!

1 日目 8 (後書き)

あまりズボンという単語を使わないので敢えて『パンツ』のほうを使ったんですけど、一般的じゃないでしょうか？ちょっと不安です
.

1 日目 9 (前書き)

1 日目、もう少しだけ続きます・・・
ダラダラと長くてすいませんが、もう少しだけおつきあいを！

浴室を出てリビングの方に顔を出すと、予想通りデイゲアさんはソファに座っていた。

今思いっきりビクってなつて傘を置いたけど、見てたんですか。

別にそんなバツの悪そうな顔をしなくても怒ったりなんてしないのに。

「お風呂ありがとうございました」

「．．．．．なんかさつきと微妙に顔が違わないか？」

ひい！まさかそこ突っ込まれるとは！！

ここはするつとスルーしてくれないと！！！！

でも私、ツケマツゲやアイ チしてるわけじゃないからそこまで変わってないと思うんだけど．．．．．

「あ、お化粧落としたんで．．．．．」

「何もしなくてもさして不自由のある顔には思えないが」

不自由って．．．

まあそれは若さの言わせるセリフよね。あと美人だから言えるセリフでもある。

平凡な顔で生まれた20代半ばの私にはとても無理な話。

美人はいいわよねーとその端正なお顔を眺めていたら、デイゲアさんの手が私の前髪に伸びて来た。どうやらおでこの具合を確認しているらしい。

実はお風呂に入る前にさつき貼ってもらった布みたいのは取ってしまったのよね。

もう赤みもほとんど消えてたし。

「跡は残っていないみたいだな。よかった」

「ほんとうに大した怪我じゃなかったんで、気にしないで下さい」

大体こんな怪我、タンスの角に足の小指をぶつけた時に比べたらなんてことは無い。

この気持ち、土足生活者には分からないかもしれないけど。

それより気のせいかもしれないけど、先ほどから彼女の目線がちらちらと傘に移っている。

私を心配するそぶりを見せながら気になるのは傘ですか、お嬢さんよ。

「そんなに気になりますか、これ」

「む．．．．別に気になると言う訳ではない。ただ、見たこともないものだから、一体どういう用途に使うものなのか考えていただけだ」

私の面白がるような声音に気がついたのか、ディゲアさんは少しばかり頬をピンクにさせながら口を尖らせた。
うん、そんな顔してもね、かわいいだけだから。

「それで何に使うか分かりましたか？」

「武器ではないことは分かった。金属の骨組みがあるが強度はさほど無さそうだしな」

まあ中には過去に傘を武器として使った人もいるでしょうけど、正しい使い方ではないわね。

それにしてもまず最初に武器かどうか疑うなんて、こっちの世界ってそんなに物騒なの？

こんな若い子が一人で暮らしても大丈夫なのか、お姉さんちよつと心配。

「一番可能性として高いのは漁の道具かと思ったんだが」

「え？漁？猟？」

「透明な素材で出来ているだろう。だからこれをこつ水の中にいれて罾を仕掛け、魚が入ったところで引き上げるとか。しかしこの方法だとあまりにも効率が悪いな」

なんで化粧品売ってる良い年こいた女性が、仕事帰りに魚取りの道

具もって歩いてないといけないのよ……

「残念、不正解です。これは雨の日には外を歩くためのものでした
！」

「は？」

なぜかすごくキョトンとされた。

こっちの世界では雨の日にはレインコートでも着るのかな。

まだ傘が開発されてないんなら、私これで大もうけできるんじゃない？
……！！！！

「お前の世界は変わっているな。どついう状況なのかよくわからん」

「な！これをですね、こつやって開いたら、雨に濡れないでしょ！
！」

私は閉じていた傘を開き、手にもって掲げてみせた。

さあ驚くが良い！！

「そもそもなぜ濡れるんだ。お前の居る世界では人の居る場所で雨が降るのか？」

なんですと！

人の居る場所ってどうか、雨って場所を選んで降るもんだっけ？
さすがに理系に弱い私でもそんなことはないと言えと胸を張って言える。

「え、じゃあこちらでは雨はどこで降るんですか？」

「人間の生活している区域以外でだな。大抵人が生活している区域は、天候に生活が左右されないように特別な保護膜で覆われている。それ以外の場所では人間は外を出歩かないから雨に濡れるという状況にはまずならない」

え、え、じゃあこっちの世界って意外と科学が発達してるの？

だって人間が生活している区域って東京ドームくらいの大きさで済むようにも思えないし。

「このあたりもその保護膜とやらの下？」

「畑も人間の生活区の一部だからな」

だってあのれんげ・・・・・・・・・・じゃないミアンだっけ、あれ地平線まで続いてたよ・・・・・・・・・・

でもそれだけの技術があるのに、異世界から人を連れて来ないとにっちもさっちも行かないような出来事も起きちゃうなんてね。

「じゃあディゲアさんは雨を見たことは無いんですか？」

「ないな」

うむむ、特別雨が大好き！ってこともないけど、こつ雨が落ちる音とか、水たまりの波紋や、あの空気が濡れたような感じを知らないなんて、ちよつとかわいそう。

雨が傘に落ちるあのポツポツって言う音、結構落ち着くんだけどね。

「少し見てみたい気もする。空から無数の水滴が落ちて来るのを」

そう言ってディゲアさんは今は元通りたたまれたビニール傘を一撫でした。

1 日目 9 (後書き)

私は雨の日に家にいるとなんだか安心するので、お出かけしない日の雨は結構好きです。

独特のしとしとという音がいいですよねえ。

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると嬉しいです。

私は2つある部屋の片方を使わせてもらうことになった。

客間として用意してた部屋ではないと言っていたけど、ちゃんとベッドがあるところを見ると、ご家族が帰って来た時にはここを使っているのかもしれない。

窓際にある木製の机の上に荷物を置き、少し窓を開ける。

外の日差しはかなりの暑さだったけど、家の中は風通しがいいのかそこまで暑くない。

机の上の日が射し込んでいる部分にコンビニの袋を敷いて、さっきこっそり洗っておいた下着を並べる。

ついでにソーラー式の携帯の充電器も机の上に出しておいた。

メタリックホワイトの携帯をパカリと開くと、そこには1:28 AMの文字。

もちろん圏外だったけどちゃんと機能しているみたい。

合コンが終わったのが9時過ぎで、コンビニを出たのはそれから小一時間もかかってなかった筈だから、こちらに来てから3時間経ったかどうかってとこね。

元の世界と時間の流れが並行してるとしたら、あと8時間程で私の勤務時間になる。

不本意ながらも無断欠勤となるわけだけど、そのまま連絡もつかず行方不明として家族に連絡が行くのはいつぐらいになるだろう。

何としてでも帰るつもりではあるけど、育ててくれた親に心配をかけるのは嫌だなあ。

すぐに帰してくれるのは無理にしても「心配しないでください」と

か一言書いた手紙くらい届けてくれないもんな。

コンコンというドアを叩く音で目が覚める。

ハッ！！いつの間にか机に突っ伏して寝てたみたい。

そりゃ本来ならとつくにベッドに入ってる時間だったんだもん。

眠くても仕方ないわよね！

ぐいっと口元のよだれを手で拭う。ノックしてくれて良かった・・・

・・・

入って来られてたら寝顔、よだれ、机の上の下着を見られるというトリプルパンチをくらうところだったよ！！

はいはい、と言いながら慌てて扉を開ける。

もちろんそこには金髪の美少女。

「随分静かだから少し気になってな」

「いえ、ちょっと色々と考え事してて・・・」

静かだったのは寝てたからです！なんて言える訳もなく、曖昧に笑って誤摩化す。

だってほら、来て速攻寝れちゃうなんてどんだけ神経図太い女なんだから話じゃない！

まあ来て速攻食事をごちそうになったあげく、お風呂まで借りた時点で相当図々しいとは思うけどね。

ディゲアさんってばその尊大な口調の割には、結構気配り屋さんなんだなあ。

こうやって色々世話も焼いてくれるし。

今だって私がいきなり異世界に来ちゃって落ち込んでないか、気にしてくれてるっばい。

私が男だったら間違いなく惚れてるね！！美人だし、料理うまいし。

その後、夕食の支度をするディゲアさんのお手伝い（実際は未知の料理が出来上がるまでを見学）しつつ、双方の食文化を話したりした。

この家のキッチンは地球のものどさして変わらない。

ガスコンロみたいな調理台の他に、石で出来たかまどもあって、コルはこれの中で焼くのだそう。

ピザとか焼いたら美味しそうだなあ。あのかまど。まあもちろん私にピザを作る技術は無い。

「そういえば2日後に来るそのお家の方ってご家族ですか？」

「いや、父の仕事の関係の者だ。定期的にこちらへ食料などを届けるついでに様子を見に来る。両親は忙しい身なので、王都を離れる訳には行かないんでな」

その日のうちに往復できるみたいなのに、その時間すら作れないなんてちょっと薄情じゃない？

こんな可愛い娘が田舎で一人で頑張ってるっていうのに！！

「デイゲアさんは家族と一緒に王都に住みたいとは思わないんですか？ここに一人じゃ寂しいでしょ？」

「元々は私も王都で暮らしていたんだが、自分からこちらで生活したいと言ったんだ。だから寂しいということは無いな。最初は勝手が分からなくて苦労したが」

苦笑しているところを見ると、今はこんなにおいしい料理を作れる彼女も、最初のうちは包丁で指を切ったり、目玉焼きを黒焦げにしたり、お米を洗剤で洗ったりしたのかなあ。

慣れない作業に四苦八苦している美少女を想像して頬を緩める私。ちよつとアブナイ人みたいだな……。決してそんな趣味は無いから！

作業している間に大分日が暮れて来たみたいで、部屋の中も薄暗くなってきた。

そうすると美少女が何やらポケットから掌に収まる程の小さな金属の板を取り出すではないか。何をするんだろうと興味深く見ていると、彼女はその金属の板を指で軽くなぞった。

途端に部屋がパツと明るくなる。びっくりして天上を見上げると、梁のところどころが発光しているようだ。

聞くと、光を発する素材を梁に使用しているらしい。提灯のような直接には目に入らない光で、なんとも暖かみがある。

あの金属板はリモコンみたいなもんかな。
家はいかにもなカントリーハウスのくせに、ほんと進んでるんだか、遅れてるんだか……………

夕食は再びコル巻き。

今回は具の中身がベーコンみたいな薄いお肉と野菜を炒めたものだ。それとミアンの花のサラダみたいな。生でも食べれるお花だったのか！！

どの料理も本当に美味しい。

デイゲアさん、私のお嫁さんに貰いたいくらいだよ！！！！

夕食が済んだ後、デイゲアさんがお風呂に入るといっているので、私は早々に宛てがわれた部屋に引っ込んだ。

いつもよりも半日も長い一日を過ごしてかなりクタクタだったし。まあ昼寝っばいの取ったけども。

下着はすでに殆ど乾いていた。うん、明日はノーパンから逃れられそう。

携帯を開き、とりあえず今日見聞きしたことを日記代わりにメモしておく。

普段から日記を付けてる訳じゃないけど、ここでの出来事は私にとって未知の体験ばかり（異世界なので当然と言えば当然）なので、自分の頭の中を整理する意味もある。

ほんの半日前には私は日本にいて、代わり映えの無い日常を過ごしていたのに。はあ。

上掛けをめくりベッドに身を滑り込ませると、よほど疲れていたの

か今までにない最短記録で意識が飛んで行った。
とりあえず目指せ王都。オー。

1日目 10(後書き)

ようやく1日目終了です。

次からは2日目になります。

誤字脱字等ありましたら、お知らせ頂けると助かります。

2日目 前編

一応アラームはセットしておいたけど、その前に目が覚めた。いつもと枕が違うから？

そしてやっぱり私が寝ているのはカントリーハウスの中にあるベッドの上。

私の豊かな妄想力が見せたやけにリアルな夢、っていうオチでも別に構わなかったんですけどー。

デイゲアさんがまだ寝ていたら悪いので、なるべく音を立てないように静かに動く。

外はもう薄ぼんやりと明るくなっている。

窓を開けると、ひんやりとして気持ちのいい空気が入って来た。

トイレと洗面を済まし、部屋に戻って軽く化粧をする。

昨日ノーメイクを見られてるんでもうファンデと眉毛だけでいいや。チーフに見られたら怒鳴られること必須の手抜きメイク。

昨日洗った下着を着け、服もワンピースに着替えているとキッチンの方で物音がした。

どうやらデイゲアさんが朝食の用意をしているらしい。

すかさず私も出て行ってお手伝い！

働かざる者食うべからずだもんね。

今日のご飯もおいしそうだわー。

食事の席で、デイゲアさんは私に嬉しい知らせをくれた。なんでも彼女も一緒に王都に着いて来てくれるらしい。

それはなんとも心強い！今のところこっちの世界で私が知ってる唯一の人だし、王都に住んでいたという彼女が着いて来てくれるなら、道に迷ったりという心配もしなくて済む。

それにしても、なんて優しくいい子なんだろう。

私、一番最初に会えたのがデイゲアさんで良かった！。

なんてことは口に出すのは恥ずかしいから言わないけど。

まあ、本当はやっぱり家族に会いたいんだろうな。

さて、明日のいつ頃にお迎えの方が来るのか分からないけど、王都ってどんなところだろう。

やっぱここよりは大分都会なのかな？

「デイゲアさん、あの、今のうちにこの世界のことをもう少し聞いておいてもいいですか？」

「私の知ってる限りのことなら何でも答えよう」

「じゃあまずはこの私たちが今居る国のことをかいつまんでお願いします」

「この国はシューディツカ王国と言う。この世界の中では最も国土が広く、人口も多い。周辺の諸国から様々な商品の集まる、商業の発達した国だ。領土の北を除く三方が海に面しているので、海運も盛んだな」

シューディツカ王国はこの世界でも比較的豊かで自然も多く、穏やかなところらしい。

王国と言いながらも立憲君主制なので、独裁政権という訳でも無いんだとか。

ちなみに王族以外には身分制度のようなものは無く、平民から選出された議員による議会が国王のもとで政治を執り行うというから、民主主義国家と言ってもいいのかな。

「今の国王は在位してもう数十年経つ。気性も穏やかというから、お前のことも悪くはないだろう」

そうか、私つてば国の預かりになるんだもんね。

私の最高保護責任者は国王様になるのか。

まあいきなり面通し！なんていうことにはならないと思うけど、一
国の王様に会えるかも知れないなんてちょっとワクワク。
もしかしたらイケメンの王子様もいるかもしれない。

「この国には今まで私みたいに運ばれて来た人はいるんですか？」

「私が生まれてからは聞いたことはないが、祖父が言うには彼の父、
私の曾祖父の代には居たようだ」

「へえ、結構最近のことなんですね。その人はどんな理由だった
んですか？」

「国家の平定だ」^{へいてい}

「え」

なんだって!?

2日目 前編（後書き）

2日目は2話で終わりです。

毎回1話の長さが適当なんですけど（書き貯めた中で区切ってるんで）読みにくくないか気になってます・・・

2日目 後編

私の前にこの国に運ばれて来たという女性。

彼女の『理由』は国家の平定??

平定って、ことう悪いヤツをやっつけて国を平和にしたとかそういうこと?

なんだか救世主みたいじゃないの。

面白そうなので、少しこの国の昔話に耳を傾けてみる。

まあ昔と言っても80年前程の話らしいけど。

「ーー当時、この国は王制と言いながらもその内部は二派に分かれていた。現国王の派閥と、前国王の子を擁する派閥と。当時の国王は前国王の弟で、まあ簡単に言うなら叔父と甥の王権を巡っての対立だな。前国王が崩御した時、唯一の子であった王太子はまだ幼く、議会は彼が長じるまでその代理として前国王の弟を玉座に上げた。だが、王位に就いた途端に彼は王太子を幽閉してしまった。自分の地位を脅かす者としてその存在を疎んだんだ。」

おおう、対立とか幽閉とか身内でドロドロの展開ですよ．．．．．
まあ日本の歴史でもそういう争いみたいなのはあったもんなあ。
世界は違っても歴史は似たり寄ったりなのね。

「国王はいつしか疑心暗鬼になり、王太子の名を出すものを皆残らず罪人として投獄した。当然国は荒れる。そこへ現れたのが『運ばれて』来た人間だ。この時はお前のような若い女だったというが、

誰もが彼女の現れた『理由』を王の選定だと考えていた。彼女の選ぶ道が即ち神の真意だとも。そしてもちろん国王もそう考えていた。国王はそれは手厚く彼女をもてなした。しかし彼女はその国の状況を憂いて国王を諫め、結果としてそれが王太子派を推すかたちとなり、国王は自害してしまった。」

彼女の周りの人間がエキサイトしてどんどん進めて行っちゃった感はあるけど、その話を聞く限りでは悪者は国王ぽいよね。

「結局、彼女の『理由』はそれだったんですか？」

「ああ、王太子が王位に就いた明くる日に、彼女は元の世界へ帰ったというからな」

「じゃあ彼女は一応自分の使命は果たしたってことですよ。選んだのは王太子で合ってたってことでしょう？」

「……私は彼女が選びたかったのは国王だったのではないか、と思っている」

「なんでですか？」

「歴史書のどこを読んでも、国王を諫めたとはあっても、王太子を選んだとは書いてないからだ。彼女は国王に自分の行いを改め、正しき道に進んで欲しかったのではないか、と」

デイゲアさんの「今となっては確かめようもないことだが」という

ため息のような呟きが耳に残る。

過去にこの国に私のような異世界人が居たことはわかったけど、なんだか気分が塞いでしまった。

自分の行動一つで国を動かす大事になってしまふ可能性があることが分かってしまったから。

私が自分の『理由』かもしれない事件や災難に出逢ったとき、私自身はそんな考えでなくても、周りの人は私の選択を正解だと信じてしまつんだ。

私が運ばれて来た人間ってだけの理由で。

うつうつ．．．．．なるべく人の命に関わらないような『理由』だ
といいんだけど．．．．．

他にも色々はこの国の話を聞いた。

王都はやっぱりこの国最大の都市で、治安もいいので夜でも賑やからしい。

でも過去には戦争があったりして、平和そうに見えるけど国には今も軍隊が居るんだそう。

王都の中心には王族の住む城があつて、私が明日行くのもそのお城皆様聞きまして？お城ですってよ！！

私が今まで行ったことがあるお城なんて、某テーマパークの中にあるやつと修学旅行で行った大阪城だけですよ。

まああの中には王様は居なかつたけど。

明日からの王都入りのために、荷物をまとめるといってディゲアさんでも着替えなんかはあちらにもあるらしいので、そんなに沢山のものを持って行く訳ではないらしい。
私も鞆一個に傘だけ。

あと、洗濯もさせてもらった。

この家にはちゃんと洗濯機があつて、どうも一般に流通しているようだ。

日本の近代化の歴史の中でも三種の神器と言われてるもんね。

電動なのかどうか知らないけど、陶器のようにつるりとした表面の冷蔵庫みたいな外観。

しかもなんと全自動。

中にそのまま吊るしておけばアイロンいらすというから優れものだ。代わりの服を貸してもらい、今着ているワンピースも洗濯させてもらうことにする。

折角の王都入り、しかもお城に行くんだから、可愛い格好してきたい。

もしかしたらイケメン王子様に以下略。

でも王族の人達はやっぱりキラッキラのビラッピラの服を着てるのかしら。

頭の中では18世紀のフランス革命で処刑された有名な王妃様があははうふふと踊っている。

．．．．．思いつきり東洋顔の私にあんな格好は似合わないから、
例え勧められても着たくはないな．．．．．。

家の中の掃除を手伝ったり、ご飯の支度を手伝ったりしながら2日目を過ごす。

いよいよ明日には王都と思うと緊張して眠れないかと思いきや、昨日同様かなりあっさりと寝付くことができた。

やっぱり私の神経、意外に凶太いのもかもしれない。

林の中でブルブル震えてた子鹿のような私、どこ行ったー！

2 日目 後編（後書き）

東洋顔でもドレス似合う人いますけどね！

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

3 日目 1

その時、私はお昼ご飯を食べた後で、満腹感による睡魔をなんとか隅に追いやりながら、日本から持って来たファッション雑誌に目を通していた。

そこへドンドンと大きくドアを叩く音が響いたのだ。

それはもう借金取りってこんな感じ？っていうくらいの剣幕で。

リビングのソファにいた私は驚いて、必死に戦っていた睡魔なんてあつという間にどこかへ行ってしまった。

ちよつともしかしくなくてもこれデイゲアさん家の迎えじゃないの？なんかまだ顔も見たことないけど、怖いです！！

丁度デイゲアさんは自室に戻ったところだったので、呼びに行こうかと腰を上げたところへ、彼女がリビングに戻って来た。助かった！なんて思ったのも束の間。

な、なんか表情が消えてますけど、大丈夫ですかお嬢さんよ。

デイゲアさんは何も言わずにドアを開けた。

それはもう思いつきり。

そして直後に聞こえる鈍い音。

あれ、デジャヴ??

でも今のは絶対わざとだったよね……………?

私はそーっとディゲアさんの後ろの方からドアの隙間を覗いてみた。そこにはちよつとウエーブがかった短めの濃茶の髪をセンター分けにした男の人が、鼻を押さえて立っている。

私の時はおでこだったのに………!!!

いや、私の鼻が低いんじゃない、きつとこの人の鼻がデカいんだと思うことにしよう。

うんうん。

一人で納得顔の私をよそに、その男の人はキツつとディゲアさんを睨みつけた。

マオカラーのグレーのスーツは一見すると学ランのようにも見えるが、着る人のせいかわ所々に施された装飾のせいかわ、まるで上流階級の紳士のようなだ。だが、その男が上品なのは着ている服だけだと気付いたのはその直後。

「今の絶対にわざとだったでしょう!!!」

うわ、背も高いし（事実）鼻も大きい（想像）からか声までやたらと大きい。

こんな至近距離なんだからそんな大声でしゃべらなくてもいいのに。耳が遠いのかしらね。若そうなのに。

「いちいち大声を出すな」

「あなたが俺を怒らせるからでしょうが!!!俺の完璧なフォームの鼻が見るに耐えなくなったらどう責任取ってくれるんです!!!」

「お前の鼻の造作なんぞどうでもいい。ちゃんとその顔に付いてい
るだけ有り難いと思え。それにドアをまるで親の仇の如く叩いてい
たんだ。誰か出て来ることくらい承知の上だろう。それなのに『わ
ざわざ』応えた私を怒るのは筋違いもいいところじゃないのか。恨
むならそのドアを避けられなかった自分の無能さを恨め」

み、耳が痛いです。ドアを避けきれなかった無能な私でごめんなさ
い！

でも私はノックする前だったからその人よりはマシだと思うのよ。

そしてデイゲアさん怖いです．．．．．！！
たった今私の中で、『怒らせてはいけない人』に見事認定されまし
た。

ここからでは後ろ姿しか見えないけど、正面からその顔見たら、私
生まれて来たことを後悔するんじゃないかしら。

だって声だけでも脚が震えそうなほどです！

しかしこの男の人、随分自分のお顔に自信があるみたいね。

大きい（想像）から打っただけの鼻なのに『完璧なフォルム』って、
もし自称だったらナルシスト決定！！

見たところ少し目尻の下がった甘い顔立ちは、いかにも女ウケしそ
うではあるけど、私はあんまり好きなタイプじゃないかな。

「今まではどれだけ言われても王都に戻ろうとしなかったくせに、
いきなり連絡してきて『帰るから艇ふねで来い』って、あれの使用許可
取るのに1日や2日じゃ無理だって知ってるでしょう！！それを説
明も無しに途中で切ったままって、今日俺が来なかったらどうする

つもりだったんですか!!!」

「お前の首が飛ぶだけだな」

男の人はデイゲアさんの返答に肩を落とし、「はあ~~~~」と大きくため息を吐いた。

この短いやり取りでも二人の力関係が如実に現れている。明らかに年下のデイゲアさんに敬語を使っているところからみても、彼の立場の方が弱そうだ。

長いものには巻かれた方が楽なときもあるよ。元気出せ、青年。

未だデイゲアさんの後方で、無言の慰めを送っていた私をようやく男の人の目が捕らえたようだ。

その双眸がみるみるうちに見開かれて、口をあんぐりと開けている。もちろん鼻は赤い。でもそんなに大きくは無かった。

彼は次の瞬間には再びデイゲアさんに向かって詰め寄っていた。

「どういうことですか!!! 前回来た時には居ませんでしたよね!?!? まさか彼女をかこ」

彼女を過去???

何やら彼は話してた途中で突如その口を閉じてしまった。そんなに大きな声で話すから、喉でも詰まったのかな。

「立ち話もなんだ、とりあえず中に入ったらどうだ」

デイゲアさんに促され、彼は家の中へと入って来た。
心なしに顔色が悪い気がする。

血圧でも上がったのかな。怒りっぽい男はモテないわよ。

リビングの方へ来たところで、デイゲアさんが彼を私に紹介してくれた。

「私の父の下で働いてる男で、フィンエルタという。あまり仲良く
しなくて構わない」

「ちょっと！その紹介の仕方は無いでしょう！！」

この人、打てば響くって感じだなあ。
いちいち反応が大きい。

つかからかいたくなるタイプってやつ？

日本にいたらいいツッコミ芸人になりそうなのに。

フィンエルタさんは私の方に向き直ると、デイゲアさんに向けてい
た顔とは打って変わって、にこやかな笑顔を浮かべた。なんだか「
俺に落ちな、ベイビー」と言わんばかり。

でもどんなにカッコつけても、鼻は赤いんですよ。ぷぷぷ。

「初めまして、フィンエルタです。どうぞ気楽にエルタと呼んで下
さい」

「あ、私は妻木立花さいきりつかと言います。今日はお世話になります」

そう言って軽く頭を下げたその上で、「は？」という気の抜けた声
が聞こえて来る。

この時、私は自分の名前をディゲアさんに告げた時のことをすつ
かり忘れていた。

「なんだ、あんた男だったの？俺はてつきり……」

「ち、違います！！女で合ってます！！！！」

そうだった！なぜか私の名前って男に間違われちゃうんじゃない！！！！

3日目 1 (後書き)

3日目開始です。

新たな人物登場で、少しは賑やかになるかと。

3日目 2

私を男だと思った瞬間のエルタさんの顔は明らかにガツカリしていた。口調も変わってたし。

こいつ絶対女好きだ。ディゲアさんの「仲良くしなくていい」っていう発言、あながち冗談でも無いんじゃない？エルタじゃなくてエロタって呼んでやろうかな。もちろん心の中で。

「彼女は『運ばれて』来たらしい。今回お前に艇ふねで来てもらったのは、彼女を王都に連れて行くためだ」

「そういうことですか。しかし異世界の名前は変わってますねえ」

名乗るだけで男に間違われるって、ほんと私の名前大丈夫かな . . .

英語圏に留学した友達が、自分の名字が『f u k y o u r m o m』に聞こえると言われて嘆いていたエピソードに当時の私は大笑いしたもんだけど、今ならその気持ちわかるよ

今から出れば日暮れには王都に着くというので、早速荷物を積み込むことにした。

私の荷物は大したことないのに、エルタさんは手伝うと言って私に着いて来る。

それよりも自分の上司の娘であるディゲアさんを手伝えれば良いのに。

結局片手で事足りる荷物なので、エルタさんの手は借りなかった。私の手にある傘を見て、彼が不思議そうな顔をしていたのには気がついたけど、雨の説明とか面倒だし、どうみてもこの人は感傷的な話には向いてなさそうなので、敢えてスル！。

この話は私とデイゲアさんだけの秘密だもんね！へん！！

荷物を持って外に出ると、何やら大きなものがデントツ！！と家の前を占拠している。

パツと見た感じでは、ちょっとメタリックな黒色の大きな自動車に似ているけど、タイヤが一つも無い。

エルタさんがその表面でなにやら操作すると、側面の部分が自動ドアのように横にスライドして開いた。

「どうぞ乗って下さい」

エルタさんがそう言って手を差し出してくれたことにも気付かず、私は間抜け面でその自動車もどきを見つめる。

「もしかしてお前の世界には艇ふねが無いのか」

「……探せばあるのかもしれませんが、私は見るのは初めてですね……」

さっきから二人の会話のところで「ふね」っていう単語が聞

こえてたから、てつきりどこかの港で船に乗り換えるもんだと思っ
てた。
だってここには川も海もない。あるのは地平線まで続くお花畑なん
だよ？

「艇ふねというのは飛行艇のことだ。これは小型のものが、公共の大
型飛行船もこの国では珍しくない。王都に行けば見る機会もあるだ
ろう」

へえ。空路がかなり発達してるってことかな。

ちなみに生活区を覆う保護膜みたいなのが空にもチューブのように
走ってて、揺れたりはあるまいしないらしい。

ジェットコースターの苦手な私には、有り難い話だわ。

飛行機は嫌いじゃないけど、あのエアポケットの揺れとか本当に勘
弁して欲しい。

私は帰れることが前提の上、『理由』を解決するまではこの世界に
必要な人間らしいから、事故とかの心配は無いんだろうけど、心臓
に悪い思いをしなくて済むならそれに越したことは無い。

艇ふねの中は意外に広く、2席ずつの3列シートで、最前列の2つは操
縦席縦席みたい。

そこにエルタさんが乗り込み、対面になっている2列目にデイゲア
さん、その向かいに私が座る。

「ここからだ王都は南東の位置になる。まずは南下して、そこか

「海沿いに行く予定だ」

折角空を飛ぶっていうのに、なんで最短距離で行かないんだろうと思ったら、さつき言ってた保護膜のチューブが走ってるところしか飛ばないので仕方ないんだとか。

日本に居た時も電車乗ってて「なんでここここ直通してないの！？」って思ったことあるけど、そんな感じかな。

「それじゃあ出発しますよ」

というエルタさんの一言で、艇^{ふね}は静かに動き出した。

外を見てみると、胴体の上部からよつと主翼のようなものが！そして一瞬の後、ふわりと上昇するとまるで新幹線のように滑らかにスピードが上がって行く。

あっという間に林が小さくなって、一面の花畑しか見えなくなった。前方に目を向けると、既になにやら建物がいくつも見える。

地上に居た時は地平線まで続いていた花畑も、すごい早さで飛んでいる飛行艇ではあっという間に通り過ぎてしまふみたい。

歩いて半日の距離が、ものの数分……

デイゲアさんの家から一番近いという町は、町と言うよりは集落という感じ。

周りは花畑なのか畑なのか、四角く区切られた緑の絨毯が広がっている。

そしてそれもすぐに見えなくなった。

3 日目 3

しばらくすると、向こうの方が何やらキラキラとして来た。
もしかして海!?

海を見るとなんだかウキウキするのは日本人の性さがだと思っのよ。

「ここはリカラという街だな。街の規模としては中堅だが、海運の要所なので港は大きい。ほら、たくさん船が泊まっているだろう」

「わあ!!!すごい大きい船ですね!!!」

海の傍にはデイゲアさんの言う通り港と、それに付随するように周辺には建物がいくつもある。

港には貨物船のような大きな船がいくつも泊まっていた。

空からでもその大きさが分かる。

その他にも大小様々な船が泊まっていて、中には海賊船のような帆船も見える。

普段こういった船を見慣れていない私は、すぐにその風景に釘付けになった。

日本は海に囲まれた島国だけど、意外に船に乗る機会は少ない。そもそも海に行くのだって、海水浴かデートでくらいのもんだし。そのデートも彼氏いない歴ウン年の私。そこは察して頂きたい。

しかしここからはずっと海沿いに行くので、そのうち船はさして珍しくもなくなっただけ。

海沿いには当然なのか知らないけど、そこそこ大きい街がいっぱいあった。

道路のような道も走っているし、高層というほどでも無いけどビルのような建物もある。

所々にビーチらしきものもあり、そこは異世界でもかわらず人で賑わっていた。

こうやって空から見る下の風景は、私が異世界にいるということをおぼろげに忘れるくらい地球のものと似ている。

まあ細部が見えないからそんなもんか。

陸路を行ってたら驚きの連続だったかなあ。

デイゲアさんもエルタさんもどちらかと言えば西洋系の顔立ちをしてるから、この国の人の容姿はきつと西洋人に近いんだろう。

歩いてる人を見て「おお外国に来たみたい」とか思ったりは確実にしてそうだな。

上から見るとあんまり異世界という感じもしないので、すぐに外を眺めるのに飽きた私は、窓にへばりつくのを止めた。

私ってばちょっと子どもっぽかったかな。大人気なく外の風景に夢中おとなげになっただけなんかにして。

デイゲアさんは孫を見るおばあちゃんのような眼差しでこっちを見ていたけど、座席に深く座り直した私に気付き「おや」という顔をしました。

「もう外を見るのはいいのか？」

「うーん、こつやって上から見ると私の世界とそんなに変わらないんですよねえ」

「へえ、サイキリツカ様の世界はここと似ているんですか？」

「まあ、上から見る限りでは、ですけど」

どうやら私とディゲアさんの会話を聞いていたらしいエルタさんが、そんなことを聞いてきた。

っていうかなんでフルネーム。

しかも様付けとか。仕事で自分がする分には慣れてるけど、私は別にエルタさんのお客様でも何でもないし。

むしろ私がお世話になっているのに！！

「無駄口を叩いてないでお前は運転に集中しろ」

おおつとディゲアさんバツサリですよ。

「別にいいじゃないですか。俺だって異世界の話を聞きたいですよ」

「それなら伝記を読め。そつだ、お前はもっと活字を読んだ方がいい。王都に着いたら私がいくつか見繕ってやるつ」

「ええええ！嫌ですよ！！今までの運ばれて来た人の話なんか、歴史で習ったのばっかじゃないですか！！」

「その歴史もろくに頭に入っていないくせによく言う」

「つぐ……………」

はいデイゲアさんの勝ち。

にしてもこの二人の会話ってなんか漫才みたい。

よくあんなにぼんぼん言葉が飛び出すわね。

実はちゃんとネタ合わせとかしてるんじゃないの？

私が二人のやり取りに感心してる間に窓の外の様子が変わって来た。
海岸線から少し離れ、内陸の方に入って行く。

おお？

おおおおお？

「……………高層ビル……………」

3 目 3 (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

なんと眼下には東京の霞ヶ関にも負けず劣らずの高層ビル群が！！
いや、東京よりもすごいかも？？

だってニヨキニヨキと伸びるビルはともかく、そのビルの間を行き
交う飛行物体は東京には無い。

私たちの乗っている艇ふねと違って主翼は付いていないけど、小型のも
のも大型バスのようなたくさんの人が乗れそうなものもある。あれ
が飛行船なのかな。

なんか未来都市って感じ…………。

あのカントリーハウスは何だったんだというくらい、こっちは文明
が発達している。

ここからあの林の中の家に移り住んだというディゲアさん。
あれか、Uターン志向なのか。

「もうこの辺りは王都の一部だな。城までもうすぐだ」

「このままお城に行くんですか？」

「そうだな。城には艇ふねを着ける場所が設けてあるから、直接行って
も支障はない」

てつきり先にディゲアさんのご両親のところへ寄ると思ってたんで、
ちよつと拍子抜け。

さぞかし美男美女のご夫婦なんだろうなと期待してたのに。

そう言うと「私の両親に会う機会もそのうちあるだろう」とのこと。
一応紹介してくれるつもりではあるらしい。
そうよね、娘を迎えに来ることも出来ないくらい忙しくしてるって
言っただから、今日いきなりお邪魔するのも迷惑よね。

「城が見えて来ましたよ」

エルタさんの言葉に視線を前方に移すと、確かに周りのビルとは少し
違った様相の建物が目に入る。

3棟の背の高い菱形のタワーのような部分の周りを、なだらかに曲
線を描いた建物を取り囲んでいて、その両端にまた少し高い半月刀
みたいな形の建物がくっついている。

城というよりは新進気鋭のデザイナーが手がけたランドマークタワ
ーと言われた方がしっくりくるような。

でもさすがに他のビルとくらべて装飾的な部分が見られる辺
り、王様が住んでるんだなーって感じ。なんというかオーラがある
ような気がする。

「王族ってそんなに大家族なんですか？お城、かなり大きいですよ
ね」

「城は王族の居城であると同時に、政治の中枢でもあるからな。他
に軍部もこの中にある」

「今ここに住む王族なんて10人居るか居ないかってとこですね。
傍系の方々は他に邸を下賜されてそこで暮らしてますから」

そっか、王族って言っても直系しか住んでないんだ。

確かに王様のおじいさんのいとこの孫の孫とかまで全部住んでたら大変なことになりそうだもんね。部屋がいくらあっても足りないだろうし、お世話する人の数もそれだけいっぱい必要になるからお金かかりそうだし。

．．．．．なんか考えが庶民丸出しだわ。いや、庶民に庶民以外の考えの何があるって言うんだ！

艇ふねは徐々に高度と速度を落とすと、半月刀の中程から外へ少し突き出している部分に近づいて行く。

どうやらあそこが乗り入れる場所らしい。

エルタさんは軽そうな見た目に反して艇ふねの操縦の腕は確かなようで、不快な揺れは少しも感じることなく着陸した。

人間何か一つくらいは取り柄のあるものなのね！。

さて降りますか、と思ったらまだ動いてた！！びっくりした！！！外に突き出した部分から大きく開いた半円形のゲートの方へ、すーっと艇ふねは吸い込まれて行き、完全に中に入ったところでやっと止まる。

「もう立ってもいいぞ」

笑ってもいいですよ、デイゲアさん。不自然に頬のあたりの筋肉が動いてますから。

さっき私がビクってなったの、絶対気がついてましたよね？

気を取り直して荷物を手にしたところで、外からドアが開いた。

またビクってなる私。ドアには良い思い出が無いからかもしれない。ドアを開けてくれたのは、エルタさんのスーツに良く似たワインレッドの服を身にまとう男の人。30代後半くらいだろうか。アッシュブ라운の髪を後ろに撫で付けていて、背筋をピシッと伸ばして立っている。

「お待ちしておりました、ディゲア様」

「久しぶりだな、オルティガ。しばらく世話になる」

なんと二人は知り合いらしい。

そしてディゲアさんも様付けされてるよ!!

ディゲアさんてば実はいいとこのお嬢様なんじゃ

「それで、こちらのお嬢様はディゲア様のお客様ですか？」

おおおおお！今たった一言の中に『様』が3回も出て来たよね？？そしてそのうち2回は恐らく私に対して使ってくれたっばい。もうお嬢様っていうような年でも無いんで、ちょっと申し訳ないわ！。

「彼女は運ばれて来た者だ。私の家の近くへ落とされたらしい。まずは旅の疲れもあるだろうから部屋を用意してくれ」

「かしこまりました」

オルティガさんは「ご案内致します」と言つと私の荷物を手に歩き出した。

やっぱり傘には一瞬目を止めたけど、特に何も聞いてはこない。プ
口っぱいわあ。

オルティガさんの後ろをデイゲアさん、エルタさんと着いて行く。
いよいよお城の中へと入って行きますよー。

まず艇ふねの発着場みたいな場所から自動ドアのような両開きのドアを
抜ける。

さっきまでは建物の内部と言ってもガレージのような感じで、今度
はピッカピカの床の広い廊下だ。

廊下を少し歩くとエレベーターらしきものがあり、それに乗る。

私たちが居たところは40階。そこから一旦10階まで降りるら
しい。

「あんまり驚かないようだが、お前の世界にもこういった技術はあ
るのか？」

「動力は違つかもしれないけど、同じようなものはありますよ。私
の仕事場にもあります」

「その割には王都に入った時はビルに驚いてませんでした？」

「それはあまりにもデイゲアさんの家のあたりと違うんで、びっくりしたんですよ。もっとおとぎ話の中の世界みたいなのかなーと思ってました。ビルは私の世界にもいっぱいありますね。でもビルの間を飛ぶ飛行艇はありません」

「それは随分不便そうだな。高層ビルがあるのにそれを行き来するのは大変じゃないのか？」

「一旦地上まで行って、それから歩いたり公共の交通機関を使って移動してました」

そう言うとデイゲアさんもエルタさんも不思議そうな顔になる。ちなみにオルティガさんは聞いてませんよーって顔で直立不動のまま。

「その地上を走ってる公共の交通機関をなんで飛ばさないんだ」

「地上で必要なもの分かりますよ。こっちでもシャトルとかありますから。でもやっぱり艇ふねが無いのは不便ですよね」

「『飛ばさない』というよりは『飛ばせない』って感じですね。まだそこまでの技術が私の世界には無いんだと思いますよ」

「まあ傘を使うぐらいだからな」

「ですねー」

そう言って笑い合う私とデイゲアさんを見てエルタさんは首をかしげた。

「なんですか、『かさ』って」

「教えませんよ！私とデイゲアさんだけの秘密です！」

「そうやって隠されると却って気になるじゃないですか」

「でも教えません！！」

エルタさんはまた甘ったるい笑顔を向けて来たけど、私が一向に説明する気がないと知ると、それ以上は聞いて来なかった。

私が『秘密』と言った時に、デイゲアさんは嬉しそうにしてたらしいのだけど、エルタさんに気を取られていた私は全くそのことには気がつかなくて、偶然にも目撃してしまったオルティガさんは大層驚いたのだとか。

エレベーターを降りて、歩いて、また違うエレベーターに乗って、降りて、また歩いて……

私は自分の現在位置がとつくの昔にわからなくなっていた。

目隠しをされていなくても来た道を戻れないと自信を持って言える。旅の疲れを取るために休む部屋へ行ってるのに、その道中のほうが遥かに運動量が多いです。

途中で何人がここで働いてると思わしき人にも出くわしたけど、みんな会釈するだけで話しかけては来なかった。

私の後ろを歩くエルタさんは女の人には全員もれなく挨拶をしたけど。それはもう老いも若いも関係なく。さすがエロタ。

目的の部屋らしい場所に通された時には、私はかなりヘトヘトになっていた。

やばい、年かな……

この2日間ほとんど運動らしき運動もしてなかったしね。

その割には日本に居た時よりもちゃんとした食事を三食しっかり食べてたし……

「こちらの部屋で自由になさっていて下さい。今お飲物をお持ちします。何かお食事も召し上がりになりますか？」

「夕食には少し早いな。軽いものを適当に持って来てくれ」

「ではこちらの部屋にお持ちしますので、少々お待ち下さい」

短いやり取りの後、私の働く百貨店の支配人も顔負けの完璧なお辞儀をして、オルティガさんは出て行った。

部屋はホテルのスウィートルームのように、リビングルームとベッドルームが別になっている。この辺はさすがお城ですな！

内装はそこまで華美ではなくて、色使いもブラウン系の落ち着いた配色。

あるだけでそこを迂回したくなるような高級そうな壺とかも無いし。庶民の私でも普通に生活出来そうで安心安心。

私は荷物を壁際のチェストに置いて、部屋の中央に配置してあるソファへと腰を下ろした。

デイゲアさんも私の向かいに腰を下ろしたけど、エルタさんはソファの近くで立つたままだ。

「エルタさんも座ったらどうですか？」

「いや、俺はこのままで大丈夫です。一緒の席に座ったりなんかしたら今日にでも職を失いますんで」

そうか、デイゲアさんのお父さんの部下なんだっけ。

確かに私がデイゲアさんのお父さんでも、エルタさんが自分のかわいい娘と同じソファに座るのはちょっと嫌かなあ。

「じゃあ私の隣ならどうですか？」

「それもちょっと無理ですね．．．．．」

エルタさんは、何やら苦笑いをしている。

そりゃこんな平凡顔の私の隣なんて嫌かもしれないけど、「無理」
って言うことないじゃん！

もうちょっとこうオブラートに包んだ言い方してよね。じゃあどう
言えばいいかと言うと思えば浮かばないけど。

「あの男のことは居ないものと考えてくれていい。どうしても気にな
るようなら廊下にでも立たせておくが」

「いえいえ！そこまでしなくてもいいですよ！！」

デイゲアさんのお心遣いは有り難いけど、廊下に立たせるとか今時
学校でもそんなことしないわよ。

確かに同じ部屋で立ってられるのも気になるっちゃ気になるけど、
廊下に立ってるのかと思うともっと気になるって。

私が断るとちょっと残念そうなデイゲアさん。

エルタさんてばこんなに嫌われるなんて、何かよからぬことでもし
たんだらうか。

確かにデイゲアさんはそんじょそこらじゃ見ないような美少女だけ
ど、やっぱり嫌がることはしちゃいけないと思うのよ。

顔が規格外に美しいのも考えものよね．．．．．デイゲアさんも
苦労してるんだらうな。

何故か3人とも黙ってしまった部屋に、コンコンというノックの音が響いた。

すかさずエルタさんが扉を開くと、そこには数人の女性を従えたオ
ルテイガさんの姿が。

女性のうちの一人はワゴンのようなものを押している。

が、それにもタイヤが無い!!浮いてるよコレ!!!

まさかこの一見普通そうな女性がすごい握力で持ち上げてるとかじやないよね!?

私がワゴンに気を取られている間に、女性達はテキパキとソファセ
ットのテーブルにお茶の用意をしていく。テーブルの中央にはいく
つかの皿が並べられ、それぞれに美味しそうなお菓子やら、果物を
カットしたようなものが載っている。

好きなものを取り分けてくれると言うので、適当にお皿に盛っても
らった。

私をもぐもぐとおやつを食べ始めたところで、ディゲアさんもテイ
ーカップを口に運ぶ。

いや、ほんと絵になるわ。

ディゲアさん家の素朴なカップもよかったけど、このいかにも王室
御用達です!って感じの高級そうなティーカップは、彼女の髪と同
じ金の縁取りに、瞳と同じオレンジの花が描かれていて、まるで彼
女の為に誂いしえたようにとてもよく合っている。

「この後はどうなっている」

「はい。四元老の皆様が面会を希望されておりますので、お嬢様の

「都合がよろしければ本日中に席をご用意させて頂く予定です」

「面倒なことは早々に片付けて置くに越したことは無い。夕食の前に済ませておくか」

「ではその様に。お嬢様、しばしこちらにてお寛ぎ下さい」

デイゲアさんとの会話を端的に終わらせ、私に向かってまたあの完璧な礼をすると、メイドさんたちを残してオルティガさんは去って行った。

あの人の動きはまるで無駄が無い……………日本にいたらホテルマンとか似合いそう。あ、それよりも社長秘書とかかな。あくまでもイメージだけだ。

「この後、四元老に会ってもらおう。政府の最高官僚だな。お前が運ばれて来た人間であるかどうかの確認も行われるだろうが、私も同席するし堅苦しく考えることはない」

「いきなり最高官僚ですか……………そうは言われても緊張しますよ。服とかこのままでも大丈夫ですか？失礼じゃないですかね」

「特に支障はないだろう。来た時の格好のままのほうがいいだろうから、その服でいいんじゃないか」

ワンピースの裾をピラッと持って確認。

「一応昨日洗ったし、素材もそんな悪くはないと思うのよね。」

しかし部屋着で寛いでる時に飛ばされなくて良かったな、私。

プリントの褪せたTシャツに膝の出たスウェットパンツを穿いて、
ノーメイクでからあげをつまみにビール飲みつつDVDを見る私を
想像して、しみじみ思う。

飛ばされたのがあと1時間遅かったら、私あの格好でおエラいさん
に会わないといけなかったのか……………。
名前で男に間違われるより前に、女であることを疑われそうだわ。

「俺もその服、サイキリツカ様にとてもよくお似合いだと思います
よ」

にこにここと笑うエルタさんの一言に、部屋に居たメイドさんたちが
一瞬ギョっとした顔を見せた。

ああ、やっぱり名前か……………。

「あの、様づけは別にして頂かなくてもいいんですけど……………。
私そんな大層な身分でも無いし。あとフルネームで呼ばれるのも
ちよっと違和感があるというか」

「国王陛下でもあなたを裁くことは出来ないのに、恐れ多いですよ」

「じゃあせめてフルネームはやめてもらえませんか？」

「どれが姓でどれが名なんだ？」

「妻木が名字で、立花が名前です」

「ツく……………」

デイゲアさんの問いに答えた途端、いきなり呻くような声が聞こえたので、後ろを振り向くとエルタさんが口に手をあてて震えていた。なんか笑うのを我慢してるっぽいような……..
メイドさん達もみんな目線を反らして肩を震わせているし。
ちよつと私の名前とだけヤバイのよー!!

「えーつとじゃあ、サイキ様、とお呼びしますね。そっちのがまだマシだ……..」

「はい、それをお願いします」

後半部分がよく聞こえなかったけど、名字に様付けなら接客業では普通にあることだし抵抗は無いかな。

どうせここにいる「妻木」は私だけだろうし。

3 目 5 (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

3日目 6

お茶とおやつを楽しんでいるところに、またまた違うメイドさんが二人やって来た。

今度は何か衣服のようなものを手にしている。

「ああ、着替えがないと言っていたから用意させた。当座のものがやはり私の服よりはいいだろうからな」

「ありがとうございます。助かります」

「サイキ様、今までデイゲア様の服着てたんですか？」

「だって着て来たこの服しか無いんだから仕方ないじゃないですか。毎日同じ服着る訳にも行かないし。さすがに下着までは借りませんでしたけど」

「……………ッゲホゲホ!!!」

デイゲアさんが咽せた。

「すいません、お茶とは言えど飲食をしてる時に下着の話は汚かったですよね。ほほほ。」

「あはははははは!!! デイゲア様、顔が真っ赤ですよ!!!」

「うるさい!!! お前は黙ってる!!!」

わあ。ディゲアさんが怒鳴ってるよ！

なんかさつきから珍しいディゲアさんばかり見てるなあ。

でも顔を真つ赤にしてブンブン怒ってるところも、ポスターにして壁に飾っておきたいくらい可愛いんだから困る。

「……………私の家では不便をさせてしまったようですまなかつたな。ここでは入り用のものがあれば、何でも言えば良い」

「とんでもないですよ！着替え貸して頂けただけで十分でしたから」

「しかし、やはり自分の服が無いと困るだろう。欲しいものが無ければ買って来させるし、店の者をここに呼んでもいい」

「いやいやいや、どこのセレブですかそれ！！」

私はこの世界のお金は持ってないから、お城で用意してもらっていろいろ好意には甘えさせてもらうけど、どうせなら庶民平民クラスのものにしてほしいかな……………。

私の服を買う基準は、「家で洗濯出来るか」「着回しが出来るか」の2点が重要ポイントなんで。

「それなら明日にでも城下に買い物に行かれたらどうですか？女性はその好みがあるでしょうし、サイキ様も王都見学したくないですか？」

「あ、その方がいいですね。この国の街とかお店とか見てみたいかも」

「じゃあ後で案内に行かせる人間を選んでおきますね。どんなものを見たいのか希望とかあったら遠慮なく言って下さい」

「私、向こうの世界では百貨店デパートで働いてたんですよ。そういうのってこっちにもありますか？」

「デパート以外にも、大型のモールなんかもありますよ。女の子に人気の店がいっぱい入ってるって、調べておきますね」

「お前はそういうことには本当にそつが無いな……」

「やっぱりプレゼントするなら喜ばれますからねえ。こういう情報はいくらあっても困りませんよ。デイゲア様も少くらしい女性の好みに興味持っていないと後々苦労するんじゃないですか？なんなら俺がオススメのお店とかレストランとか特別に教えて差し上げてもいいんですけど」

「この先いつか必要になったとしても、お前の助けだけはいらんな」

デイゲアさんはいつもパンツルックだし、確かに女の子らしいものは一つも持っていない。

でもそれを補って余りある美貌があるんだし、おしゃれなんて自分がしたい時にすればいいと思うんだけどねえ。

女好き（ほぼ確定）のエルタさんからしたら、デイゲアさんが着飾らないのが勿体ないのかな。

……ハッ！！もしかして自分好みに女の子を育て上げると

いう『紫の上計画』……………!!!?

「わ、私はデイゲアさんはこのままでも十分素敵だと思います!!」

「は?」

「え?」

「ん?」

あれ?私なんか変なこと言った?

エルタさんは「この子いきなり何言ってるの?」って顔してるし、
デイゲアさんは何やら固まっている。

もしかしなくても私が空気を読んでいなかった?

一応エロタの魔の手から美少女を守ろうとしたんだけど……………

またしても3人で沈黙。

誰かこの空気を壊して!!!

私の心の叫びが届いたのか、そこへ再びオルティガさん登場。

この部屋のなんとも言えない空気に気がついていないのか、敢えて
無視してるのか、「面会の席が整いましたのでご案内致します」と
だけ言うとドアの方へ行ってしまった。

もうちょっとこの雰囲気をや〜んわりほぐして欲しかったかなあ……………

3 目 6 (後書き)

ちなみに身長は エルタ>オルティガ>ディゲア>立花 です。

3日目 7

再びお城の中を移動、移動。

今回はさつきよりも短く済んだ。

それでも私はもう道がわからないけどね！

通されたのはふっかふかの絨毯が敷き詰められた、重厚な雰囲気の一部屋。

私に用意された部屋と違って装飾も多いし、高そうな壺もある。置いてある調度品も機能性よりは装飾性重視っぽいし。

部屋の中央には応接セットだろうか、木製らしい長いテーブルを間に向かい合わせに4脚ずつのチェアが並べられている。

そして天井には見事なシャンデリアが！初めてこっちでちゃんと照明器具を見た気がするわ。

部屋の中には4人の男女が立っていた。男の人が3人、女の人が1人。

「お待ちしておりました、運ばれて来た方。どうぞお掛け下さい」

そう言って3人の男の人の中でも一番若い、40代くらいの方が席を勧めてくれた。

テーブルを挟んで向こうに4人、こちら側にディゲアさんと私が座る。

「私たちはこのシューディツカ王国の元老を努めております。右から西元老のレイジエ、東元老のニージーク、北元老のバルデナ、そして私が南元老のエイカーと申します。一度に名前を覚えるのは大変でしょうから、それは追々」

西のレイジエさんはくるくるの白い髪に白いヒゲ。誰かに似ていると思っただらサントクロースに似ているんだ！なんか一気に親近感。優しそうなおじいちゃんって感じ。

東のニージークさんは紅一点。年は50代行ってるかなーという微妙なところ。襟口の大きく開いたドレススーツや良く手入れされた赤毛は見る人によつちや35、6歳？なんて言いそうだけど私の目はごまかされないよ。

北のバルデナさんはいかつい体つきに短い墨色の髪で、いかにも軍人ぽい。目つきも鋭いし。年はニージークさんと同じくらいかな？

そんでもって南のエイカーさんは薄茶色のさらさらの髪の毛を軽く流しただけの爽やかな雰囲気。この4人の中では実年齢だけでなく格好も一番若い。黒っぽい襟の高い上着に同素材のベストとストラックス、そして水色に銀系でピンストライプの刺繍のされたシャツを着ていて、政府高官よりも青年実業家と言われた方がしっくりくる。

「まずは貴女が本当に異世界より運ばれて来たのかどうかの確認をさせていただきます。中には特権を目当てにその名を騙る輩が居る可能性もありますので、通例だと思って下さい。ではレイジエ、照合をお願いします」

「はいはい。ほいじゃあお嬢さん、ちいところらへ手を出しても
らえますかい」

そう言つてレイジエさんが何やら金属板かプラスチック板のような
ものを出して来た。

大学ノートくらいの大ささのそれは最近巷で流行しているなんとか
パッドに似ていて、片面がスクリーンのようになっている。

言われた通りに右手を差し出すと、レイジエさんはそのスクリーン
に私の手のひらをペタっとくっつけた。

するとスクリーンがポアッと一瞬緑に発光して、すぐに消える。

なんかSF映画みたい。スペースシップのドアがシュイン！って開
いたりしないかな。

レイジエさんは私の右手を離すと、なんとかパッドに似た物体のス
クリーンを確認しだした。

なんだろ、指紋ならぬ掌紋照合？

「やはりこの国のみならずどの国にも登録はされておりませんのう。
国境も入国管理局も通過した記録もありませんし、これはやはり運
ばれて来たと考えるのが妥当ですなあ」

「彼女は私たちの世界には無い技術の知識もあるし、まず間違いな
いだろう」

おおつとディゲアさん、フォローのつもりかも知れないですけど、
こつちの世界にない技術の知識って、もしかしなくても傘じゃない
ですよね……？

どちらかと言えばあっち（地球）に無くてびっくりした技術の方が多いです。

「登録がないなら确实でしょうね。それで、ディゲア様が保護することになった経緯いきさつというのは？」

「あ、私があがついたら居た場所というのが、ディゲアさんのお家がある林のすぐ外だったんです。他にはお花畑しかなかったので、林の方に行ってみたらお家に辿り着いたんですよ」

「あの辺りは確かに他に民家は無いですわね。それにしてもディゲア様、彼女を保護したのは2日前だったとか。すぐに連絡を下さればよろしかったのに。何かそう出来ない理由でもありましたの？」

何やら意味深な笑みを浮かべて、ニージークさんが会話に加わる。ちよつと感じ悪いんですけど、そのチエシヤ猫みたいな笑い方。目尻の小じわが増えるよ。

「今日フィンエルタが来ることは以前から決まっていたからな。わざわざ1日早めることもないだろうと思つてのことだ。特に他意は無い」

「それこそ、連絡を頂けましたらフィンエルタなどを遣るのではなく、もっと丁寧に迎えに上がりましたわ。運ばれて来た方は国賓も同然。それを小型の艇ふねでお連れした挙げ句に、わたくし達へは城へいらつしやるまで知らせて頂けないなんて、ディゲア様も意地が悪いじわるいまますわね」

「まあまあ、こうして無事に城にお迎えできたんじゃないですかのう。過ぎてしまったことをあれこれ言っても仕方ないですわい」

ネチネチと嫌味を言うニージークさんを、レイジエさんがやんわりと止めに入ってくれた。助かります、おじいちゃん。

このおばさん、あからさまでは無いけれどじわじわと締め上げるような意地悪さを感じるわー。こういうクレーマー居る居る。

「どうやら彼女が異世界より運ばれて来たことも確かなようですし、煩雑な手続きはさっさと済ませてしましましょう。運ばれて来た方、お名前を伺ってもよろしいですか？」

「うっ．．．．．名前、ですか．．．．．？」

どうしよう、別に自分の名前を恥じちゃいけないけど、また男に間違われるのはイヤだし、さっきのエルタさんの反応からしていい意味では無さそうだし．．．．．。

ちら、と隣に座るデイゲアさんを見る。

彼女は横目で私を見ると、ついと顎をあげて「言え」みたいに促して来た。

言いますよ言いますよ。言えば良いんでしょうよ。

3日目 7 (後書き)

次で3日目終了です。

「……妻木立花です……」

そう言った途端の4人の顔はある意味見ものだった。

ニージークさんは拍子抜けという顔をしたし、エイカーさんも冷静そうにしてたけどその目を見開いていた。

レイジエさんはなんか「ほほお」とか言って感心してたなあ。

そして意外にも一番落ち着いてそうなバルデナさんが一番驚いていた。

今まで小難しそうに引き結ばれていたその口が、「私の握りこぶしなら入るんじゃない？」と思わせるくらいにパカーンと開いていたんだから。

「あ、性別は女ですよ！でも名前で男の人に間違われちゃうみたいなんですよね」

「いちいち訂正するのも面倒なんで、姓である『サイキ』を通称とするのがいいとさつきも話していたんだ。問題はあるまい」

「それでは登録名は『サイキリツカ』様で、備考として通称名『サイキ』様を追記しておきましょう。城の者には通称名のみを伝えておきますので、誤解を生むことも無いかと」

じゃあこれから誰かに会う時は「サイキです」って名乗っとけばいいってことかな。了解。

『立花』の部分は日本に置いて来たとても思つとこ。
帰るまでの間だけだしね。

「それではサイキ様、本日は先ほどお通ししたお部屋をお使いになつて下さい。お名前を登録させて頂いたので、城内をご自由にご覧になつてもよろしいですよ。例え国家の最重要機密を取り扱う部署であつてもその範囲です。ただ、王族の居室と、どなたかが滞在中の客室については、お手数ですが許可を取って頂く必要がありますのでご了承下さい」

国家の最重要機密……

もし私がそれを他国に流したりしたらどうすんのよ。

恐らくどれが機密事項かどうかなんて、この国のどこるか日本の政治にもちんぷんかんぷんな私には知りようがないから杞憂だけど。でも汚職の証拠や裏帳簿を発見してしまったとかで、寝首を掻かれる事態はゴメンですよ！例え命の心配がなくても怖い思いはしたくない！！

「これで終わりなら私たちはここで失礼するが」

「もしよろしければこの後にもわたくしが城内をご案内させていただきますわ。如何ですか、サイキ様」

「え〜つと、今日はもう疲れたので、お城の見学はまた今度にします。案内が必要な時はこちらから言いますんで。お気遣いありがとうございます」

もし案内してもらおうにしても、ニージークさんはちょっと勘弁。精神衛生上よろしくない気がする。彼女に案内してもらおうくらいなら、ちょっとくらい愛想が無くてもいいからオルティガさんにもらう方がいいです。

しかしお断りした後も「では是非お声を掛けて下さいませね」と念を押して来る。しつこー！

全然気のない男性に食事に誘われた時のように面倒くさい。今のとこ城で出くわしたくない人ナンバーワンだなあ。

四大老に軽く会釈してとつと退室。

道中でデイゲアさんとはお別れ。彼女は両親のところ顔を出すらしい。

それが目的の一つでもあったから仕方ないけど、ちょっと心細い。でも時間を見つけてまた会いに来てくれると約束してくれた。やっぱり優しいなあ！デイゲアさん！！

オルティガさんが付けてくれたメイドさんには早々に下がってもらい、3日目の日記を書き書き。

今日はいっぱい人にあつたから書くことも多い。それに何と言っても王都に到着。

私の帰宅に一步近づいたと言ってもいいのかな。

早く『理由』が見つかりますように。

3日目 8 (後書き)

ようちやく3日目終了です。

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

4 目 1 (前書き)

そこまで下品ではないと思うんですけど、下着の話が出て来ます。

朝食の後のお茶を頂いているところに、エルタさんが一人の女性を連れてやってきた。

「サイキ様、おはようございます」

「おはようございます」

「昨日話していた城下への案内役を連れて来たんで、紹介させていただきますね」

そう言っただけで一緒にやって来た女性を私の前へと促した。おやおお。これまた美人さんですね。

デイゲアさんはいかにも正統派の美人顔なだけで、この人はちょっと釣り気味な瞳とかぼてつとした唇が小悪魔っぽい。

ピンクがかかった茶色のような不思議な色の長い髪は、ゆるくウェーブしながら背中に垂らされていて、服はエルタさんやオルティガさんの着ているのに良く似たマオカラーのスーツ。色はロイヤルブルーですらつとした彼女にとてもよく似合っている。下が白のパンツだったらあの有名な男装の麗人そっくりだったのに。惜しい。

「近衛隊王室師団のアイヴンと申します。本日よりサイキ様付きの護衛及び侍従を務めさせていただきます」

「……………護衛ですか？」

案内を付けてくれるとは聞いていたけど、護衛兼とはなんとも物々しい。

ハリウッドセレブじゃあるまいし、買い物に行くだけなのにボディガードを引き連れるなんてちょっと大げさじゃないだろうか。

「サイキ様のお命は天上てんじょうのかたの方に保証されていると言っても過言ではないのですが、何か良からぬことを考える人間も居ないとは限りませんのでね」

「そうです。サイキ様のお立場を考えれば、わたし一人でも少ないぐらいです」

「じゃ、じゃあお世話になります」

うわ、アイヴンさん近いです。この至近距離で見ても毛穴が見つからないなんて、どんなお手入れしてるの？

って今はそんなことを言っている場合じゃない。スキンケアの詳細は後で聞こう。

なんだか鬼気迫る勢いで説得されて頷いてしまった。

いや、同性でもやっぱ美女に迫られたら断れないわよねー。しかも小悪魔顔だし。

王都見学は好きな時に行ってもいいと言われたので、さっそく連れて行ってもらうことにした。

艇ふねには乗らずに城から歩いて行く。

せっかくのお買い物、やっぱ歩きのほうがゆっくり見れるしね。

城を出て広い前庭部分を通ると門があり、そこを抜ければもう城下。こつやつて書くと簡単そうだけど、ここまでで既に結構歩いてますから。

門の外は大通りが城から真っすぐ伸びていて、やはりタイヤの無い車もどきやバスもどきがその上を走っていた。

城の周りにはオフィスビルや政府関連の建物が多く、お店はもうちよつと先の方にあるらしい。

私の世界とは似ているようで違う街並は見えていて飽きない。

でも一緒に歩いてくれるアイヴンさんに何か見つけるたびに「あれは何?」「これは何?」と聞いてるんで、鬱陶しく思われてないか心配。

快く答えてくれる彼女は、見た目は小悪魔でも中身は女神さまのようだ。

あとでこつそり拝んでおこつ。

大通りを大分歩いて来たけど、くるつと後ろを振り返るとまだ城がはつきり見える。

わかってたけど城デカイな……

再び進行方向に目を向けると、大通りの真ん中に円形の広場のようなものが見れた。

道路はそれを迂回するように走っている。

「あの噴水の上にあるのがシューディツカ王国の初代国王の像です」

言われた方を見れば、確かに円形の広場の中央には大きな噴水があり、その中に大きな銅像のようなものが立っていた。

結構有名な観光名所って言うの？周りにはその像を目標てに來たらしい人たちがいっぱいいて、カメラのような携帯のような小さな機械で城をバツクに写真らしきものを撮りまくっている。

本当は写真かどうかわかんないけど、こういうところであることを地球も一緒だもん。

「この王都のあったあたりは、元々はシューデイという一部族が治めていたんです。それが周辺の部族と集まり国となった時に、そのシューデイの長が初代国王となったのです。それでシューデイ・リツカの名を取って『シューデイツカ王国』と名付けたそうですよ」

「へえ〜そうなんですか。．．．ん？今『りつか』って言いました？」

「はい。初代国王の名前ですよね。『シューデイ・リツカ』。シューデイの男という意味です」

「え！？『りつか』って男ってどういう意味なんですか！！？？」

「男の他にも『』の息子」という意味もありますよ」

だからか！

そりゃびつくりされるはずだよ！

私は自分の名前言ったつもりだったのに、こっちの人にしたら「妻木さん」とこの息子です」って言われてるようなもんなんじゃん！！
っていうか今までなんで誰も教えてくれなかったのよ。

そりゃ私も外国人に「私の名前はハナ・ゲ・ボーボーです」とか言われて「それ日本語で鼻毛がすごい伸びてるって意味ですよ」なんて言えないけどさ！！

「サイキ様、大丈夫ですか？なんだか元気がないようですが・・・。
ご気分がすぐれないようでしたら迎えを呼びますので、買い物は後日に致しましょう」

元気があれば何でもできる、と彼の有名なプロレスラーも言っていた。

つまり元気がなければ何も出来ない。

そして私は買い物したい。

元気出します！！！！

「いえ、大丈夫です！！ちよつと衝撃の事実^①に精神的ダメージを受けましたが、一過性のものですから！！」

「そうですか？あまり無理はなさらないでくださいね？」

外見小悪魔の女神さまはまだ少し心配そうにしてるけど、私には大事な使命があるからね！

何も買わずして帰るなんてことは出来ないのです。

実は昨日用意されていた着替えの中にちゃんと下着と思わしきものが入っていた。

でもそれは何と云うか、すごいものだった……。

透けては無いけどすごい薄い生地で、肌にピタッと密着する感じ。前面にはレースの刺繍が施してあったりサイドにスワロフスキーのような装飾が付いてたりして、そこはさすがに高級感溢れてたんだけど……。

ウルトラローライズ？っていうくらい股上が浅くて、屈んでないのに後ろは半分お尻が「やあ！」って顔出してた。

用意されてた服がセミタイトの膝丈スカートだったからまだよかつたけど、これがフレアスカートだったら部屋から出れなかつたわよ。欲を言えばパンツスタイルか、それがダメならタイツくらい用意しといてくれたらいいのには思ったね。

4 日目 1 (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

4日目 2 (前書き)

またまた下着の話が出て来ます。

目的のショッピングモールに着いた時にはお昼前になっていたので、休憩も兼ねて先に昼食を取ることに。

アイヴンさんが「最近若い女の子の間で大人気」の料理を出すレストランに連れて行ってくれたんだけど、何てことは無いパスタのお店だった。

シューデイツカではこういう長い麺類はあまり無いらしい。

ということはラーメン屋出したら売れるんじゃない??

もし一向に『理由』らしきものが見つからなかったらラーメン屋で一儲けでもしようかな。

はっ！もしかしたらそれが『理由』・・・??

いやいや、それだったら最初っから本職の人連れて来るでしょ。

私はピザだけでなく、ラーメンを作る技術も持ってないし。

お分かりかもしれないが、私はあまり料理は得意ではない。あしからず。

モールはかなり大きくて、お店を一つ一つ見て行くのはとても今日一日じゃ無理そう。

ということでアイヴンさんにモールの中にある百貨店の一つに連れて行ってもらい、服をいくつかと歩きやすそうなヒールの無い靴も購入。

そして肝心の下着。

なんとこの主流はどれもあのローライズのピッタリパンツ（命名・私）らしい。

みんなどんなけ露出好きなんだ！

「こつちてこついう下着しか無いんですか？」

「これが一般的なスタイルではありますね。もうちょっと楽なのがよろしければこちらとか」

と言ってアイヴンさんが手に取ってみせてくれたのはヒモパン・・・。

もっと布が少なくなってしまったよ。

楽なのがいいのは確かだけど方向が逆、逆！

「もっと布地の多いのがいいんですけど・・・。」

「でしたらここでは無くあちらのほうでしょうか」

「あ、そうそう。こついうのが欲しかったんです」

日本人の私でも穿けそうな下着を発見です！

素材は変わらず薄くてピッタリだけど、ちゃんとお尻はカバーしてくれそう。

しかしさっきまで見てたのより明らかに地味な気が。

「本来は子ども用なんですけど、サイキ様は細身でいらっしやるので大丈夫でしょう」

やっぱティーン用でしたか。

セクシー度がダダ下がりしてますもんね。
誰に見せるわけでもないからいいけど。あ、アイヴンさんには知られちゃってるか。

会計を済ませ（ちなみにシューティツカは90%カード社会。現金を見たこと無い人なんて普通にいらっしゃるしい）、荷物を抱えてさあ行こうかという時に、急にアイヴンさんが足を止めた。

「どうしたんですか？何か買い忘れとか？」

「いえ、城からの連絡です。フィンエルタからですね」

そう言って胸元から取り出したのは、いつぞやもディゲアさんの家で見たことのある金属板。

ボタンなんて一つも見当たらないのに、その表面をなでると文字のようなものが浮き出てきた。

文字ということはあれですかメールですか。

「こちらアイヴン。買い物は粗方終わったけど、どうしたの？」

メールじゃなかった。電話だったか。

でも相手の声は聞こえない。アイヴンさんも金属板を見つめるだけ。

「サイキ様さえよろしければ、いつでも帰れるとは思っけどそんな

急に……………」

ん？私？

「じゃあご都合をお聞きするから、こちらから折り返し連絡する。またあとで」

電話は終わったのか、アイヴンさんはその不思議な金属板をまた胸元のポケットにしまった。

「エルタさん何て言ってたんですか？」

「お話ししたいことがあるので、御用がお済み次第お帰り頂くようにと。ですが話の内容については何も言っておりませんでした」

「なんだか急いでるみたいですね。買い物も一通り終わったし、私は今すぐ帰っても大丈夫ですけど」

「では迎えを呼びます。恐らくフィンエルタが既に手配していると思うので、すぐに来るでしょう」

アイヴンさんが折り返しフィンエルタさんに連絡して、モールを出た時にはすでに迎えの車もどきが到着していた。うん、感心するほどの行動の早さです。

車もどきの外にフィンエルタさんが立っていて、こちらに手を振っ

ている。
歩いて来れる距離だったから迎えなんて必要ないと思ってたけど、
それだけ急ぎってことなのかな。

「お楽しみのところだったのにすいませんね。欲しいものは買えま
したか？」

「はい、連絡ももらった時にはほとんど終わってたんで大丈夫です。
それで話って一体何ですか？」

「それは城に着いてから説明しますんで、とりあえず乗って下さい。
アイヴンも」

「なんだかとっても急いでるようだけど、一体何事!？」

4 日目 3

3人で車もどきに乗り込むと、すぐに動き出した。よほど急いでいると見える。

行きに通った大通りをそのまま真っすぐに進み、初代国王の像もあつという間に通り過ぎた。

噴水のあたりにはやっぱりたくさんの人で溢れていて、初代国王と城がこの国の人達に随分と親しまれているのが分かる。

車は門を通って前庭を抜けると、城の正面玄関にある車寄せのような部分で停まった。

城に入るとまず私の部屋に戻ることに。お話はそこで聞かせてもらえららしい。

いい話だといいけど、皆目見当が付きませんよ。

しかしエルタさんは私の部屋に入るなり人払いをして、メイドさんをみんな出してしまった。

いよいよもって怪しくなってきました！

「えーつとサイキ様、何か飲まれますか？一応俺でもお茶くらいは淹れれるんで」

「フィンエルタ、勿体ぶらずにさっさと説明して。人払いまでして話すことなんてどういう内容なの？」

アイヴンさん、イライラしてらっしゃいます。

私も話すならさっさと話して！とは思ってたんでグツジョーブ。

「実はサイキ様にお会いしたい、という方がいらっしやいまして。今は城下に用があつて出かけられてると言つたんですけど、そのまま会いに行きそうな勢いだったんでこちらから先手を打つたというか」

「いまいちよくわからない説明ですね。それだと私をその人に会わせたくないように聞こえますけど」

「まあ簡潔に言えばその通りです。そのお会いしたいっていう人が王族の方なんですよね。でも国王陛下もまだお会いしてないのに「はいどうぞお会いになつて下さい」とは言えませんが。それを知つてて面会を申し込んで来るあつちもどうかしてるんです」

「え、私つてやっぱり王様に会わないといけないんですか？」

「そりゃそうですよ。四大老にも無事に運ばれて来た方と認められた訳ですから。国家元首である陛下には必ずお会いすることになるでしょうね」

「私、自分の世界では普通の一般市民だったんで、王様なんて本当に馴染みがないというか遠い存在というか。まるで現実味がないです」

友達に女王様が一人いるけど、彼女は王族でもなんでもないしな！。趣味と実益を兼ねた夜の仕事に過ぎないって言つてたもん。そついう仕事つてこつちでもあるのかな？

でも実際に王族が住んでる国で、『女王様』はヤバイか。
不敬罪で牢獄行きなんてシャレにならないわよね。

「ご安心下さい、サイキ様。陛下にお会いになられる時はわたしもお供させて頂きますから。さすがにお話に加わることは出来ませんが、陛下がお人払いをなさらない限りは護衛のわたしもお傍に控えさせて頂くつもりです」

「本当ですか！さすがにいきなり一対一は私の心臓が止まりそうなので、一緒に来てくれるだけでも十分有り難いですよ」

さすが女神様は私を見捨てない。

小悪魔笑顔ですら、今は後光が差して見えるようです……！！

「とにかく、今日はなるべくお部屋から出ないようにして下さい。もし誰かが面会を願い出て来ても気分が優れないとか何か理由を付けて断るようにして下さいね」

「えー。じゃあディゲアさんが会いに来ても断らないとダメなんですか？」

「ディゲア様なら大丈夫でしょう。最初に保護されたという理由があるんで周囲も問題視はしないと思いますんで。もしお会いしたいなら連絡しますよ」

「折角ご両親のところに来てるのにお邪魔したら悪いからいいです。また暇な時にお茶でもしましょうとだけ伝えておいて下さい」

「了解しました」と小さく礼をして、彼は部屋を出て行った。入れ違いにメイドさんたちが部屋に入り、お茶を淹れたり買ってきた荷物を仕舞い出す。

あっ！！下着！！ちょっとそれは自分で片付けさせて！！！！
と思ったけど既に遅く、メイドさんは袋を持ってクローゼットに入ってしまった。

ああ、また私のお子様パンツを知る人が増えるじゃないの……
。どっちにしろ昨日洗濯ものとして持って行かれた私の下着（地球産）は、形だけ見ればこっちのお子様パンツと同じなんで今さらなんですけどね。

「さて、いつまで外出自粛してればいいんでしょう。今日大人しくしても、また明日会いに来られたらその度に部屋に籠る、なんてことにはならないですよね？」

「その可能性も無いとは限らないですよ。サイキ様のお立場を利用しようと王族以外の方が見えることだって十分あり得ますから」

「私の立場を利用して言われてもピンと来ないんですけど……」

「『理由』が分からないのはサイキ様も他の人間も同じです。それで例えば誰かが「私を国の要職に就けて欲しい」と頼んだとして、サイキ様がその通りにしても誰もそれを止めることが出来ません。それが『理由』になり得るからです。お立場を利用するというのは

そういうことです。ある意味で言えば貴女は国王陛下ですら及ぶことの出来ない権力をお持ちなのですよ」

「そんな……じゃあ私が誰かを殺せって言ったらそうするんですか？そんなの責任重大すぎて、この先何も言えなくなりますよ」……」

そんなつもりなくても、私の言葉を婉曲に取られちゃったりしてとんでもない事態になっても困るよ！

なんか以前この国に運ばれて来たっていう人の話もそうじゃなかったっけ？

その人は「そんなことは止めた方がいいよ」って言ったつもりなのに、「あなたは王様に相応しくない」とか曲解された上に王様が自害とか……寝覚めが悪すぎるって……」

「さすがに誰かを殺めるような『理由』はないでしょう。天上の方は私たちの世界のために異世界から人を運ばれて来るので、こちらの世界の人間の命を害つという選択はそれに悖ることになりますから」

「そう言ってもらえるとちよつと楽になりますね。さすがに自分が帰るためであつても誰かの命を踏み台にして、というのは気分がいいもんじゃないし」

「私たちは彼の方が選ばれた貴女を信用しております。ですからご自分のなさることに自信を持って下さい」

うっ！！アイヴンさんの笑顔が眩しいっ
．．．．．！！
やっぱり彼女は女神様に違いないと思う。

4 日目 3 (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

なんかちよつとプレッシャーを感じるけど、神様も私が『理由』を解決できる人間だとわかつて連れて来たんだと思つとこつ。

地球だけで60億超の人間が居て、それに他の世界の人間も入れた見当も付かない数の中から私を選んだんだから、そうそう難しい『理由』でもないでしょ。

かと言つて他の人には無いような特技や技術、知識なんて私にあるつけ？

もしかしたら私も知らない隠された能力が開花するとか！？

「しかし、やはり陛下にお会いするまでこつやつてここに閉じこもつている、というのも無理がありますね。サイキ様もお暇でしょうし……」

「王様は忙しいんですか？もし会つとしたらいつぐらいになるんでしょうか？」

「陛下のご政務はこつずつと城内のはずですので、それほど先のことではないと思います。後で確認してみますね。ひとまず今日はフインエルタの言う通りお部屋で過ごしましょう。お暇でしたら何か書籍などお読みになりますか？」

こつちの文字は私の知つている地球のどの言語とも違つていたけど、不思議と読むことはできた。

これも特権の一つ？読めた方が良くらつてことかしらね。

でも本ねえ……そんなのんびり過ごしてていいものなのか

.....。

まだ来たばかりだけど、私はとっとと『理由』を見つけて帰らないと行けないのに。

そりゃ買物物は楽しかったよ！！でもそれくらいはさせてくれないと割に合わないもんね。

っていうか『理由』になりそうな事件とか無いか聞いてみればいいんじゃない？

「ねえアイヴンさん、今この国で私が運ばれて来てしまうような『理由』になることってありますか？」

「『理由』ですか？そうですね・・・強いて言えば王位継承者に関してでしょうか」

「え？王位継承者？」

「現在の我が国には王太子がいないのです」

おおっとー！！また王族関係！？

前回来たって人の『理由』と似たり寄ったりじゃない・・・でもまだそれって決まった訳じゃないし。

私に政治の知識なんて神様も求めちゃいないでしょう。

「きつとそれは違うような気がします。うん」

「どうしてですか？」

「だって自分の国の政治のことだって私に決めてくれって言われても無理なのに、それを他国どころか異世界の王位継承問題についてだなんて、ちよつと無理がありますよ。それならもつとそういうのに詳しい人が地球．．．．私の世界にだって他にいっぱいいますから」

「サイキ様がそう仰るならそうなのかも知れませんね。どちらにする本当の『理由』は終わってみるまではわからないのですし、あまり考えすぎるのも良くないのでは？」

「でもなるべく早く帰りたいたいし．．．．だから『理由』になりそうなことは知っておきたいんですね」

この世界は来てみてまだ4日しか経ってないけど、そんなに住みにくい感じはしない。

むしろ地球より進んでるところも多いし、メイドさんに囲まれる生活は快適そのもの。

でもねえ、これってやっぱり私の世界じゃないし。

自分の家族とか今までの思い出があつての私だし。

それを全部捨ててこっちで暮らすっていう選択肢、私には無いかな。

「折角こうしてお仕えることになりましたのに、もう帰られる話をされるなんて淋しくはありますけれど、やはりご自分の世界が恋しいですね」

わあ、なんかキャバクラでホステスに「もう帰っちゃうの？」って言われてる感じ。

もちろん実際に行ったことは無いわよ。お客さんでなら知ってるけどね！

でも私は悪いことしてないのに、いじめてるみたいじゃない……

そんなシユンとした顔されても困るのよ。やっぱ外見小悪魔はダメじゃないな。

「行って来ますって言って出て来た訳じゃないんで、このまま私が帰らなかつたら両親も心配すると思うんです。もうすでに心配してるかな？とにかく今まで不自由なく育ててもらってるし、親孝行もまだしてないのに娘が失踪なんて私が親ならショックで倒れちゃいますよ」

「それはわたしにも親がいますから分かります。確かにわたしが突然連絡も無く消えてしまったら、さぞかし心配するでしょうね……」

「でしょ？それに別に向こうの生活に不満があつたわけでもないし。確かにここでのような贅沢な生活は庶民が一度は憧れるものですけど、ずっと続けるのは無理ですよ。だって私が苦勞して手に入れた生活じゃないから後ろめたいじゃないですか」

「でも、それはサイキ様がご自分の世界を離れてこちらへいらしてののですから、十分な対価だと思います」

「だからこつちに居る間はその恩恵はありがたく頂戴するけど、『理由』を片付けた後は遠慮したいんですね」

だって私の生活って、この国の人の税金で賄われてるんじゃないの？
それならこつちで『理由』を探して解決するまではその生活を保証
してもらうのは妥当ではあるけど、それ以降も城でお世話になるな
らただの居候（ただ飯食らいとも言つ）じゃない？

もしこつちで仕事をして生活すればいいって話なら、それは私の世
界でも出来ることだし。

そりゃ薬を開発したって言う医師みたいに10年20年経った後だ
つたら考えも変わってるかもしれないけど、まだ4日だし。

．．．．．まさか10年20年かかったりしないわよね．．．．．
？

夕食は昨日に引き続きお部屋で一人。

日本に居た時は家で食べる時は一人でしたとも。

でもここでは食べるのは私一人なんだけど、メイドさんたちは相変わらず同じ部屋なので気まずい。

アイヴンさんも一緒に食べようって誘ったけど、私と同じテーブルでなんて恐れ多いと言われてしまった。

その彼女は現在リビングの端の方でまたあの金属板とにらめっこ。

王様のスケジュールの確認や、明日のことを聞いたりしてるらしい。

結局今日はお部屋ですーっとアイヴンさんとお話してた。

なんでもアイヴンさんとエルタさんは同級生らしい。

小さい頃から一緒なんで気心も知れてるとか。

ちなみにエルタさんの女好きは相当小さい頃からのようだ。

アイヴンさんが「わたしが初めて会った時にはもうあのような感じでした。一緒に遊ぶ友達も女の子ばかりでしたよ」と言っていたからかなり年季が入ってるよね。

エルタさんは昔は背が低かったらしく、中性的な容姿だったので友達の子にも可愛がられてたそうなの。

でも本人は昔から自分の容姿に自信があって、周りの女の子も自分の魅力を分かっていると勘違いしてたらしい。

それでその取り巻きの一人に告白して見事玉砕した時に、始めて自分のマスコットの扱いに気がついたんだって！

可哀想なんだけど笑える………！！

「サイキ様、お食事中にすいません。今よろしいですか？」

「あ、大丈夫ですよ」

ヤバイ、思い出し笑いしながら食べてたところ見られてたかも。でもアイヴンさんなら見なかったフリしてくれるはず。多分。

「何か面白いことでもありました？ご機嫌がよろしいみたいですね」

気付かれた！！

確かに良い年した女が一人でご飯食べながらニヤニヤしてたら思うところはあるわよね。

すいません、決まっていやらしいことを考えてたわけじゃないんですよ。

「いえ、ご飯おいしいなーって。ところで何か用だったんじゃないですか？」

「はい。陛下の明日のご予定を確認してまいりました。明日の昼食後すぐでしたらお時間を取れるそうです。実は明後日みょうごうじつの昼食にお招きしたかったようなのですが、どうもこちらの事情を察して下さったみたいです。サイキ様をずっとお部屋でお待たせするのも申し訳ないということで明日になりました。よろしかったですか？」

「はい！！私テーブルマナーにもそんなに自信が無いですからその方がいいです。ありがとうございます。」

「それで明日の面会なのですが、略式なので気楽になさって下さいと。いらっしゃるのも陛下と側近の方、それと護衛の者のみということですよ。もちろんわたしも一緒にさせていただきます」

「なんだか急かしてしまったみたいですね。気を悪くしてないといいですけど」

「やっぱり王様というからには忙しいんだろうし、元々は明後日に予定してたんならそれに合わせて他の政務を組んでたんじゃないのかな。確かにずっと部屋に閉じこもってるのはすることなくて暇ではあるけど、やっぱり時間の空きまくってる私が融通を利かせるべきだったかしら。」

「運ばれて来た方にお会いするのも陛下の務めなのですから、気になさることはないですよ。陛下もお会いできるのを楽しみにしてるそうですし」

「そんな楽しみにされちゃうと、実際に会った時にがっかりするんじゃないですか」

「いえいえ、きっとこのように素敵な女性を選んで下さった天上てんじやうのの方に感謝なさると思いますよ」

「アイヴンさんたらお世辞がお上手！」

「そんな素敵な女性だなんて、私を持ち上げても何も出ませんよ。大体私なんてお肌だけは自慢出来るけど顔立ちそのものはザ・平凡だし、スタイルだってお子様パンツが穿けるくらいグラマラスボデ

イにはほど遠い。

学校の成績も運動神経も中の中で、褒めようも貶しようもないもんだったし。

料理もお裁縫も得意じゃないし、ここ数年彼氏も居ないという日照りっぷり……って自分で言ってる悲しくなってきたじゃないの。

その割に何を間違ったかこんなとこに連れて来られちゃうなんてさ。次の年末ジャン は1等とは言わないから2等、いやせめて1等前後賞くらいは当てさせてよ！神様！！

……って、こっちの神様に言っても意味ないか……。

「それとデイゲア様が夕食の後にこちらにお伺いしたいそうですよ。お会いになりますか？」

「もちろんです！エルタさんがちゃんと伝えてくれたみたいですね。今日はもう無理かと思ってました」

「ではお食事がお済みになりましたらこちらにお出で頂くことにしましょう」

そうだった、まだご飯の途中でした。

デイゲアさんに会えるのは嬉しいけど、折角作ってもらってるご飯を残すのも悪いので、ここはちゃんと食べとかなないと。美味しいから残すのが勿体ないというのもある。もぐもぐ。

デイゲアさんはエルタさんと一緒にやって来た。

昨日の夜から会ってないだけなのに、いやに久しぶりに感じるのは私の思い違いだろう。

彼女は昨日までのシンプルなシャツに紺のパンツという格好ではなく、シルクのような素材の白いシャツに光沢のあるブルーグレイのベスト、それにベストと同じ素材の細身のスラックスという出で立ち。

なんかスーパーモデルみたい。脚長いなあ。

リビングのソファセットでデイゲアさんと一緒にお茶を頂く。

前回同様エルタさんは立ったまま。今回はアイヴンさんも一緒に立つてるけど。

「明日、陛下にお会いするらしいな」

「そうなんですよー。事情があつて急に決まったんですけど、今からもう緊張しちゃいますね」

「ああ、今日王族が面会を申し出て来たという話は聞いた。どうせお前に口利きでもしてもらおうという魂胆だろう。今この国には王太子がいないからな」

「さつきアイヴンさんも同じこと言ってたんですけど、王様にはお子さんがいないんですか？ 確か直系の王族は10人くらい城に住んでるって言ってたのに……全部王様の兄弟とか？」

「いや、陛下には息子が二人に娘も一人おられる。ただ立太子してないから空位なだけだ」

王様に子どもが3人もいるなら私の出る幕は無さそう。
やっぱ王族問題が『理由』っていう線は消えたね。よしよし。
前回来た人の話を聞いた後だからか、王族関係の『理由』はなんだ
か面倒そうだもんね。

ここは石油王ルートでお願いしたいかな。聞いてますかぁー神様あ
い。

「息子が二人ってことは王子様ですよね！？カッコいいですか？」

「美醜は人の感覚によるから断言は出来ないな」

「サイキ様、王子殿下はどちらも既婚ですよ。ちなみに王女殿下も」

「ええ〜。カッコいい王子様がいるかと期待してたのに……………」

エルタさんがさかさず釘をさしてきた！！

だってやっぱ異世界にトリップしてお城にお世話になることになっ
たら、王子様に見初められるフラグはありだと期待しちゃうじゃん。
それなのにまさか王子様が既婚者とか……………！！

さすがに私も略奪愛とかお妾さんになってまで玉の輿を狙ったりは
しないよ。

元から帰るつもりだったしー。ただちよーっとあわよくばっていう
か？

「あれ、サイキ様ってばやっぱりそうというのが気になりますか？」

「そりゃ私だつて元居た世界では結婚適齢期まつただ中の女性ですよ。しかも恋人もいないんですよ、私。だからいい出会いのチャンスだと思つてたのになー」

「奇遇ですね。俺も恋人居ないんですよ。どうですか、これでもお買い得だと思つんですけど？」

「フィンエルタ、あなたの場合『今は』『特定の』恋人が居ないだけでしょ？サイキ様、こんな男の言うことなど真に受けなくて下さいね！きつと女性を見ると口説かずにはいられない病氣なんです。サイキ様はフィンエルタには勿体無さ過ぎますもの。心配なさらずともすぐにフィンエルタなど足元にも及ばないような素敵な恋人が出来ますわ」

アイヴンさんが必死になつて止めてきたけど、もともとまともに聞いていちゃいなかったので大丈夫。

それにエルタさんは私の好みじゃないし。

親しみやすいとことか背が高いところはポイント高いけど、この軽そうな感じがなー。

付き合つたら浮気の心配ばっかでストレス溜まりそう。未来のエルタさんの彼女、もしくは奥さんに同情するよ。

でもエルタさんが病氣つて言うのは私もそう思う。

「まあ俺のことはともかく、未婚の王子様がいいなら他にもいますよ。目の前のお方もそうですし」

「フィンエルタ！！お前は本当に余計なことばかり……………！！」

「え、目の前って……エルタさんが王子様……?」

「違いますよ!! デイゲア様のことです!! 厳密に言うなら王孫殿下ですけど、王族直系男子という広義で言うならデイゲア様だつて『王子様』ですよ。しかもちゃんと未婚です」

え? ええ? ええええ?

「王族……直系……男子……」

デイゲアさんが『王子様』……!??

4日目 5(後書き)

ディゲアについては読めてた方もたくさんいらっしやっただと思いません。

しばしの王道展開におつきあい下さいませ。

4日目 6 (前書き)

4日目はここまでです。

(10/27) 文中に出て来る三点リーダーを全角(・・・)から半角英数一(．．．)に変更しました。気がついた部分は全部変えたつもりですが、見落としている部分がありましたらお知らせ下さい。

なんだかエルタさんはしてやったりという顔してるし、デイゲアさんは苦虫噛み潰して奥歯に挟まって取れなくなっただよ様な複雑な顔、アイヴンさんは小首を傾げてキョトンとしてる。でも今はみんなの顔なんてどうでもいい。

「……………デイゲアさんって男の子だったんですか……………」
「？」

「なっ……………！」

「え？そつち??？」

こんなに美少女顔なのに男の子だったなんて、私は自分を女と言ってもいいのか激しく疑問です!!!!

「私のどこが女に見えると言っただ!!今までそんなことお前以外に言われたことないぞ!!」

デイゲアさんがドカンと噴火した。もとい噴火したかのように怒りだした。
でも真っ赤になって怒ってるその顔もやっぱり美少女顔なのよ! っというか!!!!

「それを言うなら私だって25年間生きて来て男に間違われたのなんて、ここで初めてですよ!!」

「まぎらわしい名前のせいだろう!!大体名前と言えば、お前は私の名前を聞いて「かつこいい」と言っていたじゃないか!!それがどうして女だと思い込むことになるんだ!!」

「だってどう考えてもかわいい名前じゃないじゃないですか!!それならかつこいいと褒めとくしかないでしょ!!占い師でもあるまいし、私は名前なんかで性別を判断できませんよ!!それに今まで女に間違われたこと無いなんて、それはきつとデイゲアさんが王子ってことに遠慮して言わなかっただけで、きつとみんな一度は思ったはずですよ!!ねえエルタさん!!」

「ちょ!!こつちに振らないで下さいよ!!えーっと、黙秘します
.....」

私とデイゲアさんにもものすごい勢いで白羽の矢を立てられたエルタさんは天を仰いでそう呟いた。

「即座に否定しない時点で肯定したも同じだと思っるのは私だけかしらね、フィンエルタ.....」

「フィンエルタ.....貴様あとで覚えている.....!!」

ところで男の子だったっていう事実の方が衝撃でスルーしてたけど、デイゲアさんて王子様だったのかー。あ、正確には王孫殿下だっけ？確かにこの偉そうな口調と、政府の最高官僚という四大老の皆さんが敬語使ってたことを思い出せば納得もする。城で働いてるオルティガさんと知り合いなのも当然よね。

「でも、見た目はともかくデイゲア様のお名前を聞けば、王族に詳しくなくても男だってことは分かりそうなもんですけどね。あ、俺が男ってことはちゃんと分かってます？」

「見た目はともかくとはどういう意味だ………!」

「さすがにフィンエルタさんが女に見えるような不思議なフィルターはかかってないですけど………普通はその名前聞いたら男ってわかるんですか？」

「あからさまな男名ではありませんから。サイキ様の世界では男女の別で名前が分かれてたりしないんですか？」

すごい漢字ですごい読みをするという、男女どころか人間の名前かも怪しいような名前も現代日本では存在するからなあ。

この名前は男の子かな、とか思うことはあっても絶対に男の子の名前じゃないといけないってのは決まってるないし。

そもそも国や言語によって違うから一概に言えないというのもある。

「男の子っぽい名前、女の子っぽい名前ってのはあっても絶対っていうわけじゃないですね。そこはもう親次第なので、例えば「太郎^{たろう}」

なんて古典的な男の子の名前ですけど、付けようと思えば女の子の名前にも出来ますから。もしかしてこっちでは名前が男女で分けられてるんですか？」

「名前の最後の音が口を開いて発音する場合は男名で、口を閉じる場合が女名だな。だから私の名前を聞いて女だと思う人間なんてこの世界にはお前ぐらいだ」

おーおー根に持ってますね、デイゲアさん。

私じゃなくてもこの世界の人じゃなかったらわかんないですって。デイゲアさんが言うにはどうも名前の最後の母音がアとかエだと男名で、ン、ウが女名らしい。イとオは滅多に無いらしいけど一応中性的な名前になるとか。

今後の参考のためにこれは絶対覚えておこう。

「だからサイキ様のお名前なんてこっちでは典型的な男名なんですよね」

「っていうかまんま『男』っていう意味なんじゃないですか！もっと早く教えてくれたらいいのに・・・」

「誰かに聞きました？ああ、初代国王の像か。そう言えば今日通ったそうですね。いや、俺も早く教えて差し上げたほうがいいのかなどとは思ってたんですよ。でもなかなか言いにくいじゃないですか」

「え、サイキ様のお名前つてもしかして・・・」

あ、アイヴンさんは私の名前知らないんだっけ。
でも今さら言うのちょっと恥ずかしいなあ。

フィンエルタさんは相変わらずニヤニヤしてるし。感じ悪い!!

「私の名前、立花りっかって言うんですよ。サイキは名字なんです。でも名乗る度に男だと勘違いされるんで、サイキの方を通称として使ってるんです」

「そうだったんですか。確かにそれは紛らわしい名前ではありませんね。そのお名前はサイキ様の世界ではどういう意味なんですか？」

「私が生まれたのが梅雨つゆ時で、まあ雨期とでも言うんですかね。それが立葵たちあおいっていう人の背丈くらい真つすぐ上に伸びる花が咲く時期なんです。立葵の花言葉は『大きな志』。あ、花言葉っていうのは花それぞれにあてはめた言葉なんですけど、それで私の両親が大きな志を持って真つすぐに育って欲しい、という願いを込めて付けてくれたんです」

「まあ、素敵ですね。サイキ様にとてもよく合っていると思います」
「だからこつちで『りっか』が男っていう意味だと知ってかなりシヨックです……」

自分でも意味も響きも気に入ってる名前なだけにね。

いや、ここは男っていう意味でまだマシだったと考えるべきか。勘違いされることはあっても口に出すのも憚られるような言葉じゃないし。ピー音入らないしね!

「ところで皆さんの名前にもそれぞれ意味があるんですか？ディゲアさんなんて王族だし、さぞや大層な意味が込められてそうすけど」

「特に意味はないな」

「えええー！王族なのに!？」

王様の孫って言うくらいだから占い師や姓名判断の先生とか、色々な人の意見を参考にしてそうなんだけど。

「わたし達の世界では名前は親からではなく、天から授かるものなんです。言葉は人間の作ったものだから、名前の方が先に存在しているんですよ。なので名前に意味があるということはありません。人間が後から付けた意味ということでしたらあり得ますけど」

「そうそう。男が『リツカ』、女は『レン』というんですけど、これも意味は後付けですからね。昔の人の名前に多く付いていたのでそういう意味になったと言われてますよ」

アイヴンさんとエルタさんの説明によると、こちらの世界のすべての命には等しく天（神様）ことかなから名前が与えられているらしい。それはもう犬や猫とかの動物だけでなく虫やら魚やら、果ては木とか草にも!!

人間の場合は赤ちゃんが生まれたらはいみょういん拝名院はいみょういんというところへ行つて、そこで天から分け与えられたという水をかけると名前が胸に浮き出

て来るんだって。タトウーみたいな感じ？
しかし子ども一人の名前を決めるにも悩んだりするっていうのに、
神様ってばネタが尽きないんだろうか。

「さて、明日は陛下との面会も控えてることですし、サイキ様はそ
ろそろお休みになられたほうがよろしいのでは？」

そつだよ！私つてば明日は大事な用があるんじゃない！！
昼過ぎつて言つてたから寝坊することはないだろうけど、レディー
は色々と身だしなみに気を遣わないといけないしね。
隈ができたりなんかしたら、ただでさえ平凡な顔なのに余計に貧相
になっちゃうわ。

「つていうかエルタさんが衝撃の事実を口にするから、こんなに長
話になったんですよ。本当はもつと王様のことを聞いて明日に備え
ておきたかったのに」

「ええ！俺のせいですか！？いずれは知ることだったんですからい
いじゃないですか」

「わたしはサイキ様がご存じなかったことに驚きました」

「だって誰も言ってくれませんでしたよ？ダイゲアさんなんていま
で王様の話はしてくれても、一言も王様の孫つてことは言ってくれ
なかつたんですから」

少し恨みを込めてデイゲアさんを見たら、私のジト目光線に気付いたデイゲアさんの眉がピクリと動いた。

おおっ！もしかしてまだ怒ってるの！！？

でも女の子に間違えちゃったのは私が悪いかもだけど、王孫だって黙ってたのはどう考えてもそっちが悪いもん。

「そう言えば、何でサイキ様にご身分を明かさなかつたんですか？フィンエルタも教えて差し上げれば良かったのに」

アイヴンさん、もっと言っちゃって！！

「俺は別に隠そうとした訳じゃないですよ。サイキ様がご存じないようなのは薄々感じてましたけどね」

いや絶対に面白がってたはずだ！！私がビックリするの分かって黙ってたくせにー！！！！

めちゃくちゃニヤニヤしてたじゃん！！！！

「私も別に隠そうと思ってたわけではない。ただ、私はいずれ王位継承権を放棄するつもりでいるし、王孫という立場に拘りも無い。ならば敢えて言う必要もないだろうと思ってるのだ」

そんな尊大な口調で「別に王族で居たい訳じゃない宣言」されても説得力全然無いんですけど.....

でもデイゲアさんは王位を継ぎたくないのか！。

言っても王様の孫だし、他にも継承権を持っている人がいるなら放棄しても構わないんだろうけど、なんで王様になりたくないんだろう？

この世界一の大国の、しかも最高権力者だよ？なりたくてもなれないって人はいっぱいいるじゃないか。

4 日目 6 (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

5 目 1 (前書き)

ちよつと上手く区切れなかつたので、短めです。

私は現在、極楽に来ております。

いや、別にぼっくり逝ってしまったとかじゃないのよ。

この世に極楽が存在するならば、きっとこんなところに違いないという意味で。

まあ既に自分の世界からは遠く離れたここに来てますけど。

「サイキ様、お加減はよろしいですか？」

「はい、とっても気持ちいいです」

今日は昼過ぎに王様と会っていうんで、昨日よりも大分早い時間にメイドさんに（叩き）起こされ、半分眠りながら朝食を取った後にそれはゴージャスなお風呂に放り込まれてですね。

もちろんお風呂は一人で入らせてくれたんだけど、上がったらなんとエステ台のようなところへ連れて行かれて、全身マッサージと美颜マスク（と思われるもの）を施されているのですよ！！

いや、これは日本で同じサービス受けたらウン万はくだらないはずだってお城の中だし、使っている品々も超一級品に違いない。しかもマッサージしてくれてるのがこれまた美女と来ている。ありがたやーありがたやー。

なんだかいい匂いのするオイルのようなもので全身を揉み揉みされて、身も心もリラックス。

極楽気分でルンルンな私だけど、ここではたと気がついた。

こんなに良くしてくれるのは、もしかして王様に会うのにみすばらしい格好じゃ困るから？

私そんなにひどい見てくれたのかな……

誰か知らないけど指図した人に、これは純粹に好意なのか同情なのか問いつめたい。激しく。

マッサージが終わった後もヘアパック（みたいなの）とか爪の手入れまでされて、文字通り全身ピカピカに磨き上げられましたとも。

きつと自分の結婚式のためにブライダルエステに通ったとしても、ここまでのサービスは受けられないんじゃないかというくらい。

ちなみに昨日買った服はそれなりの品だけど、さすがに王様の前で着るような服ではないとかで、これまた高そうなオフホワイトのオーガンジー（らしき生地）に裾の部分だけ花柄の刺繍のされたワンピースドレスを用意されました。いや、かわいいけどさ。

下着は自前のを許されたのがせめてもの救い。

「ご支度が整いましたらそろそろ参りましょうか」

「はー。王様に会うとなるとどうしても緊張しますけど、ディゲアさんのお祖父さんだって思えば少しは安心しますね」

「そうですね。それに陛下のお父上である前国王陛下の代にも運ばれて来た方がいらしたと言いますから、サイキ様のこともよくご理解して下さいと思いますよ」

「ああ、そういえば前回来た人ってディゲアさんの曾祖父の時代って言っていましたね」

「前国王陛下が即位してすぐに帰られたというので、現陛下は直接お目にかかったことはないでしょうけど、お父上からお話は聞いているかもしれませんね」

あまりその辺の話はヤブヘビだから掘り下げて聞きたくないけどね。前国王の叔父さんが自害してるっていうし、王太子が決まって無いのにそんな話持ち出して、今回も王位関係が『理由』ぼく思われるのもなあ。

何と言っても私の希望は石油王ルートなんで。

今日の面会に用意されたのは、あまり大きくない応接室のような部屋。

もっといかにもな玉座の前で跪ひざまずいたりしないといけないかと思っただら、一応私を対等な立場として招待したいということ、玉座のある謁見の間とやらは使わないことにしたそう。

作法とか分からないんで、カジュアルな席で済むならこっちに文句なんてありませんとも。

部屋の中にある豪華な応接セットの一人がけチェアの前で王冠を頭にした老人が立っている。

あの人が王様っていうのはすぐに分かった。

灰色がかった金髪と顔に刻まれた皺は彼が高齢であることを如実に物語っているけど、背筋をピンと伸ばして威風堂々と立つその姿はやはり王の威厳に満ちあふれている。

白地に金の縁取りで装飾がされている衣装は気品に溢れ、宝石を鏤ちりばめた冠は王の頭上に相応しい輝きを放っている。一般人がそんなの着てもコントにしか見えないけど、彼は少しも霞んでいない。むしろそういった格好がさらに彼を引き立てているくらいだ。さすがに数十年、大国の王を務めて来ただけのことはある。

彼はその顔をさらにくしゃりとさせて、にっこりと私に微笑んだ。

「ようこそ、我がシュューディツカ王国へ。余が国王のウォルシオラである。運ばれて来た方、良くいらしたな」

5日目 1 (後書き)

王様登場。

これでまた少し話しが進むかと。

王様はさすがにデイゲアさんのお祖父さんだけあって、纏っている雰囲気[（]が彼（違和感があるけど『彼』なんだよね．．．．．）に良く似ていた。

デイゲアさんが年とってちょっと丸くなったらこんな感じ？というくらいに。

「余の父から、運ばれて来た方の話は聞いたことがあってな。父は王権争いで幼い頃に自らの叔父に幽閉されておったのだが、ようやく外へ出ることが叶ったものの運ばれて来た方には会えず終いだっただそうだ。そのことをよくこぼしていたな。余はなんとか自分の生きている間に見えること[（]が叶ったから、思い残すことはもう無いかも知れん」

いきなりそんなことを言うもんだから、私とアイヴンさんだけでなく王様の側近らしいもう一人のおじいちゃんもギョっとしてしまった。

「えっ、どこかお体でも悪いんですか？」

「はは、そうではない。確かに見てくれは老いぼれだが、まだまだ健康そのものよ」

そう聞いて安心した。
もしかして「もう長くないから世継ぎ問題よろしく！」って意味なのかと思っちゃったじゃないの。

「ただ、余もそろそろ政務を続けるのは飽いて来たんでな、退位して妃と共に隠居しようと考えておるのだ」

「そうなんですか……………」

飽きたからって辞めれるもんなの？良く知らないけど。
でもそれならさっさと王太子を決めちゃえばいいのに。
っていうかこつち（王位関係）に話持って行くのやめて欲しいんだけどなあ……………」

「ところで、そなたはデイゲアの元に現れたらしいな」

「はい。お花畑の中にある林のお家にちょっとお世話になりました」

「あの家はもともと余が隠居生活のために用意したものよ。いいところであるっ？」

えええ！あれ王様が使ったために用意した家だったの！！？
その割にはなんていうか質素な造りだったんだけど。
でもデイゲアさんのUターン志向はお祖父さん譲りだったのか。

「確かに静かだし、のんびりしていいところでした。でも王様が住むにはちよつと不便なんじゃないですか？一番近い町でも半日かかるって聞きましたよ」

「今まで人に囲まれた生活を何十年も続けて来たからの。王位を退いた後くらいはのんびり過ごしたいのだ。妃も賛成しておる」

「私の世界でも定年退職して田舎に移り住む熟年夫婦とかいますから、気持ちはわかります」

「そうかそうか。しかし余が隠居生活を始めるにあたり、問題があるってな」

むむむ。なんか雲行きが怪しく……

「もう聞いたかも知れぬが、この国には王太子がおらぬ。余が退位するにはまず3人の子のうちのどれかを立太子させ、王位を継がせなければならぬのだ。そなたはこれが運ばれて来た『理由』だとは思わぬか？」

来たー！ー！！

王位関係はやめてって言ったじゃん！

王様本人にはまだ言って無いけども！！

人好きのする笑みをその顔に浮かべて好々爺然として私を見るけど、投げかけて来た話題は私の望むものでは全く無い。

「私には政治とか王族とか継承権とかの知識はまっつっつたく、これっつっつっぽっちも無いんで、王太子の問題は『理由』じゃないと思います！」

「そう考えるか？先に運ばれて来た方も、生業は給仕をしておったそうだ。そなたと同じく政治や王族に関する知識は無かったというぞ」

強く否定したけど聞き入れてくれません。

大体本当の『理由』なんて神様しか知らないんだから、そっちの片付けたい問題を丁度いいからって押し付けて来たりしないでよね。

「それを言うなら、なんで王様がさっさと決めてしまわないんですか？そうしたら王太子問題が私の『理由』っていう可能性も無くなるのに……」

「ははは。そなたはよほどの問題に関わりたくないようだ。先に運ばれて来た方の話がやはり気になるか」

「それは……だつて人が一人命を断つてるわけですから、そういう責任重大な『理由』はちよつと遠慮したいですよ……」

「しかし『理由』がそのように責任重大でないならば、そもそも天上の方は異世界より人を運んで来ぬと、余は思っただがな」

「でも王様のお世継ぎを決めるのは異世界の人間でなくても出来る

と思うんですけど。毎回王太子を決める度に異世界の人は来ていないんでしょう?」

「その通りだ。余が立太子した時には運ばれて来た方はおられなかった。だが、余は今この国に王太子が居ないことと、そなたが運ばれて来たことが無関係とは到底思えぬのだ」

ど、どうしてもそっち（王位問題）に話を持って行くんですね！私はデイゲアさん以外の王族なんて知らないんだから、選びようが無いじゃない！って思うんだけど、それを言ったがために直系王族を全員紹介されて「ささ、選んでちょうだい」っていう事態になってもイヤだ.....」

私があまりにも難しい顔で考え込んでいたのを気に病んだのか、王様は少し肩の力を抜くと、ふうと小さく息を吐いた。そして自嘲のような悲しそうな笑顔を浮かべると、組んだ自分の両手を見ながら話を続けた。

「この国に王太子が居ないのはここ2年の話でな」

「え.....」

「2年前までは、余の息子の一人が立太子して30年、王太子の務めを果たしておった」

「その人はなんで王太子を辞めちゃったんですか?」

「辞めたのではない。――死んだのだ」

2年前まで王太子に就いていたという王様の息子。

でもその人が死んでしまったってことは王様には子どもが4人居たってこと？

「余の最初の息子であるマリグエラは16で立太子し、その後王太子として30年務めたが46でこの世を去った。その後すぐに他の3人の子の中から次の王太子を決めるべきだったのだが、こうして2年経った今でも空位のままよ」

「なんですぐに決めなかつたんですか？」

「一つはマリグエラが30年も立派に王太子をやっておったので、他の3人の子は王と成るべくための教育に重きを置いていなかったからだ。誰もがマリグエラが王位を継ぐものと考えておつたんで無理も無いことだがな」

他の弟妹も兄がちゃんと立太子してたんなら自分の出る幕は無いと考えてたのかな。

確かに30年も経ってから自分にお鉢が回ってくるとは思ひもしないわよね。

「もう一つは、マリグエラが王太子であったが為にその命を奪われたのではないか、とも考えられるからだ」

「……陛下、殿下は事故で亡くなられたのです。未だ納得出来ないのは分かりますが、運ばれて来た方を安易に不安にさせるのは如何なものかと……」

王様の不穏な発言に、ずっと黙って控えていた側近の人が見かねて声を出す。

アイヴンさんもちょっと困惑気味だ。

その王太子が亡くなった理由は公おおやけになつてないんだらうか？

側近の人は事故つて言ってるし、王様は殺されたかもしれないって言うし。

側近の人の発言を受けて、王様は気を取り直したのかさっきまでの自嘲的な笑みではなく、また好々爺に戻ってしまった。

「すまぬ。余が言ったことは忘れてくれ。そなたがここに現れたのは天上てんじょうの方の采配。『理由』が何であれ余はそなたを歓迎する。この城を自分の邸やしやと思つてごゆるりと過ごされよ」

「あ……こちらこそお世話になります……」

王様は先ほどまでの重い空気など一切無かつたかのように、王らしく堂々とした足取りで私の前から去って行った。

5 日目 2 (後書き)

誤字脱字等ありましたら、お知らせ頂けると助かります。

5 日目 3 (前書き)

またまた新たな人物が登場。

「王様の子どもって4人居たんですね．．．．．」

微妙に居心地の悪い中に残された私とアイヴンさん。なんとも空気が重いです。

「はい。陛下のご長男であるマリグエラ殿下を入れれば4人いらつしゃいました。しかし陛下も仰っていた様に、殿下は2年前に事故でお亡くなりになったのです。城の人間の間では、立太子がなされないのは未だ陛下が他の殿下方の資質を見極めておいででないからという噂が専らでしたけど、どうもそれだけではないようですね」

「事故で亡くなったというのは確かなんですか？」

「当時もそれは詳しく調査がなされましたけれど、特に不審な点も無く事故と結論づけられました」

地球の文明よりも進んでいるこの世界で、事故以外の証拠が何も出なかったっていうんならやっぱりその通りなんだろう。

私も王様にこんな話されたら気になっちゃうけど、どうにか出来るもんでも無さそうだし。

「王様が王太子を選ばないまま退位してことはやっぱりあり得ないですか？」

「急に健康を損なわれその判断が難しいという場合ならともかく、ただ退位ということになりますと議会は間違いなく否を唱えるでしょう。次に上がる王陛下の治世にも少なからず影響するでしょうし」

「継承権1位の人があるまま王太子になるとか？」

「それは何度も議題にも上がっているのですが、賛成が議会の過半数を超えていないので陛下もそれについては言及を避けておられるようです」

継承権1位でも簡単に王太子になれるわけじゃないってこと？

問答無用でその人にすればいいじゃん、年功序列で！とは思っても国王がそれなりに権力を持つてるこの国じゃ、安易には選べないのかも。

やっぱりこの問題はあまり深く首を突っ込みたくないなあ……。

面会が終わり自室に帰る道中。

もう角を一つ曲がれば私の部屋、というところで声をかけられた。

私の部屋付きのメイドさんである。

しかも何やら慌てているような。

「サイキ様、申し訳ございません。ただいまお部屋にお客様が来られてまして……」

「主あかのいない部屋に客人を通したと言うの!？」

ぬおーアイヴンさんが気色ばんだ声を上げておいでです!!
さすが護衛なだけあって、こういうところはちよつと厳しそう。

「私たちもサイキ様は外出中ですのでお通しできないと何度も申し上げたのですが、半ば無理矢理入ってこられたのです……。今もお部屋でお待ちなのですが、どうなさいますか？」

「陛下との面会がお済みになればこういう事態もあるだろうとは予想していましたが、まさか面会中に部屋まで押し掛けてくるなんて……。それでその客人というのはどなたなの？」

「ガルーダ様です。オルバ様のお遣いと申しておりました」

「どなたなんですか？ガルーダさんって。やっぱり王族の方ですか？」

名前を聞いた途端アイヴンさんの眉がギュっ!と寄ってしまった。そんなしかめっ面してたら眉間の皺が永久ものになっちゃっよ!

「ガルーダ様はディゲア様と同じ、陛下のお孫にあたります。ディゲア様とは従兄弟になりますね。ただガルーダ様のお父上であるオ

ルバ殿下は陛下の第二王子で、現在この国の王位継承権第1位でございます」

「うわ……………」

面倒そうな相手……………って思わず心の声表に出そうになっ
た！危ない危ない。

また随分厄介そうなのが来たというか。

議会の承認を得られない王位継承権第1位の王子様の息子？

この説明だけで会う気が90%くらい無くなったんだけど。

ちなみにあとの10%はデイゲアさんの従兄弟っていう肩書きに
対する期待。

「うーん……………会いたく無いって言ったら角が立ちますよ
ね。でもわざわざ留守中に押し掛けて来るような鼻息の荒そうなの
はご遠慮願いたいんですけど……………」

「サイキ様がお会いになりたくないならお引き取り願いますよ。
そもそも陛下との面会の最中を狙って先触れもなく押し掛けて来る
なんて、王族としての品位を疑ってしまいます」

「では私の方からサイキ様は城下へ下りられたとでも申しておきま
す」

それをお願いします、とメイドさんに後の事を頼もつしたところへ、
曲がり角の向こうから騒がしい声が聞こえて来た。

「おい！！陛下との面会はとっくに終わっているんだろっ！！さっさと呼んで来い！！まさかディゲアに会って俺に会わないとでも言っんじゃないだろうな！！」

「そのようなことはございません！！．．．．．きっと何か他の用事がありになるんですわ。こちらへお戻りになるのがいつ頃なのか、私たちも伺っております」

角からこそつと伺ってみると、メイドの一人の腕を掴んだ男が乱暴に彼女を部屋から外に追い出しているところだった。

ちよつと！！そこ私の部屋なのに、なんであんたが偉そうにしてんのよ！！

止めようと一歩踏み出そうとしたけど先にその男の目が私の姿を捕らえたようだった。

目敏いな！！動くものに反応するハンターも真っ青だよ！！

男はすぐさまメイドから手を離し、大股でこちらに近寄って来た。今さら逃げても仕方が無いのでこちらも渋々角から一歩出る。顔には出さないけどほんとに渋々。

すかさずアイヴンさんが男の人から私を隠すように前に立ってくれた。

おお！護衛っばい！！

「これはこれは、運ばれて来た方。突然ご訪問して申し訳ありません。どうしても一度お話したくて、居ても立ってもいられなくてね。俺は国王陛下の第二王子オルバの長子、ガルーダといひます。

以後お見知りおきを」

「あいにくですが、サイキ様は少しお疲れになったのでお休みにならりたいそうです。本日はお引き取り願えますか」

「フン。一介の近衛如きが偉そうな口を利く。何、そんなにお時間には取らせない。ご挨拶に伺っただけだしな」

王位継承権第1位の王子の息子（長い）であるガルーダ王子というのは、いかにも柄の悪そうな男だった。

確かにディゲアさんの従兄弟なだけあって顔立ちはそこそこ整っているけど、酷薄そうな笑みが板についてるあたり性格の方には期待出来そうにない。

耳が隠れるくらいの灰色がかった金髪は襟足が長く、身長はエルタさんよりは低そうだけど175センチくらいはありそうだ。

でもまだまだ幼さの残る顔立ちを見ると、意外に若いのかもしいない。18、9といったところかな。

「そちらの方はディゲアとは城に来てからも会っているそうじゃないか。なら同じ王孫である俺には会えないというのもおかしい話だろう。それとも、口さがない連中が話してるあの噂ってのは本当のことなのかな？」

「噂ですって．．．．．？」

「そ。』運ばれて来た方は既にディゲアのお手付き』って噂だよ」

5日目 3 (後書き)

立花の身長は大体162センチ。デイゲアは立花より高くてガルーダより低いです。アイヴンは立花より高いけど、デイゲアよりは低いです。参考までに。

5 目 4 (前書き)

ちよつとめ?とす

ちよ！えええええええ！？

お手付きつてあのカルタ取りとかのお手付きなんてオチじゃないわよね？ガルダだけに！なんつって………

まあそんな（寒い）冗談はさて置き、なんでそんな噂が………

「そのような根も葉もない噂、サイキ様だけでなくデイゲア様に対しても大変な侮辱です！」

「おいおい、お前は運ばれて来た方が城に着いてからの護衛だろう。ここにいらっしやるまでのことなんか分からないじゃないか」

「ちよちよちよ！！あの、廊下で話すようなことでも無いんで、部屋に行きましょう！！」

後ろめたいことなんて全然無いけど、噂なんてどこでどうねじ曲げられて伝えられるか分かったもんじゃない。

女ばかりの職場で何度もそれは恐ろしい噂を耳にしてきた身としては、こんなオープンな場所でそんなデリケートな話はもってのほかだから！！

まあ現時点でも相当にねじ曲げられた噂ではあるようだけどね………

「お茶の用意さえしてくれたらあなたたちは下がっていいわ」

アイヴンさんはメイドさんたちを全員部屋から下がらせると、部屋の主よりも横柄にソファに陣取るガルーダさんを強く睨みつけた。王族に対してそんな態度で大丈夫なのか、ちょっと心配だけど気持ちにはよく分かる。

さすがに睨みはしないけど、あまり好意的な態度で迎えたい人じゃ無いのは確か。

「それで？あんたがディゲアを男にしてやったんじゃないの？」

い、いきなり口調が馴れ馴れしく……！！

っていうかディゲアさんを男にどころか、ディゲアさんが男っていうことを知ったのが昨日です。

でもそれを言ったら恐らくディゲアさんの沽券に大きく関わりそうだから絶対に言わないけど。

大体10歳くらい年下の、まだ少年と言ってもいいような子をどうこうするほど私も飢えちゃいないんで。

「何でそんな噂が流れるようになったのか全く分かりませんが、そういう事実は一切ないです」

「ヤツはあんな辺鄙なところに14の時から2年も引つ込んでんだぜ？人との接触を避けてたって聞くけど、そこへ若い女が現れたんだ。やることなんて一つだと思っただけなあ。大体あんたを保護してすぐに連絡しなかったって言うじゃないか。疑う余地がありすぎる

だろっ」

14の時から2年っていうと今16歳？

ほら！私よりも9歳も年下じゃないの！！

さすがに私とそういう噂になるのはディゲアさんに申し訳ないって。

「ガルード様、お言葉にお気をつけ下さい。サイキ様に対して無礼でございます」

「あんだ元の世界じゃ平民なんだろ？畏まった口調の方が気を遣うかと思っただけど？」

ギョッと眉毛が寄ったままのアイヴンさんがそう忠告しても、彼は私から視線を外さない。

無視された上に一向に言葉遣いを正す気の無いガルードさんに相当キレているのか、アイヴンさんから漂ってくる冷気で半端無く寒いんですが……。

「確かに私は平民というか庶民の出なんで、別に口調は気にならないですけど」

むしろ態度が気になるよ。

だって何その「こつちが気を遣わせないようにくだけた口調で喋ってるんですよ」的な言い方。

どう考えてもそれがこの人の地っばいじゃんか。

「とにかく、私とデイゲアさんの間にそんな男女の色っぽい事情はありません。大体10近くも年上の私とそんな噂になるなんて、デイゲアさんが可哀想ですよ」

「．．．．．あんた意外に若作りだったんだな」

「失礼な！！別に若く作ってるわけじゃないですよ！！日頃の努力の賜物です！！！！」

高校時代から紫外線は極力避け、大学を出てからは毎晩のローションパックもかさずに、肌が荒れるから大好きなナッツ類もつまみから除外すること5年．．．．．私が手塩にかけて育てた美肌なんだからね！！

「わたしもサイキ様はもつとお若いかと．．．．．てつきり年下かと思っていました．．．．．」

「ええ！！私にしたらアイヴンさんはどう見ても年下でしたけど！？それにエルタさんと同級生なんでしょ？22、3くらいだと思っただんですけど違いますか？」

「はい、わたしもフィンエルタも共に23になります」

「ふーん。異世界の人間ってのは童顔なんだな。まああんたが否定するならそういう事にしといてやるけどさ、もしデイゲアを王太子になんて考えて取り入ろうとしてるんだったら止めたほうがいいぜ」

親世代飛び越えていきなりディゲアさんを王太子に？

考えてもいかなかったというか、私は王太子問題に口を出すつもりは無いってば。

「別にそんなことは考えてないし、私は王太子とか王位関係の問題にはノータッチでいたいんですけど」

「あんたはそうでも周りのやつが何を言い出すかわかんねえだろ。いいか、異世界のお嬢さん。あいつが2年前から田舎に引っ込んだまっただのはな、俺たちの伯父でもあった王太子が死んでビビっちまったからだよ。あいつは王位になんて全然興味無いんだ、寝た子を起こすような真似さえしなきゃ俺からは文句はねえよ」

さっきまでのちよつと軽薄な雰囲気は消え失せ、真剣な眼差しで私を見据えるもんだから、思わずゴクリと喉が鳴ってしまった。

ディゲアさんが王位に興味が無さそうなのは昨日で分かったし、そもそも彼が王族って知ったのも昨日。

そこで私に彼を王太子にしろって言う方がどうかしてる。

私に言いたい事を言って満足したのか、ガルーダさんは冷めてしまったお茶を一口飲むと「邪魔したな」と言って部屋を辞した。

っていうか『お嬢さん』って私の方が絶対年上なんですけど……

未だ怒りの治まらない様子のアイヴンさんをリビングに残し、私は着替えることにした。

こんな高そうな服じゃ、全然落ち着かないもんね。

庶民は身の丈に合った服が一番。

あーTシャツとスウェットパンツがこんなに恋しいと思う時が来るなんて。

コットン（らしき素材）のチュニックワンピースに着替え、リビングに戻る。エルタさんが来ていた。

どうやらアイヴンさんが呼びつけたらしい。

「どうもサイキ様、災難だったようですね」

「うーん、確かにびっくりはしましたけどそんなに腹は立たなかったですよ」

「サイキ様はお優しいですね。わたしなんて叶う事なら蹴り出したくらいでしたのに……」

別に優しいってわけじゃないけど、あの人の話で怒る部分って言うたら噂話のとこくらいでしょ？

やましいことなんて全く無いんだから否定さえさせてくれればそれでいいし。

「なんか怒るといふよりはディゲアさんに申し訳ないというか。私のせいで年上好きのレットル貼られたりしてないといいんですけど」

「あはは。ディゲア様は確かにどちらかと言えば年上の女性にモテますからねえ」

「あ、やっぱりディゲアさんってモテるんですか？」

あの美少女顔の隣に並ぶのは、女として相当の勇気がいりそうなんだけ。

「そりゃあ王族ですし、あのお顔でしょ。同じ年頃の女の子はちょっと気後れするみたいですけど、年上の女性にしたら可愛いんじゃないですか？」

「可愛いと言えば可愛いんですけど、私の居た国では成人した人が18歳以下の子どもに手を出すのは犯罪なので、私にしたらディゲアさんとどうこうって言うのはちょっと無理がありますねえ」

「フィンエルタ、あなた生まれたのがこの世界で良かったわね」

へへエルタさんってば18歳以下にも手を出しちゃってるのか。やっぱりエロタだね！

アイヴンさんのセリフに若干引きつった笑顔になってしまったエルタさんだけど、また急にニヤニヤし出した。

こういふ顔の時はよからぬ事を考えてるに違いない。要注意。

「じゃあガルード様はどうです？あの方は今年で20になられると言うし、サイキ様と『どうこう』なっても犯罪にはならないでしょう？」

「えっ？ガルードさん？うん、犯罪では無いですけど好みじゃないですねえ。性格悪そうだし」

「悪そうなのではなくて、実際に悪いんです。でなければ女性の部屋に押し掛けた挙げ句にあのような暴言を吐けるはずがありません」

「ガルード様が未婚の王子の中では最年長なんですけどね。サイキ様のお眼鏡には適いませんか」

「いや、別にそこまで王子様に拘ってくれなくてもいいんで！」

ガルード王子とどうこうなつてまで玉の輿に乗りたくないというか、この世界に永住したくないというか。

飽くまでも私の目標は『帰宅』なんでね！そこんところよろしく。

あのとんでもない噂のせいかな、今日はディゲアさんとは会えないままに終わってしまった。

こちらに来てから毎日会っていたので、なんだか胸にぼっかりと穴があいたように感じる。

私は思いのほか彼を心の頼りにしていたのかも。

デイゲアさんが突然現れた私を不審がることもなく、親切にも受け入れてくれたから、私もこの世界の人のことを信じる事が出来たんだと思うのよね。

もし私を最初に発見した人が『運ばれて来た人間』ということに気がついたとして、例えば私を神様の遣いのように崇め期待をこめた目で見て来たとしたら、私も距離を感じて素直に歩み寄ることが出来なかったかも知れない。

デイゲアさんは私を保護したことで悪意ある噂の標的になってしまつて、後悔してるかな？

5 日目 4 (後書き)

5 日目はここで終了です。

誤字脱字等ありましたら御知らせ頂けると助かります。

6 目 1 (前書き)

今回から1話分を少し長くしてみようかと思えます！

王様との面会が済んだ事で他の王族や政府要人からの面会の申し込みが殺到するだろう、という予想は「大げさなく」なんて馬鹿にしてたけど、きつちり現実のものとなった。きつとあの噂のせいもあるんだろうなあ。ほんと迷惑な噂を流してくれたもんだ。

熱愛が発覚した芸能人がそれについてのインタビューをさけるように、私もなるべくならその話については語りたくないんだけど。早く鮮度を落として「あ、そんなウワサもあつたよねえ。キャハハ」くらいにみんなの記憶の片隅に追いやらないと。

叶うなら今日は誰とも会いたくないなーと思ってたんだけどね。そうは問屋が卸さないらしい。

「なんでまたいるんですか………?」

私の部屋には昨日に引き続き、ガルーダさんがいらっしやっていた。しかもえらい可愛い女の子を連れて。

しかもしかも、アイヴンさんがオルティガさんに呼ばれて離れてる隙に!!絶対狙ってたな………

「あ?俺だって別に来たくて来た訳じゃねえよ。妹があんたに会い

たいつつーからよ」

「けっ！シスコンめ！！」

「別にいいんですけどね、出来るなら前もって連絡して下さいよ。こっちにも都合つてもんがあるんですから」

「何の都合だよ。どうせ用事も無かったんだろ？どうやって他の人間の面会断ろうかとか考えてたんじゃねえの？」

「うっ．．．．．。そ、それで、こちらが妹さんですか？」

さつきから私の一挙一動を見逃すまいとその大きい目で熱いくらいに見つめてくれてる子。

ディゲアさんと年は同じくらいかな。まだあどけなさの残る顔には好奇心がありありと見て取れる。

ヘイゼルの大きなアーモンド型の瞳はくるとカールしたまつ毛に覆われていて、やや灰色がかった金髪はお兄さんと同じなんだけど、なんと髪型が姫カット！！

妹さんということは同じく王孫で王女様だよね？ということはお姫様だよな？

まさか私の生涯で姫カットのお姫様を見る日が来ようとは．．．．．。

「俺の妹のメリエヌだ。メリエヌ、挨拶しろ」

「御機嫌よう、サイキ様。わたくしオルバ第二王子の長女でメリエ
又と申します。本日はお会いできて光栄ですわ」

おおう！ガルードさんと違っていかにも王族って感じ！

ビラッピラのドレスでは無いけど、品のいい薄い紫のワンピースド
レスを身に纏い、少し腰を下げる様に挨拶をしたメリエさんは文
句無しのお姫様。

こんな柄の悪い王子の妹だなんて思えないよ！反面教師ってやつか
な？

「こんにちは、私はサイキと言います。それで今日はどう言った用
件で？」

私が二人をソファセットに案内すると、お願いするまえにメイドさ
んがお茶を用意してくれる。

メリエさんはガルードさんと一緒に私の前に腰を下ろし、いたず
らっ子のようなわくわくした表情を隠しもせずにこちらに向けた。

「本当は噂の真相をお聞きしたかったんですけど、お兄様がそれは
もう伺ったとか。あれは全くのデタラメだと．．．．．本当です
の？」

「はい、全くのデタラメです。神様に誓って嘘は言ってません」

私がそう言った途端、メリエさんは目に見えてガツカリとした。

本当のことなんで、そう落胆されても困るんだけどね。

「そうですねの．．．．．あの堅物のデイゲアを落としたりと期待しておりましたのに．．．．．。ではサイキ様、あの林の家にか女性

女性の痕跡のようなものはありませんでした？」

「えええ？女性の痕跡．．．．．？うーん、特にこれと言ってなかった気がしますよ。借りた服もデイゲアさんのものみたいだったし」

実際には住んでる本人が女の子だと思ってたから、あつたとしても違和感を感じなかったと思う。

でも結局そういったものは無かったような。置いてるもの自体が少なかったし。

「まあ！サイキ様、デイゲアから服を借りたんですの？」

「そうですねですよ。私着てた服しか無かったもんだから、借りるしかなくて」

「そう．．．．．なるほどね．．．．．。デイゲアのことはもうよろしいですわ。それで、サイキ様は王太子の問題に関わりたくないようだとお兄様が仰ってたんですけど、それは本当のことですか？」

なんか話が一気に変わった気がする。さっきのガツカリとした顔は

どこへやらだし。

それにみなして王太子王太子って……誰か一人くらい違う事言えないわけ？

こつ、もうちょっと私が具体的に答えやすいようなことをさ。

「本当と言うか、私が出る幕でもないでしょう？私に王族のことなんてわからないし」

「では、もしこの問題が本当にサイキ様の『理由』だとしたらどうなさるんです？元の世界にお帰りにはなりたくないんですの？」

そうなんだよね。みんなが執拗に聞いて来るから頑なに拒否してるけど、これが『理由』だという可能性はゼロじゃない。

色々否定してはみるけど、これだけ頻繁に話題になるってことは、今一番この国で重要なことなんだろうなあ。

「それはもちろん帰りたいですよ？でも王太子っていつまでも不在なわけでもないでしょ？いつかは誰かがその地位に就いて、王位を継がないといけないですよ。それも遠い未来じゃないはずです。なら帰宅が少々遅れてもいいから私は傍観者でいたのかなーと。もし王太子問題が『理由』だとしても、私は特に何もしなくても帰れると思ってますよ」

「どつしても口を出すつもりは無いと仰るんですね？」

「その通りです」

「もしデイゲアが王位を継ぐ事になっても？」

「え……………?」

デイゲアさんが王位を継ぐ？

だって継承権を放棄するつもりだって言ってたし、あんな田舎に移り住んじゃうくらいなのに？

それに王太子はガルードさんやデイゲアさんの親の世代なるものじゃないの？

突然の質問は私の思考を面白いほどいっぱいハテナマークで埋め尽くしてくれた。

「デイゲアさんって王位を継ぎたくないって言ってた気がするんですけど……………」

「確かにデイゲアは俺たち直系王族の中では、継承順位が一番下。あいつの父親は陛下の子どもの中でも末子だから、普通に行きやまず回ってこねえ」

「ならデイゲアさんが王位を継ぐ事なんてすごい低い可能性じゃないですか」

「それがそうでもありませんのよ」

メリエヌさんは口角を上げて私の目を見据える。

「わたくし達のお父様が継承権第1位と言いながらも立太子出来ないのはご存知？」

「それは聞きました。議会の承認を得られないって……」

「それはね、賛同しかねる他の議員の方々がディゲアを推しているからですよ。この状態ではいくらディゲアが継承権を放棄したいと言っても無理ですわね」

ディゲアさんってば人望があるんじゃない。

王位には興味ないとか言っときながら、資質は十分ってことかな。

「マリグエラ殿下には妃殿下がおられましたけど、お子様が御出来にならないまま5年前にご病気で亡くなられてますの。それでマリグエラ殿下が王太子としてご健在の頃から、即位の際にはディゲアを養子にして立太子させると言うのは公然の秘密でしたわ」

「なんでディゲアさんなんですか？他にも王孫の人って居るんじゃない？例えばガルダさんとか」

引き合いに出されたガルダさんが幾分鼻白んだようだった。

そりゃ選ばれなかったっていう敗北感もあるでしょうとも。

親の継承順位で言っても、年齢で言っても、ガルダさんはディゲアさんの上なんだから。

「仕方の無いことなんですのよ。ディゲアはわたくし達王孫の中で

も格段に頭がいいし、優秀ですもの。ディゲアは間違はなく王族の中で一番国王に向いていますわ。ですからマリグエラ殿下も特に目をかけて、まだディゲアが10かそこらの時から政務を手伝わせていましたし」

「それも殿下が生きておられた時までだ。もうあいつは王位になんか興味ねえよ。次に王となるのは俺たちの親父だ。今は議会の承認が下りなくなつて、このままじゃ居られないってことはあいつらも分かつてる」

「お兄様は随分お父様に王位を継いで頂きたいのね。わたくしは嫌ですわ。お父様は他になさりたいことがあるんですもの」

「メリエヌさんはオルバさんが王太子になることに反対なんですか？自分のお父さんが王様になるのは喜ばしいことに思えますけど」

「わたくし達のお父様は、マリグエラ殿下のすぐ下の王子ということともあつて常に比べられて来ましたわ。殿下が優秀であればあるほどお父様は肩身の狭い思いをしていたのです。けれど、お父様はいつか臣に下る日のことを考えて30年過ごされて来たわ。国のためにと既存のエネルギーに代わる代替品の研究をなさっているの。それを捨てて王位に就けというのは酷な話ですわ。殿下が王太子として立派に務めていた間、お父様だって努力されていたのよ……」

メリエヌさんは下唇を噛んで悔しそうな顔でうつむいてしまった。そっか、他の王様の子どもだってただ30年過ごして来た訳じゃないよね。

王族としていつまでも城で生活できるわけじゃないし、貴族の居な

「この国じゃ臣に下ると言ってもその覚悟は軽いもんでは無さそう。

「だから、親父が即位して数年ほど俺が王太子を務めれば、親父はすぐにでも退位すればいいんだよ。それから研究に戻ったって遅くはない」

「王太子として数年、即位して数年。わたくしはお父様がそれに耐えられるとは思えませんのよ。きつとお体を壊されてしまうわ。サイキ様、わたくし達のお父様は本当に王になるような方ではありませんの。もし本当に王太子の問題に口を出されないと仰るなら、例えお父様の代わりにディゲアが立太子することになっても、それを違^{たが}えないで下さいましね」

「メリエ又！！余計な口を出すな！！俺は親父が王位を継ぐ事には賛成なんだよ！」

「ひどいですわお兄様！！ご自分が王位に就きたいからと言ってお父様の努力を棒に振れと仰るの！？あんまりですわ！！」

「王族として生まれたからには、王位に就く可能性は誰にだってあるんだ！！親父だってその事は分かっているはずだし、お前にだってその覚悟があるんだよ！！」

なんか兄妹喧嘩が始まってしまった。

うーん、メリエ又さんは相当なお父さん思いらしい。

確かに30年続けて来た研究を止めて王様になってねって言うのは可哀想な話ではある。

議会の承認が得られないって言うのもディゲアさんが優秀だからっ

ていうだけではないんじゃないかな。

しかしこのガルーダさんも、王様になりたいという願望はあるみたいだけど、一応王族としての責任みたいなのは感じてるんだ。

「確かに自分の今までの努力を捨ててって言うのはひどいですよね。私の状況とちよつと似てるかも」

私だって25年生きて来た場所から急に浚われてきたんだもん。そのオルバさんより私の状況の方がどう考えてもひどいけど、共感出来るかな。さっきまで喧々囂々と言いついて二人も、私のしんみりとした言葉にその口を噤んだ。

「取り乱してしまって申し訳ありません。サイキ様が1日でも早くお帰りにされるようわたくしも祈っております。わたくしにお手伝いできることなら何でも致しますわ。でも、どうかわたくしのお願いもお心に留め置いて欲しいのです」

「俺も大声を出して悪かった。．．．．．もしあんたがどうしても誰かを王太子に選ばなきゃならない事態になったら、迷わず俺を選ばせてやる。それで帰れるんならあんたも問題ないだろ？」

「はあ．．．．．。私は誰も選びません。それでいいですか？」

「分かりましたわ」

この問題は色んな人の思惑が複雑に絡み合ってる。
あっちを立てればこっちが立たずってなもんよね。
なら最初から言ってるように、私はこの件には関わらない。
誰を選んでもどこかからは文句が出そうなんだもん。

私の決意にメリエ又さんは納得してくれたようだけど、ガルーダさんは薄く笑っただけだった。

6 目 1 (後書き)

誤字脱字等ありましたら御知らせ頂けると助かります。

今泣いたカラスがもう笑った……とは聞くけど、その反対を地で行く状況。

私の前でガルーダさんは青さめながら冷や汗を流している。隣に座るメリエ又さんも元から白い肌がもう透けてしまっんじゃないかってくらい蒼白。

そして私の後ろに立つのはにこやかな笑みを浮かべているオルティガさん。

もしかしてオルティガさん最強説……？

私が誰も王太子には選ばない、ときっぱり言い放った数分後。

ノックの音に続いて部屋に入って来たのはアイヴンさんとオルティガさんだった。

「あ、話は終わったのかな」くらいにしか思ってたけど、目の前に座る二人の王孫にとっては歓迎する事態ではなかったらしい。二人ともさっと顔を青くして、メリエ又さんなんか完全に俯いてしまったんだもん。

ガルーダさんだってさっきまでの俺様な態度はどこへやら？って感じよ。

「思いがけないところであなた方をお見かけしますね、ガルード様並びにメリエヌ様。私には本日お二方がサイキ様に面会されるというご予定は報告が無かったんですが……おかしいですね。伝達に不手際でもあったんでしょうか」

オルティガさんの静かだけど「何勝手なことしてやがんだ」オーラは痛いほど伝わって来ます。

ようやく二人が青ざめてた理由が分かったよ！

「すみません、誰かと会う時はご報告しないといけなかったですか
……?」

「いえ、サイキ様からのご報告は必要ありません」

ビクビクしながら聞いた質問は即答された。

でもまだ怒ってるじゃない!!

しかしその後続く「ですが」というオルティガさんのセリフに、私の背筋は氷ついた。

「私は王族の家令として、このお二方のみならずすべての王族の方々のご予定について把握しておく義務がございます。その私がお二人がこちらにいらっしやる事を知らなかったというのは、ガルード様の侍従もしくはメリエヌ様の侍女、あるいはその両方が私への報告を怠ったということです。これは見逃す訳には参りません」

もしかしなくてもこの二人、誰にも言わずにここに来たって言うの！？

なんか私も同罪っぽいじゃない！！朝から自室に闖入された被害者なのに！！

でもお父さんの事を思いってここにやってきたメリエ又さんが怒られるのは、私も心が傷む。

ガルダさんはどっちでもいいけど、やっぱここは一番年上の私が一肌脱ごうじゃないか！

「ち、違うんです！！えっと．．．．．そう、私が偶然部屋の前を通りかかったお二人を部屋にお招きしたんです！！」

「偶然、ですか」

オルティガさんはちら、と二人に目をやるとそのすっきりとした目元をさらに眇めた。

や、やめてあげて！！メリエ又さんの息が止まりそう！！！！

「いいでしょう。サイキ様がそう仰るのならこのことは不問に致します。どうぞやお話の途中だったようですが、中座させて頂いて申し訳ありません。どうぞお続けになってください」

「い、いや．．．．．もう十分話せた。メリエ又もいいだろう？」

「はいっ！サイキ様、本日は貴重な時間を頂きまして、感謝してもしきれませんわ。また異世界のお話をお聞かせ下さいね！」

そう言つて二人はそそくさと退室して言った。
さすがにこのオルティガさんが同じ部屋にいて話の続きが出来ないのは分かる。

でもここに残された私はどうしたらいいのよ!!

オルティガさんだけじゃなくアイヴンさんも何やら問いつめたいような顔で見てるし!

「大丈夫ですか、サイキ様。また何か失礼な事を言われたりなどしませんでしたか?」

「いえ、本当に挨拶くらいしかしてないんで」

アイヴンさんは納得してないようだけど、あの二人との会話は私の中では決着が着いてる。

言ったらまたガルードさんの印象が悪くなるだけだし、ここはシラを切り通させてもらおう。

心配してくれてるアイヴンさんには申し訳ないけどね。

オルティガさんとアイヴンさんは、私への面会希望者について話していたらしい。

王族はさすがに侍従長と近衛兵である二人がどうこうする事は出来ないの、私に判断は委ねられた。

一人ずつ会つてもいいけど、どうせみんなが気になる事は一つ．．．
．．．いや今は二つか。

同じ事を何度も違う人から聞かれるのって結構苦痛です。

芸能人の記者会見みたいに予め「王太子関連」と「噂」の話はナシ
でお願いしますとか言えたらいいのに。

簡単なティーパーティーのような席を開いて、そこにお招きするの
はどうか？という案に二人はしばし考え込んだけどOKを出してく
れた。

自分から言い出しておいてあれだけど、面倒くさ……。

その他の人達については、どういった理由で私に会いたいのかとい
う要望書のようなものをまず提出してもらうことに落ち着いた。
理由によっては私の『理由』になり得る事柄もあるかもしれないの
だそう。ややこしい。

でも二人が言うには、中にはただ『異世界人』が物珍しくて見てみ
たいだけという人もいるという。

私は動物園のパンダか！！

私は朝からの突然の訪問者に加え、この面会希望者とやらの話には
とほと疲れてしまった。

仕事が接客業だから人と接することに苦痛は無い。

でもそれはあくまでお客様に対して。

ここで私に会いたいと言う人は私に何かを期待しているから気が重
いのよ。

ため息も吐きたくなるわ。はあ。

「お疲れのようですね、サイキ様。今日は気分転換に外の空気を吸
われてみてはどうですか？」

「いいですね！閉じこもってばかりいると気分も塞ぎますもんね」

城にはいくつか庭園のようなものがあるらしく、一般の城勤めや官僚の人でも入れる部分と、王族や貴賓でないと入れないものがあるという。

前者の方に行くときつと私との面会を希望してる人がここぞとばかりに湧いて出て来そう。

緑に囲まれてちょっと落ち着きたい気分の私は、なるべく人に会わないで済みそうなところを希望した。

「では屋上庭園の方へ行きましょう。塔部分ではないので高さはそれほど無いですが、景色はなかなかのものなんですよ」

屋上庭園は塔を囲むように建っている部分の屋上にあつた。

広さはかなりあるようで、結構高い木々が植えられていたり、意図的なのかも知れないけど無作為に生えているような草花は、庭園というよりは公園という感じ。

どうやって作ったのか芝に覆われた地面は丘のように盛り上がっているとこまであつて結構本格的。

中にはゆっくりと寛げる四阿があるというので、そこに行ってみることにした。

「随分立派な庭なんですね。もっとこじんまりしたものかと思つてました」

「以前はペットを飼っていらした王族も居たようで、ここで散歩をさせていたそうですよ。前庭部分は王族の居住区も遠いですし、人

の出入りもありますからこちらの方が便利がいいようです」

「たしかに犬の散歩とか出来そうですね。これだけ広いと。もう入り口なんて見えなくなっちゃいましたよ」

「四阿はもう少し奥に作られているんです。周りを囲むように花が植えられていて、きつとサイキ様も気に入られると思います」

お城の庭と聞いたらバラ園とか想像してしまうお安い想像力の私を裏切つて、ここに咲いている花々は種類もさまざま。

華やかで見た目にも美しいものもあれば、野の花のような慎ましいものもある。

しばらくして前方に白い屋根の小さな建物が見えて来た。

確かに周りにはどこから入ればいいの？というくらいに花が植えられている。

その建物はやっぱり四阿のようだけど、どうも先客がいるっぽい。

「もう誰かいますね。邪魔するのも悪いからどこか違うところへ行きますか？」

「……あそこにいらっしゃるのはディゲア様ですね。フィンエルタも居ます」

「え！！ほんとですか！！」

言われた方を見れば、あのサラサラの金髪は確かにディゲアさんだ。エルタさんともう一人と一緒に四阿で何やら話している。

もう丸一日以上会っていないので、出来たら会って話をしたいな—
と思うんだけど．．．．あの噂があるからあまり近づかない方
がいいんだろうか。

「もう一人誰かいますね。あれ？なんかディゲアさんと似てません
？」

「あはは．．．．．」

ディゲアさんの向かいに居る人は身長もディゲアさんと同じくらい
で、茶色に近い濃い金の髪を肩まで伸ばした少年。

遠目に見たらディゲアさんの双子と言われても信じちゃうくらい背
格好が同じ。

ただ顔立ちはさすがに女の子と間違える程ではなく、線の細さはあ
るものの男の子だということは分かる。

3人をよく見ると、エルタさんが主にその少年と話してるみたいで
ディゲアさんは殆ど口を開いていない。

少年の方は何やら楽し気な雰囲気では笑顔も見える。

「なんか楽しそうですね。あの子も王族の人ですか？」

「そうです。やはり王孫殿下のお一人で、レシユカ様とおっしゃい
ます。ディゲア様とは同じ年ということもあり、王孫の中でも特に
中が良いようですよ」

「ディゲアさんと似てるから双子みたいですね。やっぱり邪魔しち

「や悪いから行きましようか」

私たちは来た道を途中まで引き返し、そこから他にもあるという四阿に行く事にした。

3人に声をかけることなくその場を離れたので、私たちに気がついたデイゲアさんがレシユカさんの視界を塞ぐように、さりげなく立ち位置を変えたことなんてもちろん知るはずがない。

6 目 2 (後書き)

誤字脱字等あればお知らせ頂けると助かります。

来訪 (デイケア視点) (前書き)

ここからしばらくデイケア視点になります。

番外編にするつもりでしたが、本編とリンクする部分があるので本編に入れます。

来訪（デイケア視点）

彼は間違いなく私のせいで死んだのだ。
誰が何と言おうとも。

林の中に誰か入って来た事にはすぐに気がついた。

この家に住む事に決めた2年前、安全では無いという理由で反対する周囲を納得させるため、林の外に防護壁^{シールド}を張ったからだ。

本来なら私が防護壁を解除しない限り、例えば虫の一匹ですらもこの林の中には入れないはず。

まるで見えない壁に阻まれているように、文字通り『入れない』のだ。

それがこの時、私の手にある受信機は侵入者が林に入ったことを告げていた。

あり得ないことだと分かっているながら、もしかして彼が自分のところへ来たのかと思った。

怒るだろうか。

罵るだろうか。

恨むだろうか。

それとも、悲しむだろうか。

しかし侵入者は林に入ってからしばらくしても中々やってこない。まさか道に迷っているはずはないと、ドアを開けたところに女がいた。

彼女はどう見ても普通の人間だった。

それが林に入れた事が不思議でならなかったが、ふと足元に見た事無いものが落ちていたのでそれを拾う。

その物体は『かさ』と言うらしい。

彼女は『運ばれて』来た人間だった。

淫色くりしいろの長い髪を一つに束ね、見開いたその瞳は夜の海のような静かな色。

始めて見る異世界の人間は、この世界では見た事もない色をその身に有していた。

ああ、とうとう私を王都へと連れ戻す『理由』が現れた。

どんなに逃げたくても、私の中に流れる血はまぎれも無いこの国の王家のものであり、私は城に居る必要がある。

来るきたべくその日まで。

彼女は自らを『サイキリツカ』と名乗った。

その名はこの世界では男の名前に他ならないのだが、やはり彼女は見た目の通り女性のようだ。

彼女がここに現れたからには私は王都へ彼女を送り届けねばならないだろう。

それはこの家を離れ、城へ戻ることを意味する。

2日後にフィンエルタがここへ来るはずだ。

彼は私がここへ移り住んでから2年、律儀にも10日置きに私を訪れている。

食料や生活用品などを届けるという名目だが、父や陛下に言われて様子を見に来ているのだろう。

簡単な話をしてその日のうちに帰って行く。

しかし今回は私と彼女も共に王都へ行かねばならない。

本来ならばすぐにでも迎えを呼ぶべきだ。

だが私にはこの生活に未練があった。

誰と会う訳でもなく2年、隠遁者のような生活だったが、城に居た頃よりも遥かに心が落ち着けた。

ここには誰も何も私を縛るものが無い。

防護壁に囲まれた、城よりもずっと小さな空間は檻の様に私を中に閉じ込めるが、その中は果てのないように広く感じる。

そこへ現れた異世界の女は、完全に異物であるはずだったのに、不思議とこの家に馴染んでいた。

誰かと食事を共にすることも以前なら苦痛に感じて仕方なかったはずだ。

それが彼女となら、空腹だけでなく心も満たされていくようだった。私が自分を繕う必要なく他人と接していることが自分でも信じられないくらいだ。

彼女が話す異世界はとても興味深い。

あの『かさ』というものは雨から身を守る道具であるらしい。

この世界は、人間の居住区から雨が消えて久しく、およそここに生きる人間は誰一人としてそれを目にしたことはないだろう。数少ない他の世界からの移住者を除いて。

100年、いや150年以上もの昔にやってきた異世界の人間は、この世界に膜を作った。

彼の世界は人間の手によって自然は破壊し尽くされ、人々は膜によって外界の汚染物質を遮断した空間の中で生活していたという。

この世界に辿り着いたその人は、まだこの世界に美しく守るべき自然のあるうちに、膜によって人間の世界を覆ったのだ。

多くの人間はこの膜が自分たちの生活を守るためと思っているようだが、実際は自然界に害なすものを一滴たりとも零さぬためである。

守られた環境で快適に暮らす事が出来る反面、私たちの生活に変化は乏しい。

雨が降る度に『かさ』をさして歩かねばならない『サイキリツカ』の世界は、空気ですらも毎日違っているのだろう。

私は考えた挙げ句、フィンエルタには翌朝連絡をした。
城に帰るから艇ふねで来いと。

普段ヤツが使っている小型艇クイックは一人乗りだ。

私と彼女が王都へ行くには、城所有の艇ふねを使う必要がある。

敢えて彼女が居る事は伝えなかった。

もし伝えていたらすぐにでも迎えにくる事は目に見えていたからだ。

私はゆつたりとしたここでの生活に『サイキリツカ』が加える小さな変化をもう少し楽しみたかった。

彼女は突然自分に訪れた災難とも呼べるこの出来事を、冷静に受け止めているようだった。

本心では混乱し、悲劇を嘆いていたのかもしれないが、私を罵倒したり泣き叫ぶということは全くなかった。

それを強いと感心もしたが、幾分寂しいと思った事もまた事実。

恐らく年上であろう彼女は、私に弱い部分を見せたく無かったのだらう。

私は彼女に自分が王族であるということを明かさなかった。

城へ行けばいずれ知れる事ではあるが、今ここでの穏やかな時間が失われるような気がしたのだ。

過去に王族が皆通ったという学院に居たころも、私の身分を知った人間は総じて私に気を遣い、上辺だけを取り繕っていた。

彼女にそんな風に見て欲しくなかった。

私とて一人の人間で、あまり表に出ないという自覚はあるが、感情

だつてある。

信じていた人間に手のひらを返された時のことは今も胸に残るくらいには傷ついていたのだ。

せめてここに居る間は私をただの『デイゲア』として接して欲しかった。

彼女は自分の居た世界では王族とは馴染みが無かったようで、以前この国に運ばれて来たという人間の話が王家の問題にまで及ぶと、明らかに動揺していた。

この時の『理由』は過去の他の運ばれて来た人間の話と比べても、些か異端ではある。

技術でも知識でもなく、彼女の感情がこの時の王家を左右したと言つてもいいからだ。

そして間違いなく今回も、彼女の『理由』は王家に関わる事だろう。私を王家へと連れ戻し、糾弾するためか。

それとも彼の亡霊に取り憑かれたまま、王家の中で朽ちさせる為か。いずれにしろ逃げる事は叶わない。

彼女は『理由』のためにこの国に現れてしまったのだ。

来訪 (デイケア視点) (後書き)

誤字脱字等あればお知らせ頂けると助かります。

帰城（デイゲア視点）

フィンエルタが怒るのはある意味当然だったと思う。

この2年、ヤツは何度も帰城するように訴えてきたのに、私は鼻も引っ掛けなかった。

ところがここに来て一転、理由も告げずに「迎えに来い」と言われたのだ。

しかし知らなかったとは言え、しきりにドアを叩いて彼女を怯えさせたヤツには腹が立った。

もちろんドアを強く開けたのは故意である。

あいつは少しくらい痛い目を見た方がいいのだ。

鼻を赤くして立っているフィンエルタを見て少し溜飲は下がったが、ヤツは『サイキリツカ』に気がついて無様なほどに驚いていた。

しかしそれも束の間で、いきなり私に詰め寄って来る。

「どういうことですか！！前回来た時には居ませんでしたよね！？まさか彼女をここ」

ヤツが何と言おうとしていたのかくらい16の私にだって分かる。女を困うだなどとよくもこの男が言えたものだ。

いや、この男だからこそその考えに至ったと考えるべきか。

すかさずヤツの足を渾身の力を込めて踏みつけておいた。

「馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、ここまで愚かだったとはな。貴様それ以上の暴言を吐く気なら、今、ここで、私がお前の首を飛ばしてやってもいいんだぞ」

「も、申し訳ありません．．．．．」

小さく、だがはっきりとヤツの目を見て言っていると、みるみる大人しくなった。

私の本気である事が分かったのだろう。

昔からこの男は女という生き物に並々ならぬ情熱を持っているようだ。

それはもう老いも若きも関係なく、性別が女に分類されるならどんな容姿であつても。

だから彼女を紹介するのは些か不安ではあつた。

この二日で彼女が状況判断のできる頭のいい人間であることは分かつたが、それでもフィンエルタの毒牙の餌食にならぬとは言い切れない。

しかし『サイキリツカ』を男だと勘違いしたフィンエルタの落胆ぶりには、この男の人となりを知っていてもやはり少し呆れたものだ。どうやら彼女もヤツのその態度で大体のことを察したのだろう。

その目には明らかに幾ばくかの不信感が見て取れた。ザマを見る。普段の行いが悪いからだ。

どうやら彼女の世界には艇ふねは無いらしく、初めて目にするそれに驚いていた。

しかしいざ飛んでみると、子どもの様に外の風景に釘付けになっていて、なんだか微笑ましかった。
退屈な空の旅も、こうしてみると悪くないかもしれない。

海岸線を真下に見ながら飛ぶ。

彼女は尚も風景を楽しんでいるようだが、私は城に着いてからのことを考えていた。

こうして運ばれて来た者が私の前に現れたことは、特定の人間にとっては面白くないだろう。

この国で一番『理由』になり得ることと言えば王太子問題しか思い浮かばない。

そんなところへ現れた運ばれて来た人間。しかも王族の元に。

私がいくら王位に興味が無いと言っても、それを本音と取ってくれる人間が果たしてどのくらいいるのか。

王位を虎視眈々と狙っている連中にしてみれば、『私』が『サイキリツカ』を連れて城に現われることがどういう風に見えるか、考えなくともわかる。

彼女は城に着けば様々な思惑に翻弄され、そして利用されるだろう。だが私はそれを分かっているながらも彼女と共に王都へと帰ることを決めた。

彼女によって私の罪が裁かれるのなら、それでいいのかもしれない。

『サイキリツカ』が言うには、この世界と彼女の世界は似ているのだという。

空から見る分には、ということらしいが。

王都に入ると途端に建造物、それも高層のものが増えて来る。

この国は世界でも最大の規模を誇り、その王都が世界で最も発展している都市であるの言うまでもない。

「・・・・・・・・高層ビル・・・・・・・・？」

眩きがした方を見ると、『サイキリツカ』が窓にへばりついて外を呆然と眺めていた。

林の家があったあたりとはあまりにも様相が違うので驚いたのだろ
う。

たしかに同じ国とは思えないほど、この辺りは開発が進んでいる。

「もうこの辺りは王都の一部だな。城までもうすぐだ」

あとわずかな時間で彼女は陛下の保護下へ置かれ、頼るべき人間は私ではなくなる。

多くの人間が彼女を敬い、もてなし、そして期待するのだ。

彼女は私と過ごしたあの林の家での2日間を懐かしんでくれるだろ
うか。

それとも城での豪華な暮らしの中で、記憶の底に沈んで行くのだろ
うか。

「城が見えて来ましたよ」

フィンエルタの声に現実に戻される。

確かに前方にはこの王都の中心とも言える王城が聳えたって居た。

私はあのなかで14年住んでいたのに、帰って来たという実感が一つも湧かない。
むしろ城のほうが私に向かって手を拱こまねいているかのようだ。
この体に無数の糸が着いていて、それを手繰り寄せられているような……。

「王族ってそんなに大家族なんですか？お城、かなり大きいですよね」

「城は王族の居城であると同時に、政治の中枢でもあるからな。他に軍部もこの中にある」

「今ここに住む王族なんて10人居るか居ないかってところですな。傍ほっけい系の方々は他に邸やしきを下賜されてそこで暮らしてますから」

王位を継がなかったその代の人間は、城を離れ城下に住まうことに決まっている。

このまま何事もなくオルバ殿下が王太子となり即位されれば、私も両親と共にこの城を去る事になるだろう。

そこには少しの未練も無く、むしろようやく解放されるのだという喜びすら感じる。

しかしその時にはおそらく『サイキリツカ』はこの国にはいない。

「……いや、この国だけではなく、この世界のどこにも。」

帰城 (デイゲア視点) (後書き)

誤字脱字等あればお知らせ頂けると助かります。

再会（デイゲア視点）

「教えませんよ！私とデイゲアさんだけの秘密です！」

彼女は『かさ』のことを訪ねたフィンエルタにそう言った。別に秘密にすることも無い。

それでも彼女が私との会話を少しでも特別に感じてくれているのかと思うと、やはり嬉しく思う。

この時、雨と『かさ』の話は私にとっても心の奥に大切に仕舞っておきたい秘密になった。

ふと視線を感じて視線を上げると、オルティガがこちらを見ていた。他の人間から見ればどこが変わっているか分からないだろうが、私にはこの男が珍しくも驚いていることがわかる。

その時ようやく自分が彼女の言葉に頬を緩ませていたのだと気付かされた。

特に何も言っただけなのに、バツが悪い……。

感情が顔に出るなんて、まるでずっと子どもの頃に戻ったみたいだ。

彼女は着替えを持っていなかったの、林の家に居た間は可哀想ではあったが私の服を貸していた。

城に着いてまで私の服を着ることもないだろうと、常備してある女性用の服の中から適当なものを持って来させた。

「ああ、着替えがないと言っていたから用意させた。当座のものがやはり私の服よりはいいだろうからな」

「ありがとうございます。助かります」

「サイキ様、今までディゲア様の服着てたんですか？」

「だって着て来たこの服しか無いんだから仕方ないじゃないですか。毎日同じ服着る訳にも行かないし。さすがに下着までは借りませんでしたけど」

「……………ッゲホゲホ!!」

……………確かに下着のことは失念していた。気がついたからと言って貸す訳にもいかなかったが。

しかし服ですら同じものを2日続けて着なかった彼女が、下着の替えもなしにこの2日どうやって過ごしていたのだろう。

……………いや、このことは深く考えるまい。

「……………私の家では不便をさせてしまったようですまなかつたな。ここでは入り用のものがあれば、何でも言えば良い」

「とんでもないですよ！着替え貸して頂けただけで十分でしたから」

「しかし、やはり自分の服が無いと困るだろう。欲しいものが無ければ買って来させるし、店の者をここに呼んでもいい」

「それなら明日にでも城下に買い物に行かれたらどうですか？女性
は自分の好みがあるでしょうし、サイキ様も王都見学したくないで
すか？」

「あ、その方がいいですね。この国の街とかお店とか見てみたいか
も」

「じゃあ後で案内に行かせる人間を選んでおきますね。どんなもの
を見たいのか希望とかあったら遠慮なく言ってお下さい」

「私、向こうの世界では百貨店デパートで働いてたんですよ。そういうのっ
てこっちにもありますか？」

「デパート以外にも、大型のモールなんかもありますよ。女の子に
人気の店がいっぱい入ってるよ、調べておきますね」

「お前はそういうことには本当にそつが無いな……」

「やっぱプレゼントするなら喜ばれますからねえ。こういう情
報はいくらあっても困りませんよ。デイゲア様も少しくらい女性の
好みに興味持っていないと後々苦労するんじゃないですか？なんなら
俺がオススメのお店とかレストランとか特別に教えて差し上げても
いいんですけど」

「この先いつか必要になったとしても、お前の助けだけはいらんな」

フィンエルタは本当にこと女性に関してはその労力を惜しまない。
この国の歴史なんて大雑把にしか記憶していないくせに、女性の顔
と名前、誕生日や好みといった情報はかなり詳細に覚えている。

私ですら知らない侍女の名前も、こいつに聞けばすぐに出て来るんだらう。

しかしあまりにもそれが多岐に及びすぎていて、『女性の好み』では一括りに出来ないことは知っている。

私が胡乱げにフィンエルタを見ていると、急に『サイキリツカ』が立ち上がった。

「わ、私はデイゲアさんはこのままでも十分素敵だと思えます!!」

「は?」

「え?」

「ん?」

どうやってその思考に至ったのかが激しく気になるが、彼女は今間違はなく私のことを『素敵』と言った。

私は小さい頃から愛想が無く、自分で言うのもなんだが頭が良かったので、周りの人間が持て余し気味なことに気付いていた。

学院に居た頃に私に媚び諂^{へつ}っていた連中も、言葉では私を讃えているも、内心は疎ましく思っていたに違いない。

詰まるところ、私はこういった純粹な褒め言葉に慣れていないのだ。自分でも耳が熱くなっていることが分かる。

このあとすぐにオルティガが現れなかつたら、きっと私の顔はみっともなく赤くなっていたことだらう。

『サイキリツカ』が四大老に会う事になるのは当然で、これは彼らの義務でもある。

ここで無事に彼女が運ばれて来た人間と確認出来れば、彼女の身元は保証される。

2年ぶりに見る四大老は顔ぶれが変わっていなかった。

違う事と言えばニージークの髪が榛色から随分と明るい赤毛に変わったくらいか。

この女は相変わらず自分を飾る事には余念が無い。

一見すれば40そこそこのエイカーよりも若そうだが、これで孫までいるというのだから恐ろしいものだ。

レイジエが『サイキリツカ』の手を照合してみると、やはり彼女の登録は無いようだった。

これで彼女が運ばれて来た人間であることは証明された。

登録が無いということは、この世界に彼女の近親者はおるか、血統が存在しないということだ。

異世界の人間でなければ説明がつかない。

「登録がないなら確実にしようね。それで、ディゲア様が保護することになった経緯いきわづらひというのは？」

「あ、私が見ついたら居た場所というのが、ディゲアさんのお家がある林のすぐ外だったんです。他にはお花畑しかなかったので、林の方に行ってみたらお家に辿り着いたんですよ」

「あの辺りは確かに他に民家は無いですわね。それにしてもディゲ

ア様、彼女を保護したのは2日前だったとか。すぐに連絡を下さればよろしかったのに。何かそう出来ない理由でもありましたの？」

「今日フィンエルタが来ることは以前から決まっていたからな。わざわざ1日早めることもないだろうと思つてのことだ。特に他意は無い」

「それこそ、連絡を頂けましたらフィンエルタなどを遣るのではなく、もっと丁重にお迎えに上がりましたわ。運ばれて来た方は国賓も同然。それを小型の艇ふねでお連れした挙げ句に、わたくし達へは城へいらつしやるまで知らせて頂けないなんて、デイゲア様も意地が悪うございますわね」

ニージークは2年経つた今でもやはり私のことが気に食わないらしい。

昔はそうでも無かったが、伯父に言われて政務を手伝うようになってから、何かにつけて突つかかってくる。

私が若輩なのは確かだとしても、大人気ないとは思わないのか。

まあ彼女は私が王太子に就くのは反対だったようだから、仕方が無いのかもしれない。

エイカーとレイジエが『サイキリツカ』を登録している間も、ニージークは意味ありげな目で私を見ていた。

完全な悪意という訳でもないだろうが、私の出方を伺っているのだろう。

私が王位を狙つて帰城したのかどうか。それがこの女の最も気になる事項に違いない。

ニージークはしきりと『サイキリツカ』に話しかけていたが、どう

も彼女はこの東大老が苦手なようだ。

なんとかして誘いを断ろうとしているのが分かる。

私としても『サイキリツカ』に何を吹き込むか分からないニージークを、彼女に近づけることには不安があったので断ってくれた方が有り難い。

どうせ未だ私が王位に就くつもりがあるのか、林の家でどんな会話が あったのか、彼女から聞き出すつもりなのだろう。

自室と向かう彼女と別れ、通い慣れた通路に行く。

城の象徴的な3本の塔の一つが王族の居住区になっている。

陛下と王妃殿下、伯父と伯母の家族と私の両親。

私も2年前まではここに住み、この空間に溶け込んでいたはずなのに、どうしてこうも異質に感じるのか。

要所要所に立つ近衛兵が、こちらに気付いては驚きをその顔に浮かべているのが滑稽で仕方ない。

まるで亡霊でも見たみたいじゃないか。

もしかしたら本当に亡霊を背負っているのかもしれないな。

「2年ぶりの親子再会ですね。恋しかったんじゃないですか？」

「うるさい。黙って歩け」

前に行くフィンエルタがおどけたようにこちらを振り返る。

恋しい？そんなこと思った事も無い。

城に居た時ですら毎日顔を合わせていた訳でもないのに。

むしろ申し訳ないと思う。

私が林の家に住むと言った時、明らかに両親は傷ついた顔をしてい

た。

彼らには何の落ち度も無い。

ただ、あの時の私は自分の周りの何もかもが疎ましかっただけなのだ。

目の前に迫るドアがいつそ鉄の塊であれば開けることも叶わないのに。

しかしやはり以前と同じく、それは軋みの一つも上げずに静かに開いた。

――そしてそこに居るのはまぎれもない私の両親。

「おかえり、デイゲア。よく帰って来た」

父は笑っていた。

彼は大抵いつも笑っているから珍しくもないが、懐かしくはある。

そして母も笑っていた。

幾分やせた頬を綻ばせて。

「ただ今帰りました。父上、母上」

私は帰って来た。

運ばれて来た人間を連れて、この城に。

2年前に伯父の命を奪った、この城に。

再会 (デイケア視点) (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ頂けると助かります。

墓所（デイゲア視点）

父と、そして母と向かい合わせに座る。

こうやって3人揃うことは、私が城を出る以前でも珍しいことだった。

それは多忙である両親が不在がちだったからだ。

「君の年齢での2年はやはり短くは無いな。随分と大きくなったじゃないか」

「そうですか？あまり自覚はないのですが」

「私の背などとつくに追い越してしまってたのね」

母は少し寂し気に私を見た。

そう言えば2年前はまだ母よりも小さかったかもしれない。

私にしてみれば流れるように過ぎた時間だが、母にとってはそうでもなかったのだろう。

「それで、城に戻って来たということは考え事は終わったのか？」

「別にそういう理由でここを出た訳ではありません。今回も運ばれて来た人間が現れなければ戻る事も無かったと思います」

「まあ自分から出て行った手前、そう言った大義名分が無ければ帰って来辛いか。そういうことにしておいてあげよう」

「父上こそ、私に帰って来て欲しかったんならもつと手放して喜んだらどうですか？抱擁などは固くお断りしますが」

「君は本当に可愛げが無いな！誰に似たんだ……………」

私のこの気質は誰かに似たとかそういうものでは無く、この城で形成されたものだと思う。

きつと市井で育っていたならもう少し素直になっただろう。

ここで生活するには、私は感情を押さえることでしか生き残れなかった。

「運ばれて来た方を保護したそうだけど、どんな方なの？私もお会いしたいわ」

「フィンエルタと同じか少し下の年の女性です。珍しいくろいろ淫色の髪に夜色の瞳をしていました。とても素直な人間のように、さすがに彼の方が選んだだけのことはあると」

「君が他人を褒めるなんて珍しいじゃないか。それは是非、僕も会ってみたいな」

「彼女もお二人に会ってみたいそうです。さぞかし美男美女の夫婦に違いないと期待していました」

「まあ…………それはご期待に添えるのかしら？」

「ウーシュ、君はもつと自分に自信を持った方がいい。僕は君ほど

美しい人を見た事が無いよ」

「いやだわ、デイゲアの前でそんな……恥ずかしいわ」

母はそう言いながらも、少女のように頬を染めてまんざらでもなさそうだ。

我が親ながら呆れる。

父はこれでも部下には鬼のように恐れられているのではなかったのか？

後ろを見やればフィンエルタも若干うんざりした顔をしている。

この男の下で仕事をするには肉体よりも精神の疲労が大きいのだろう。

「彼女にはそのうち会う事もあるでしょう。それより城では何か変化は無かったですか？フィンエルタに聞いたところでは未だに王太子は空位のままとか。私はオルバ殿下が立太子されると思っていましたか」

「それが君の本音かい？君は兄上が君を次期王太子にと考えていたことを知っているはずだ。それとももう王位には興味が無いのか？」

「私はそのうちに王位継承権を放棄するつもりです。今のままでも継承順位は最も低いのですし、陛下も許可してくださるでしょう」

「2年も悩んでいた割には随分な答えを出したじゃないか。僕は陛下がそう簡単に君を手放すように思えないけど、自分で決めたことだし好きにするといい。僕は止めないよ」

言葉とは裏腹に父は目に見えて不機嫌になった。

それでもこれはこの2年間ずっと考えて来たことだ。

私が無様にも未だ王族の末席に名を連ねているから問題が解決しないのだ。

いくら伯父が私を王太子に望んでいたとしても、それはもう過去のこと。

彼はすでに亡く、オルバ殿下が立太子するに当たって最も邪魔な存在が私なはず。

憂いは取り除けばいいのだ。私自ら。

彼の方はその切欠きっかけにと私の元に彼女を運んで来たのかもしれない。

「デイゲア、私はマリグエラ殿下があなたを次期王太子にと仰った時、寂しくはありませんでしたけど納得もしたのよ。あなたはまだ若いけれど十分にその資質を兼ね備えていると思うわ。継承権を放棄してあなたは後悔しない？」

「……後悔なら既にしています。私は自分の身を弁えるべきでした」

「まだ同じことをうじうじと。時間のムダだよ。過ぎてしまったことは元には戻せないんだ。いい加減に過去のことと悩むのはよしたらどうだ」

父も母も私を過大評価しすぎだ。

過去に捕われずに済むなら、私は伯父の亡き後すぐにも立太子していたらどう。

それがどんなに難しく、心を切り離さなければ成し得られないこと

なのか、私はもう十分に理解した。

翌朝、フィンエルタがアイヴンを『サイキリツカ』に付けると報告して来た。

護衛を付けるのは仕方が無いが、フィンエルタが付くよりはずっとマシだ。

彼女も四六時中あの馬鹿が付いているよりは同性で気の利くアイヴンの方がいいだろう。

身支度を整え、軽く朝食を済ますして部屋を出る。

フィンエルタが居ないので、他の近衛が二人着いて来たが特に声は掛けなかった。

向かう先は城の敷地内にある王室墓所だ。

建国以前のシューデイの王も含め、歴代の王と直系王族が眠る墓。

王太子のまま亡くなった伯父も妃殿下と共にここに祀られている。

一般解放されている霊廟を避け、その先にある身廊へ入る。

ひんやりとした空気を頬に感じて一瞬立ち止まるが、近衛の二人を入り口に残して中へ進んだ。

伯父は身分が王太子であったので、棺は他の王や王妃、王太后のも

のと比べると質素な造りで大きさも小さい。

白い大理石のそれは静かにそこにあった。

伯父の葬儀の後すぐに城を出たため、ここへ来たのはこれで2度目だ。

「ー伯父上、お久しぶりです。伯母上も。来るのが遅くなってしまつて申し訳ありません」

伯父であるマリグエラ殿下と妃殿下は、王族としては珍しく夫婦揃つて仕事を持つていた両親に代わり、一人で過ごしがちな私をよく構つてくれた。

彼らの間に子どもが居なかつたこともあるだろうが、私にとって伯父夫婦は両親と同じような存在だった。

伯父は小さい私に大人でも理解するのが難しい本を読み聞かせては、伯母に呆れられていた。

それでも私がそれを理解すれば喜ぶ伯父が嬉しくて、私は彼が与えるあらゆる知識を吸収していった。

やがて伯父の教育の成果か、学院の教師陣が煙たがるほど頭角を現した私を、伯父は自分の政務に連れて行くようになった。

そして子どもが生まれなままに伯母が亡くなった年、伯父は両親に私を時期王太子にと打診してきた。

学院を卒業するまでまだ3年あつたので答えを保留にはいたが、私は内心裏切られた気分だった。

こうなることを見越して伯父が私を育てて来たのかと思うと。

私は彼が喜ぶと嬉しかった。それでも彼の跡を継いで王太子になるなど考えたこともない。

彼と伯母の間に子どもが居なくとも、伯父には3人も兄妹がいたの

だし、甥姪も私以外に4人いる。彼の役に立ちたいと思っただけだが、それはこういう形ではなかったのに。

しかし私が答えを出さないまま、伯父は亡くなった。

公表していなかった私を時期王太子という話も、城内ではほぼ決定事項とされていたが、伯父が死んだ事であやふやなまま誰も口にしなくなった。

政府の中には未だ私を推す者も居るらしい。

しかしそれが議題に上がることがないのは、飽くまでも私を推すのは伯父の意志があつてのことで、彼亡き後はそれを議会で論議するには決定打に欠けるからだ。

彼ら自身が私を評価してる訳ではない。

「私は王太子にはなりません。若すぎるという理由もありますが、私にその資格が無いと思ってるからです」

囁くような声ではあつたが、静かな空間には思いのほか大きく響いた。

近衛の二人には聞こえたかもしれない。しかし彼らが私の独り言を吹聴して回ることはないだろう。

返ってくる声が無いと分かりながら、話を続ける。

「王家を途絶えさせてはならないことは分かっています。でも、それは私でなくても可能な話。今城にいる他の王族でも十分果たせるでしょう。……次に来る時は私は王族ではないかもしれませんが。不甲斐ないと怒って下さっても結構です。でも私はあなたに

感謝しています。私を育ててくれたこと」

彼が居なかったら、私は世界を知ることには無かっただろう。
彼女に出逢う事も。

墓所 (デイゲア視点) (後書き)

デイゲア母の名前は出せたけど、父の名前が出せなかった！
登場人物のそこはデイゲア父でもいいかな・・・？

憤慨（デイゲア視点）

フィンエルタから、私の従兄であるガルードが『サイキリツカ』に会いに行ったことを聞いたのは夕食の前だった。

機転を利かせたらしく、会わせることは無かったと聞きほつとする。

「予想していたことではあったが、随分と行動が早いな。普段は王孫としての少ない公務ですらまともに顔を出さなくせに」

「やはりオルバ殿下が議会の承認を得られないのがもどかしいんでしょうね。ガルード様は元々そんなに王位には興味なかったようですけど、手が届きそうなところへ来たら話は別なんでしょうか」

「ガルードは年下の私が王位に就くのが嫌なだけだろう。伯父が健在の頃は仕方ないにしても、今は状況が違うからな。権力に対する執着があるかどうかは私にも分からない」

「オルバ殿下はともかく、ガルード様は臣下の私が言うのもなんですけどあんまり学は無いですよね……。立太子してから相当努力されないとイケませんよ？でもあの人ほど『努力』とか『忍耐』ってという言葉が似合わない人も居ないと思うんですよ。王位を狙うのはいいですけど、国が傾いたらシャレになりません」

「そこはその時の四大老に期待するしかないな」

「すっかり他人事みたいに言わないで下さいよ……………」

ガルーダは確かに口はともかく悪い男ではない。
ただ勉強が苦手で、学院に居た頃も授業をそっちのけで友人と遊んでばかり居た。

人に指図されるのが嫌いなところは王になる資質ありと捉えるべきなのかどうか……。

「そう言えば、サイキ様が時間があつたらお茶したいと仰ってましたよ。やっぱり心細いんですね。たった2日半とは言え、一緒に過ごされたデイゲア様が居ないと」

「そうか……。では夕食の後にでも会いに行こう。後でアイヴンに連絡をしておけ」

きっと彼女はこの世界で一番最初に手を差し伸べた私を、親鳥を雛が慕うように頼っているのかもしれない。

それでも彼女の方から会いたいと言ってくれたことが胸に響く。

一日ぶりに見る『サイキリツカ』は特に城の生活に萎縮している様子も無さそうで安心した。

今日は城下も見たと言っし、それなりに王都を楽しんでいるのかも
しれない。

「明日、陛下にお会いするらしいな」

「そうですねですよ。事情があつて急に決まったんですけど、今からもう緊張しちゃいますね」

「ああ、今日王族が面会を申し出て来たという話は聞いた。どうせお前に口利きでもしてもらおうという魂胆だろう。今この国には王太子がいないからな」

「さつきアイヴンさんも同じこと言つてたんですけど、王様にはお子さんがいないんですか？確か直系の王族は10人くらい城に住んでるって言つてたのに……全部王様の兄弟とか？」

「いや、陛下には息子が二人に娘も一人おられる。ただ立太子してないから空位なだけだ」

「息子が二人つてことは王子様ですよね！？カッコいいですか？」

「美醜は人の感覚によるから断言は出来ないな」

「サイキ様、王子殿下はどちらも既婚ですよ。ちなみに王女殿下も」

「ええ。カッコいい王子様がいるかと期待してたのに……」

彼女は小さな口を尖らせる。

仕草がいちいち子どもっぽくて見ていて飽きない。

「あれ、サイキ様ってばやっぱりそういうのが気になりますか？」

「そりゃ私だって元居た世界では結婚適齢期まった中の女性ですよ。しかも恋人もいないんですよ、私。だからいい出会いのチャンスだと思ってたのになー」

『サイキリツカ』は性格も素直だし、私の感覚からすれば十分に魅力的な女性であるように思う。

しかし恋人は居ないらしい。

彼女の世界では『サイキリツカ』のような女性は不人気なのだろうか。

それとも周りの男どもがよほど見る目が無いか。恐らく後者だろう。そんなことを考えていたら、フィンエルタがまた馬鹿な事を言い出した。

「奇遇ですね。俺も恋人居ないんですよ。どうですか、これでもお買い得だと思っんですけど？」

「フィンエルタ、あなたの場合『今は』『特定の』恋人が居ないだけでしょ？サイキ様、こんな男の言うことなど真に受けなくて下さいね！きっと女性を見ると口説かずにはいられない病気なんです。

サイキ様はフィンエルタには勿体無さ過ぎますもの。心配ならずともすぐにフィンエルタなど足元にも及ばないような素敵な恋人が出来ますわ」

フィンエルタはお買い得なんてものじゃないだろう。

私ならタダでもご免だ。

ヤツを病気と言うアイヴンは間違っていない。
治せるものなら国中の医者呼んでやってもいいくらいだ。

「まあ俺のことはともかく、未婚の王子様がいいなら他にもいますよ。目の前のお方もそうですし」

「フィンエルタ!!お前は本当に余計なことばかり……………!!」
「!」

「え、目の前って……………エルタさんが王子様……………?」

「違いますよ!!ディゲア様のことです!!!厳密に言うなら王孫殿下ですけど、王族直系男子という広義で言うならディゲア様だって『王子様』ですよ。しかもちゃんと未婚です」

「王族……………直系……………男子……………」

私が王族であるということは『サイキリツカ』には話していないままだった。

彼女の顔を直視出来なくてフィンエルタを睨みつける事で誤摩化す。『サイキリツカ』は言葉を失っているようで、しばらく無言だった。しかし漸く出て来た彼女の一言に、今度は私が言葉を失った。

「……………ディゲアさんって男の子だったんですか……………」
「?」

てつきり王孫であることを黙っていた事を責められるかと思つていたのに、彼女にとつては私が男であることの方が衝撃だったらしい。呆氣にとられたのは一瞬だった。

「私のどこが女に見えると言つんだ！！今までそんなことお前以外に言われたことないぞ！！」

「それを言つたら私だつて25年間生きて来て男に間違われたのなんて、ここで初めてですよ！！」

「まぎらわしい名前のせいだろう！！大体名前と言えば、お前は私の名前を聞いて「かっこいい」と言っていたじゃないか！！それがどうして女だと思ひ込むことになるんだ！！」

そつだ。彼女は私の名前をかっこいいと言つたはずだ。

私の名前に意味は無いが、『知性』を意味する言葉である『デイグル』に音が近いので、どちらかと言えば「賢そつな名前」と称されることが多かった。

だから彼女が「かっこいい名前」と言つた時、本当はとても嬉しかった。

それなのに。

「だつてどう考えてもかわいい名前じゃないじゃないですか！！それならかっこいいと褒めとくしかないでしょ！！占い師でもあるまいし、私は名前なんかで性別を判断できませんよ！！それに今まで女に間違われたこと無いなんて、それはきつとデイゲアさんが王子つてことに遠慮して言わなかつただけで、きつとみんな一度は思

「つたはずですよ！！ねえエルタさん！！」

「ちょー！！こっちに振らないで下さいよ！！えーっと、黙秘します
．．．．．」

「即座に否定しない時点で肯定したも同じだと思っるのは私だけかしらね、フィンエルタ．．．．．」

「フィンエルタ．．．．．貴様あとで覚えている．．．．．！！」

くっ．．．．．。彼女の言う事には一理あるかもしれない。

なぜなら私は両親と他の王族以外には親しく話すような人間はいないからだ。

もしかしたら今まで会った中にも私を女だと思っていた者が．．．．．
．．．？

しかしフィンエルタ、お前に言われるのは我慢ならんぞ。

「でも、見た目はともかくディゲア様のお名前を聞けば、王族に詳しくなくても男だっことは分かりそうなもんですけどね。あ、俺が男っことはちゃんと分かっています？」

「見た目はともかくとはどういう意味だ．．．．．！！」

「さすがにフィンエルタさんが女に見えるような不思議なフィルタ―はかかってないですけど．．．．．普通はその名前聞いたら男ってわかるんですか？」

「あからさまな男名ではありませんから。サイキ様の世界では男女の別で名前が分かれてたりしないんですか？」

「どうやら『サイキリツカ』の世界では、名前は親が付けるものであり、そこに男女の別は無いと言う。」

「それなら彼女が私の名前を聞いても男と分からなかったのは仕方ないかもしれない。」

「だが私はそんなに女っぽい容姿をしているのだろうか？」

「これでも王家の男子らしく武道も嗜んで来たつもりなのに。」

「アイヴンはやはり『サイキリツカ』の本名を知らなかったようで、四大老ほどでは無いにしても驚いていたようだ。」

「こちらでは男、または息子を意味する『リツカ』という言葉も、同じ音である彼女の名前に込められた意味は全然違っていても美しいものだった。」

「大きな志を持つて真つすぐに育つて欲しい、か……。」
「もし私にそんな名前が付けれられていたら、名前負けだと笑われていたかもしれない。」

「さて、明日は陛下との面会も控えていることですし、サイキ様はそろそろお休みになられたほうがよろしいのでは？」

「っていうかエルタさんが衝撃の事実を口にするから、こんなに長話になったんですよ。本当はもっと王様のことを聞いて明日に備えておきたかったのに。」

「ええ！俺のせいですか！？いずれは知ることだったんですからいいじゃないですか。」

「わたしはサイキ様がご存じなかったことに驚きました」

「だって誰も言ってくれませんでしたよ？デイゲアさんなんて今まで王様の話はしてくれても、一言も王様の孫ってことは言ってくれなかったんですから」

やはり『サイキリツカ』は私が王孫だということを黙っていたことに対して、少なからず怒っているようだ。

恨みがましい目で私の方を見て来た。

しかしその顔は睨んでいるつもりなのかもしれないが、全然怖く無い。

17のメリエヌの方がほど恐ろしい顔が出来るといふものだ。

これも彼女の性格故だろうか。きっと心の底から相手を恨んだりなどしたことは無いのだろう。

「そう言えば、何でサイキ様にご身分を明かさなかったんですか？フィンエルタも教えて差し上げれば良かったのに」

「俺は別に隠そうとしてた訳じゃないですよ。サイキ様がご存じないようなのは薄々感じてましたけどね」

「私も別に隠そうと思っていたわけではない。ただ、私はいずれ王位継承権を放棄するつもりでいるし、王孫という立場に拘りも無い。ならば敢えて言う必要もないだろうと思っただけのことだ。」

フィンエルタがどういつつも黙っていたのかは知らない。

私が言わなかったのは、彼女の自分を見る目が変わりそうで怖かったのだ。

いずれ王族を離れるつもりであることに偽りは無いが、それよりも彼女が私が王孫と知って気構えるようになって欲しく無かった。

王族という殻が無ければ、私はもっと彼女の近くに居られる気がしていたのだ。

風聞（デイゲア視点）

彼女に言われたことが尾を引いている訳では無いが、翌日は近衛隊の練兵場に顔を出した。

すこし体を動かしたかったからだ、フィンエルタはそうは思っていないらしくしたり顔でニヤけて居た。

気色の悪い。

林の家に居る間でもそれなりに鍛錬は怠らなかつたつもりだ。

しかし相手が居るのと居ないのでは大きく違う。

模造剣を手に構え、近衛兵の一人と間合いを取るがいまいち距離感が上手く掴めない。

相手は数多くいる近衛兵の中でも比較的体格の近いものを選んでもらった。

腕の長さから言っても、間合いはほぼ私と同じくらいだろう。

相手の間合いに入った途端、向こうは素早く剣を振りかぶり、数歩の距離を一気に詰めて来た。

左肩に切り掛かって来た相手の剣をいなし、右に半身を踏み込む。

そのままの流れで特に力を込めることなく相手の足を払った。

片足が浮いていた相手は軸足を払われ、片手を付いて倒れ込んだ。

すかさず起き上がるうとする相手の利き腕の方の肩を踏み、頂に切っ先を当てる。

「倒れる時は手をつかずに受け身を取れ。倒れた反動で起き上がらないとそこで終わるぞ」

剣をおさめて相手を立たすと、向こうは何故か照れたように赤くなっていた。

近衛として城に仕えている者がたかが末席の王孫に一本取られたのが悔しかったのかも知れない。

ぱちぱちという気の抜けた拍手をしながら近づいて来たフィンエルタに剣を渡す。

「デイゲア様つては容赦ないですね。あそこで肩まで踏みますか？」

「本当は剣を払いたかつたんだが、模造剣とは言えそれなりの威力はあるだろう。王族を守るといふ本分のある人間の利き腕を痛めるほど、私は非道では無い。相手がお前だったら違っていたかも知ない」

「優しいんだか、そうでもないんだか……。それで、もう少し続けますか？俺としてはセルキア様が来る前に退散したいんですけど」

「父上が練兵場に来ることはそう無いから心配するな。それにここに来たところでお前の相手をするかどうかも分からんだろう」

「デイゲア様がここに居ると知ったら飛んで来ますって！そんで喜々として俺をボコボコにするんだ……。！」

悲壮な顔でこつちを見るな。

お前がそんな顔をしていても可哀想とも何とも思わない。

しかし泣きそうではありながらも、どこか冗談めいていたフィンエルタの顔がピシリと固まる。

何事かと背後を振り返ると、見知った人影が練兵場の入り口に立っていた。

「……………父上……………」

「ほら！！やっぱり来たじゃないですか！！だから言ったのに！！！！！！」

「何だいフィンエルタ、涙まで流して。そんなに僕がここに来るのが嬉しかったのか？」

「珍しいですね、父上が練兵場にいらっしやるなんて。忙しそうに見えて、実は私の想像よりもお暇なのですか？」

にこにこ自分より少し背の高いフィンエルタの肩に腕を回す父。心無しかフィンエルタの顔から血の気が失せているような気がする。

「僕だつてたまには体を動かさないと！フィンエルタは打たれ強いから相手にちょうど良いんだよ」

「打たれ強いって……………！俺だつて痛いもんは痛いんですよ！！」

「君も近衛としてこの城に入ったんだから、多少の痛みは覚悟の上だろう？何、模造剣なんだから死にはしない。城には打ち身に良く

効く薬があるし、万が一立てなくなったら一日くらいディゲアの護衛から外してやるから安心しろ」

「今のセリフでどう安心しろって言うんですか……俺のことを立てなくなるまで痛めつけるつもりなんですね……」

「いよいよフィンエルタに死相が浮かんで来たので、ここは止めた方がいいだろう。」

別にヤツが痛い目を見るのは構わないが、私の護衛がころころと変わるの是不便だ。

「父上、今日はここまでで上がるつもりだったんです。フィンエルタの相手はまた今度にして下さい」

「折角ここまで来たのにもう帰るのか？どうせ運ばれて来た方は陛下と面会中だし、君も特に用事は無いだろう。少しくらい付き合え」

「だれか相手になさりたいなら他にも近衛兵がいるじゃないですか。まだ父上と手合わせたことのない者の中から選べばどうです？」

私の言葉に、練兵場に居た近衛兵がさつと顔色を青くした。

気の毒だがいずれは通る道だし、ここは試練だと思って我慢してもらおう。

父は悪気は無いのだが、手加減というものを知らないから相手をするのは骨が折れるだろう。

比喻でもなんでもなく。

その時、フィンエルタの通信板に連絡が入ったようで、ヤツはこそこそばかりに父から離れると練兵場の隅に移動した。

「あんなに端まで行かなくていいじゃないか。女の子からの連絡だったら有無を言わさず相手をさせようかな」

「さすがに父上の前で女性からの連絡に応答するほど馬鹿ではないでしょう」

意外に通話は短かったようで、フィンエルタはすぐに戻って来た。嬉しそうな顔を無理矢理申し訳なさそうに変えているので、不審に思ったがすぐに判明した。

「すみません、セルキア様。アイヴンから至急サイキ様のお部屋に来て欲しいと頼まれたのでここで失礼します。お相手出来ずに申し訳ないですねえ」

申し訳ないと言いながらも、その顔が徐々に緩んで来てるぞ。しかし連絡がアイヴンからだったことには驚かなかったが、至急『サイキリツカ』の部屋に来いとは何かあったのだろうか。

「それなら仕方ないな。ディゲアも行くのかい？」

もちろん、と言おうとしたところで、フィンエルタが先に口を開いた。

「いえ、デイゲア様は来ない方がいいと言ったので、俺だけで行って来ます。後で報告するのでそれでいいですか？」

「彼女がそう言うなら従うしかないだろう。早く行け」

内心は複雑な気持ちだった。

なぜ私ではなく、フィンエルタを呼ぶのだろう……。きつと彼女は何かあれば真っ先に自分を頼ってくれると思っていたのは、私の勘違いだったのか。

私は言い知れないもやもやとした気分で、練兵場を去るフィンエルタを眺めていた。

「当分の間サイキ様とはお会いにならない方がいいですね」

しばらくして帰って来たフィンエルタの言葉がすぐには理解出来なかった。

『サイキリツカ』と会わない方がいい？

「・・・・・・・・何があつた？」

「サイキ様のところへまたガルード様が押し掛けたみたいですよ。今度は部屋の中で待ってみたいで、サイキ様も無碍には出来なかつたんでしょう」

「あの男には王族としての礼節は無いのか・・・・・・・・。しかしガルードが押し掛けたこと、私が彼女に会わない方がいいということとは関係無いように思えるが」

「関係無いっちゃ関係無いんですけどね、ガルード様が耳にしたというとんでもない噂をわざわざ教えて下さつたようですよ」

「噂・・・・・・・・？」

「お耳汚しですけど、俺に怒らないで下さいね」

「さつさと言え」

「『運ばれて来た方は既にディゲアのお手付き』」

「は？」

「ガルード様が言ったことをそのまま伝えました。もう一回言いますでしょうか？」

「いや、ちゃんと聞こえていたが・・・・・・・・」

『サイキリツカ』が私のお手付き．．．．．？
もしかなくても意味はそのままだろう。
私が彼女と『そういう』行為に及んだと言いたいのか．．．．．。

「サイキ様はちゃんと否定なさったようで、ガルード様も深く追求はされなかったみたいです。ちなみに「2年も田舎に引つ込んでたところに若い女が来たんだからやることは一つ」とか「すぐに連絡しなかったのは怪しい」といったことも仰ってたようですけど、これはガルード様の主観でしょうね」

頭を抱えなくなつて来た．．．．．。

確かに私だつて16の健康な男子であるからにはそういった行為も可能ではある。

だからと言って彼女に手を出したと思うのはあまりにも短絡的な考えだ。

明らかに私が彼女、もしくは両方を貶めようとして流した噂としか思えない。

「彼女はそれを聞いて怒ってはいなかったか？」

「それが全然。むしろデイゲア様に申し訳ないと仰ってましたよ。年上好きのレットル貼られてないか心配してましたね。アイヴンがサイキ様はデイゲア様よりも10くらい年上って言うてましたから俺も驚いたんですよ」

「な．．．．．10も!?20そこそこくらいにしか見えないじゃないか．．．．．」

「それでも十分ディゲア様よりも年上ですよ。むしろ年の差が縮まったことで噂の信憑性が増しそうです」

化粧をしていない時の彼女はつるりとした乳白色の肌をしていて、濡れたような円な瞳と薄紅色の小さな口があとけない感じだった。それが10も年上だったとは。

しかしそれならこの噂を聞いて怒るところか、私を心配したというのも頷ける。

彼女にしてみれば私なんて子どももいいところだ。

「そう言えば未婚の王子様に興味のあるサイキ様ですけど、ガルーダ様は好みでは無いようですよ。良かったですね。でもサイキ様の国では成人した者は18歳以下の子どもに手を出すのは犯罪らしいので、ディゲア様と『どうこう』なるなんて考えられないと仰ってました。まあ誰かさんのように好みでは無いと言われた訳ではないし、あと2年待てば振り向いてくれるかもしれませんよ?」

「.....下らん話をするくらいなら今から父上の相手でもして来い」

「絶対イヤです!」と喚くフィンエルタを無視してヤツを自室から追い出した。

彼女は私にとつては突然の訪問者で、保護すべき対象で、手を差し伸べるべき存在だ。

そこには噂にあるような『そういう』行為に及びたいという不埒な思いは無い。

それでも『サイキリツカ』が私を女と思い込んでいたこと、子ども扱いしていることが何故か悔しかった。

この苛立ちをぶつけるのに最適な存在を部屋から追い出したことを後悔した。

本当に父のところへ引きずって行けば良かったかも知れない。

風聞 (デイゲア視点) (後書き)

デイゲア父の名前登場。

従兄（デイゲア視点）

私には4人の従兄弟がいる。

皆ほどほどに年が近く、城の中だけでなく学院に同時期に通っていた者もいた。

私はその中でも一番年下で、無愛想なこともあつてか他の王孫とあまり仲良く遊んでいた記憶は少ない。

しかし今目の前にいる、第一王女の息子であるレシユカは私と同じ年（と言つても生まれたのは向こうが先だが）ということもあつて、比較的親しくしていたように思う。

私はレシユカに誘われて屋上庭園の四阿に来ていた。

「まったくデイゲアつたら、2年も音沙汰が無いから心配したよ」

「フィンエルタが定期的に様子を見に来ていたから、生きていることくらいは知っているだろう」

「相変わらず素っ気ないね。そう言えば帰つて来たのは運ばれて来た方を保護したからなんだって？いいな。僕も林の家に行けばよかった！」

「でもデイゲア様が保護されたのは偶然ですよ。レシユカ様は来るかも分からない人を待つて、あの家に2年も住めますか？」

「それは無理かな。僕家事なんてやったことないし。ねね、デイゲア、僕も運ばれて来た方に会いたいな。今度会いに行く時は僕も連れて行ってよ！」

「サイキ様に面会を申し込んでいる方は多くいるみたいですからね。デイゲア様もそんなに簡単には会えないと思いますよ?」

レシユカは私と同じ年で背格好も似ている。

だが中身は全く似ていない。

人懐っこくて明るい性格のこの男は学院に居た頃もよく人の輪の中心に居た。

きつと『サイキリツカ』に紹介すれば、会話の得意なレシユカのこ
とだ。

すぐにも彼女と打ち解けるだろう。

「でもデイゲアが最初に保護したんならきつと会ってくれるよ。ね
ね、次はいつ会いに行くの!?絶対に予定空けとくから教えて」

「当分彼女に会う予定はない。向こうも忙しいようだしな。会いた
ければオルティガに話をつけたらいい」

「え〜!やだよ!!オルティガに頼んだら反対に公務いっぱいいれ
られそうだもん。すぐじゃなくてもいいから、会う時は絶対教えて
よ?デイゲアばかり会うのはずるいもん」

「でもレシユカ様は学校があるでしょう?あまり時間の融通は利か
ないんじゃないですか」

「だから先に予定教えてって言ってるのに。ちゃんと話聞いてる?」

「レシユカ様が女性だったら溜め息の一つだって聞き逃すことは無
いんですけどねえ」

「ということとは聞いてないんじゃないか！あーあ、フィンエルタは使えないな。それよりその運ばれて来た方って女性なんでしょ？美人？あ、フィンエルタは答えなくていいよ。当てにならないから」

榛色の目を輝かせて私の答えを待つレシユカが面倒で顔を背けるとその先の林に人影がちらついた。

あれは．．．．『サイキリツカ』とアイヴンだ。

今見つかるの間違いなくレシユカに紹介しろとせがまれるだろう。別に隠す必要は無いのだが、何となくレシユカから向こうが見えないように移動した。

「デイゲアったらそんなにその人について話したくないなんて、なんか疾しいことでもあるの？」

しびれを切らした従兄の言葉にハツとして彼を見ると、さっきまでの笑顔は消え、訝し気にこちらを伺っている。

まさかとは思うが、あの噂を知っているのか．．．．？

「．．．．疾しいことなど何も無い。彼女が美人かと聞かれても、私が思う美人とお前の思う美人の基準は違うだろう。だからどう答えるべきか考えていただけだ」

「それもそうか。まあいいや！会う時まで楽しみに取っとうつと。ガルーダは昨日無理矢理会いに行っただってね？僕もそうしようかな」

「ガルーダ様の時もお困りのようでしたから、歓迎されなと思いますよ」

「それは困るかも。僕はその運ばれて来た方とは仲良くしたいんだよね。早く会えるといいなあ」

何故か私の方を見てそう言ったレシユカの目が、悪戯を思いついた子どものように笑って見えたのは気のせいだろうか。

「レシユカ様は本当にサイキ様に会いたいみたいです。物珍しさからでしょうか。ガルーダ様と違って明確な理由が思い浮かばないですよねえ」

「好奇心の旺盛な性格だから、やはり異世界の話を聞きたいんじゃないか？新しいもの好きだしな」

レシユカの母である第一王女の継承権はオルバ殿下に続いて2位だが女性ということもあり、昔から政治には興味が無かったように思う。

「アイヴンに聞いたところでは王族の方々とお茶会を開くらしいで

すよ。面会を申し出てる王族と一人一人会つよりも一度で済ませた方がいいとサイキ様が仰つたみたいです。意外に思い切りのある方で驚きました」

「ならレシユカの願いもすぐに叶うんじゃないか？」

「一応出席されるのは王女殿下と第二王妃殿下、それと王孫の方々だけみたいです。お仕事のある殿下方は不参加と聞きました。レシユカ様は日程が授業と重なっていなければいいんでしょうけど、あの方なら学校休んでもご出席されるかも」

王族が皆参加するというなら私が出席しても問題ないだろう。

衆目のあるところで何かある訳でもなし。

「そう言えばガルード様がメリエ様を連れてまたサイキ様のところへ押し掛けたそうですよ。どんな話をされたのかは知らないですけど、あの方も頑張りますよね。こんな様子じゃディゲア様とじゃなくてガルード様との噂が立つんじゃないですか？」

「さすがに噂とは言え、そう相手が変わっては彼女が気の毒だろう。……。オルティガの方から注意するように言えないのか？」

「一応次回からはオルティガ様を通すように釘を刺したみたいです。いくらガルード様が無鉄砲でもオルティガ様の忠告を無視は出来ないでしょう」

ガルードとメリエ又か。

あの二人の言いそうなことは大体予想が付くが、『サイキリツカ』がどう答えたのかは全くわからない。

ただ彼女は人に言われたからと言って安易に王太子を選ぶようには思えないから、心配することもないのだろう。

それでも周りの人間が彼女を利用しようとすることは有って欲しくない。

茶会はすぐにも会いたいという一部の王族（恐らくレシユカも入っているはずだ）の要望で、翌日に催されることになった。

丸二日も『サイキリツカ』と会っていないので、なんだか急に緊張して来る。

ちゃんと話が出るだろうか………？

場所は王族の居住区にある食堂で行われるようで、私が着いた時には既に殆どの参加者が揃っているようだった。

と言っても今日来るのは私以外に伯母の二人と従兄妹たちだけだが、しかしあれだけ楽しみにしていたと言うレシユカはまだ姿が見えない。

窓際に立って兄と話していたメリエヌが私に気付いて手招きをして来た。

「デイゲアったら帰城したんならせめて王族くらいには挨拶しに来たら如何なの？ 少しでも心配していましたのよ。ねえお兄様」

「そうそう。サイキ様には会いに行ってたそうなのに、俺たちには挨拶無しなんてな。そんなに運ばれて来た方が気になるか？」

「彼女は突然こちらに運ばれて来たんだ。気に掛けるのは人間として当然だろう」

「男として、じゃないのか？」

「まあお兄様だったら！！デイゲアにだって気になる女性の一人や二人居ますわ。そっとしておいてあげませんか？」

この兄妹は……。

ガルダは完全に面白がっているし、メリエヌも止める振りをして
いるだけだ。

「あんな噂を鵝呑みにしてるんなら呆れてものも言えない。それよりも他の王族の居るところでそういう話をするな。私よりも彼女に失礼だ」

「いやですわ、照れなくてもよろしいのに。あの噂が全くのデタラメということならサイキ様にも確認しましたし、信じておりませんわ。それよりも、デイゲアったらサイキ様に服を貸したんですって？学院時代に女の子から差し入れてもらったタオルですら触れもせず断ったあなたが、会ったばかりの女性に服を貸すなんてどう言う心境の変化ですか？」

「なんだよその話、初めて聞いたぞ。詳しく教える」

「わたくしの学年の女生徒が何人か、デイゲアの武道の授業で待ち伏せをしてタオルを差し入れたそうです。でもデイゲアったら

「知らない人間からの差し入れなんぞ使いたく無い」ってバツサリ断ったって聞きましたわ。女の敵ですわよね！」

「お前って潔癖なんだな。差し入れくらい受け取ってやれよ。そんなんだからお高くとまってるって言われるんだ。サイキ様は庶民なんだから感覚合わせねえと苦労するぞ」

「やっぱりデイゲアってばサイキ様のことが！？国どころか世界を超えた恋愛なんて素敵ですわ。物語にしたいくらいですわね！」

「いい加減にしろ。勝手な妄想で話を進めるな。第一、こちらに居着いた異世界の人間なら他にも居るだろう。今さら物語になどなるか」

「随分楽しそうじゃないの。私も入れてくれない？」

そうやってやって来たのはレシユカの姉のライナンだ。

王孫の中では一番年長で、レシユカ同様いつも人の中心に居たように思う。

しかし彼女は少し選民意識があり、平民を毛嫌いしていた。

「大したお話では無いんですのよ？デイゲアの学院時代の追っかけの話ですわ」

「ああ、そう言えば私の学年にもそういう子が居たわ。王族を何だと思ってるのかしらね」

「別に騒がれるくらい気にしなきゃいいんだよ。国民に好かれない

王族なんて惨めだろ」

「王族は好かれるんじゃないじゃなくて敬われるものよ。あなたは平民のお友達も多かったみたいだから、感覚が王族とは違っているのかもね」

嘲笑を浮かべてガルードを見るライナンは、昔から傍系王族や名門の子弟以外は友人とは認めないらしく、『級友』と言って区別していた。

彼女にとっては『級友』にあたる人間と親しくしていたガルードの行動が王族らしくないと言いたいようだ。

「その点デイゲアはそういった方々とはお付き合いも無かったようだし、さすがにマリグエラ殿下の教育の賜物ね」

「マリグエラ殿下は平民と親しくするなんて言って無いだろ。こいつは平民どころか誰とも親しくしないじゃねえか」

ガルードが鼻で嗤う。

確かに伯父はそんなことは言わなかった。

私が誰とも親しくしなかったのは、一重に自分の性格故だ。

それに周りの人間も私を遠巻きにしていたことも事実。

「デイゲアが人付き合いの下手なことは本当ですけど、そんな面と向かって仰らなくても。それにしてもサイキ様は遅いですわね？」

「運ばれて来た方っていうご身分なのは分かるけど、王族を待たせるなんてどういってもりかしらね」

待たされることに不満は無いが、不安はある。

フィンエルタに言っただけでアイヴンに連絡させようかと思っただころへレシユカの声が聞こえて来た。

「じゃじゃーん！！サイキ様の登場だよー！！」

得意気に食堂に入って来たレシユカの後ろに着いて『サイキリツカ』とアイヴンがこちらにやってくる。
なぜレシユカと……………？

「お待たせしてすみません。サイキです」

彼女は幾分申し訳なさそうな顔で王族の面々を見回すと、そう言っ
て小さく頭を下げた。

従兄 (デイゲア視点) (後書き)

次回からまた立花視点に戻ります。
誤字脱字等ありましたらお知らせ下さい。

7日目 1 (前書き)

遅くなりましたが7日目でございます。

ここからはまた立花視点です。

結局、王族の方々とお茶会は提案してすぐに快諾されたようで、翌日の今日、催されることになった。

もっとみんな自分の予定とかちゃんと確認してから計画した方がいいんじゃないの？って思ったのは社会人のクセかな。

お茶会には仕事のある人以外が来るらしいので、デイゲアさんの両親は不参加らしい。
残念。

「でもデイゲア様はご出席されると伺いましたよ。ようやくお会いできますね」

「そう言えばもう2日も会ってないですね。あの噂のせいで」

本当にとんでもない噂を流してくれたもんだわ。

しかもまだデイゲアさんの反応を聞いてないから、会えるのは嬉し
いけどやっぱりちょっと怖いかも……………？

そろそろお茶会の場所へ行こうかと部屋を出たところで、一人の少年が立っていた。

あれ？この子は確か……………

「こんにちは、サイキ様！僕はレシュカって言います。一緒に行こうと思ってお迎えに上がりました！」

そうそう、レシュカくん。何故かこの子は『くん』付けしたくな

るなあ。

「わざわざ迎えに来てくれたんですか？」

「そうですね！だってお茶会に行ってしまったら他の人もいるから、あんまり話せないかな」と思ってた

そう言ってるレシユカくんはにこりと笑った。

うくん、子犬のような親しみやすさだわ。

遠目に見た時はデイゲアさんに似てるって思ったけど、近くで見るとやっぱり違うんだねえ。

この子はどっちかかって言うとかわいい系。デイゲアさんは文句無し
のキレイ系。

「こちらの生活はどうですか？不便はないですか？」

「すごく良くしてもらってるんで、不便なんてとんでもないです」

「じゃあ城下はもう行きました？良かったら僕が案内しますよ？」

「城下はお城に着いた次の日に行きましたよ。ちょっとだけですけど、デパートにも行きましたねえ。私、自分の世界では百貨店で働いてたんですよ。だから中々面白かったです」

「へえ、じゃあ『理由』もそれ関係かもしれないですよね。僕の友達のお家がショッピングモールとかデパートを経営してるんですけど、今度話を聞いてみましょうか？」

それはナイスアイデア！！

王太子関係よりもよっぽど私の『理由』っぽいじゃない！！

「是非お願いします！！そうよね、やっぱり仕事関係が一番ありそうよね。うんうん」

城ですつとボケーっとして毎日王族のあれやこれや聞くよりは、外に出て『理由』探した方がいいのかも。

絶対に自分の周りで起きるって言うても、城に居たんじゃ起きる事柄なんて限られてくるもんね。

しかし普通にモールで買い物したけどもつと注意深く見とけば良かった！！

「サイキ様、レシユカ様、そろそろお時間になりますので参りましょう」

「そうでした！！遅れちゃう前に行きましょう！！」

「すみません、僕が呼び止めてしまったせいで。折角お迎えに上がったのに、結局遅れてしまうなんて……」

レシユカくんは眉を下げてうるうるし出してしまった……。
ああ、なんて威力のある顔してるのこの子！！

「そんな、話し込んだのは私も一緒だから気にしないで下さい！ほらほら、早く行きましょう！！」

「はい！」

私たちは心持ち早歩きでお茶会の場所まで急いだ。

私の足はただでさえダダっぴろい城を競歩のように移動したせいで、目的の部屋に着いた時にはガクガクになっておりましたとさ。

お茶会は王族の居住区にある食堂で開かれるらしい。

食堂って聞いたらまたまた庶民脳の私のイメージは、割烹着に三角巾つけたおばちゃんが働いてるようなのしか出て来ないんだけど、ここで言う食堂はフォーマルな食事会に使われる広間みたい。だってもうドアからしてすごい。

繊細な彫刻が施されてて、高さも3メートルくらいありそう。

ドアノブとか金つぼくて、素手で触ってもいいのかな？とか思っちやっただわよ。

ま、ドアは最初から開いてたんですけどね。

食堂の近くまで来たら、レシユカくんはたたたと駆け行ってしまった。

「じゃじゃーん！！サイキ様の登場だよー！！」

っておい！！なんでそういうことするかな！！

別に目立ちたいとか思ってたのに！！

むしろHR始まってから学校着いたけどこそつと教室入って先生に気付かれませんか、みたいなさりげない感じで「え？ずっと前から居ましたけど？」っていう演出をするつもりだったのに！！

仕方ないのでみんなの注目を一身に浴びながら登場。

どこの空港から出て来る芸能人？

「お待たせしてすみません。サイキです」

日本人の得意とするとりあえず笑顔。

待たせたのは本当だからちよぴつとばかりすいませんせうんなオーラも出しておく。

部屋の中にはマツダムって感じの大人の女性二人に、ガルダさんメリエヌさん兄妹、それにディゲアさんと初めてみるこれまた美人な女の子が居た。

「サイキ様、本日はこのような場を設けて頂いて有り難うございます。わたくし、陛下の第一王女のレットेशームと申します」

そう言つてまず私の前にやってきたのはマツダムの一人。艶やかな金髪をきれいにまとめあげて、濃紺のドレスワンピースを身に纏っている。

第一王女ということはレシユカくんのお母さんね。

「ライナン、こちらへいらっしやい。こちらはわたくしの娘のライナンですわ。レシユカはもうご存知のようですわね」

「初めまして、サイキ様。ライナンと申します」

この初めて見る女の子はライナンさんと言うのか。

なんとなくレシユカくんと似てるけど、ツンツンしてるなあ。今も私の方を見てにこりともしないんですけど……。

「サイキ様！またお会い出来て嬉しいですわ！！」

「あ、メリエヌさん！昨日ぶりですね！」

メリエヌさんは飛びつかん勢いで近くにやって来ると、私の両手を掴んでぎゅっつと握りしめた。

うん、嬉しいんだけどね、痛いです。

「メリエ又っいたらはしたない真似はおやめなさい。サイキ様も困っておいでよ」

「あ！サイキ様、紹介しますわ。こちらはわたくしの母ですの」

「初めてお目にかかります、サイキ様。私は第二王子妃のイーシンと言います。本日はお招き頂きましてありがとうございます」

イーシンさんはレッテシームさんと比べると控えめな感じの女性。それでも庶民臭さは全く無いあたり、さすが王子様のヨメ。

食堂の中にはダイニングセットの他にもカウチやチェアが置かれていて、お茶会もみんなが一つのテーブルを取り囲んでという訳ではなく、思い思いの場所で歓談できるようになっていた。立食パーティーって感じ？

さつきからなんとかディゲアさんと挨拶だけでも出来ないものかと思ってるんだけど、なぜか私の周りには女性陣がずらり。

ディゲアさんはガルーダさんとレシユカくと一緒に少し離れたところで固まってしまった。

うう、「ロミオ」とか言ってみようかしら。

「メリエ又、あなた昨日サイキ様とは十分お話したんでしょう？今日は私にお隣を譲ってもらえるかしら？」

「あら、折角こうやって集まっているんですから皆でお話した方が楽しいですわ。ねえサイキ様？」

どうやらライナンさんはメリエヌさんがずっと私の隣を陣取っているのが気に食わないらしい。

別に隣じゃなくても話くらい出来ると思うんだけど……。

「本当ならサイキ様とお二人でお会いしたいくらいだったのよ。でもさすがに私にはあなたやガルーダみたいな礼儀知らずな真似は出来ないからこうして来たって言うのに、サイキ様ももっと公平にして下さるべきだわ」

おおつとー！矛先がこつち来ましたよー！！

「まあまあライナン、およしなさいな。サイキ様も色々とお忙しいようだから無理を言わないのよ。わたくし達と会うよりも大事な用がおありのようですね」

「いやだわお母様、そんな風に言っってはあの噂が本当みたいじゃないの。デイゲアはそこまで軽卒な人間では無いわ。王族の立場というものを分かってる筈よ」

「でもねえ、火の無いところに煙は立たないと言っじゃないの。2年も市井で暮らしていたんなら考え方も変わるんじゃないか？」

「サイキ様はちゃんと否定されましたわ！」

あーあー、早くも噂の話ですか。

王族も暇なのかなあ。こんな噂信じてあーだこーだ言うなんて。ってよく考えたら今は同じ部屋にデイゲアさん居るんじゃない！

ちらつと男性陣の方を見るとデイゲアさんとバッチリ目が合ってしまった。

しかもなんか無表情のままこっちにやって来ます!!
もしかしくなくても聞こえてた………?

「レッテシーム殿下、何のお話をされているのですか?」

おお、デイゲアさんの敬語初めて聞いた!

でも普段の口調よりも怖いっす!!

「あら?聞いていたんじゃないの?あなたの話よ。サイキ様は随分あなたをご贔屓にいらっしやるようね、って言っていたの。間違ではないでしょう」

「あの噂のことを仰っているなら馬鹿馬鹿しいの一言に尽きます。

もし殿下がそれを信じておられるんなら器が知れると言つものです」

「なんですって!!わたくしを侮辱するつもり!?言葉を選びなさい!!」

デイゲアさんのセリフにレッテシームさんは顔を真っ赤にして怒り出してしまった。

美人が怒ると怖いというけど、キレイなおばさまも怒ると怖い。

細い眉がきつ!っと上がって、米噛みのあたりには血管が……
倒れないでしょうね、この人。

「それなら彼女を侮辱したことをまず謝って下さい」

「わたくしがいつ侮辱したと言つもの!?勘違いも甚だしいわ!!」

「私も侮辱したつもりはありません。』もし信じておられるなら器が知れる』』とは言いましたが。侮辱されたと思われるなら、あの

馬鹿馬鹿しい噂を信じたと仰るんですね？」

「よくもそんな口が聞けたものね！！マリゲエラお兄様の教育が無くなった途端にこの有様とは、お兄様もさぞかし嘆かれていますに違いないわ！！」

「伯父上は関係ありません」

デイゲアさんすごい冷静。

でも言い合っつてことはやっぱり怒ってるんだろっなあ、あんな噂でっち上げられて。

っっていうかいい加減止めた方がいいのかな、これ。

「えっーと、私からも言いますけどあの噂なら本当に嘘ですから。

あり得ませんから。あと別に侮辱されたとは思ってないんで謝ってもらわなくてもいいです。でも今後この話はしないでくれると有り難いです」

私はレッテシームさんの方を向いて出来得る限り真面目な顔を作っ
て言い放った。

それはもう保湿がいかに大事かをお客さんに説明する時くらい真剣
に。

デイゲアさんは唇を噛んで目を背けている。

やっぱり誤解されるのは嫌だよな。

「……………わたくしも言い過ぎましたわ。いくら実しやかに流
れている噂でも王族が口にするような内容ではありませんでしたわ
ね」

「何回も否定するのは面倒なんで、口にしないうてくれるなら信

じていようが信じていまいがどっちでもいいです」

このおばさま、言い過ぎたとか言ってる割に結局噂が嘘ってところはスルーしてくれるのね。

そんなに自分の甥っ子が年増に引っかけたと思いたいのか。

なんかお茶会っていう和やかな雰囲気じゃなくて、えん罪の裁判にでも来た気分。

もちろん私は被告人ね。

「お母様、噂なんてどうでもいいじゃないですか。それよりももっとサイキ様のお話を聞きたいです!!」

がばちよとマツダムに抱きつくレシユカくん。

今一気に空気が軽くなった気がする。

「わたくしもサイキ様のお話が聞きたいですわ!ご趣味とか、住んでらした世界の話とか!お母様もそう思いませんか?」

「そうねえ、私も興味があるわ。運ばれて来た方に会うのは初めてですから」

「ええ、趣味ですか?趣味はお肌のお手入れかなあ」

趣味って急に言われてもねえ。

時間がある時は映画みたり読書したりするけど、趣味って言う程でも無いしな。

スポーツは特にしらないインドア派なのは確かなんだけどね。

他の人よりも手間暇を掛けてるって意味ではお肌のお手入れを趣味に上げてもいいでしょ。

「そうそう、この人これでデイケアよりも10も年上らしいぜ。26? だっけ?」

「いえ! まだ25です!」

ガルーダさんめ、そんな簡単に女性の年をバラすとか男の風上にも置けないヤツだな!!

しかもこの年齢の1歳、2歳の差は大きいのよ!!

「ああライナン様よりも年上ですね。同じくらいかと思いましたが」

イーシンさんは口に手を当てて驚いている。

しかしその目はかなり鋭く私のお肌をチェックしてませんか。

「私の国の人って元々実年齢よりも若く見られがちなんですよね。それに私は自分の世界では化粧品を売る仕事をしてたんで、自然と気を遣う様になっただんです」

「ああ、それでさっきデパートで働いてるって言ってたんですね」

「サイキ様、お仕事をなさっているの? それも化粧品を売るだなんて... 知らない人のお顔に触れたりするんでしょう? 気持ち悪くないんですか?」

私の仕事を知って、ライナンさんの見る目がさらに冷たくなったよ。うな...
くそう! お姫様め!!

「別に気持ち悪くなんてないですよ。お客様に触れる前には常識と

して毎回両手に殺菌スプレーをしていますから。私というより、お客様のためなんですけどね」

「ふうん。失礼ですけどサイキ様ってご自分の世界では平民でしたの？」

「へいみんな．．．．．そうですね、平民というか庶民でしたよ。今もそのつもりですけど」

「というか私の世界でもこっちでも、平民の方が多いんじゃないの？王族や貴族ばかりだったら国が成り立たないと思うけど。」

「そうでしたの。ねえ、お母様、私もうそろそろ失礼したいのだけど」

「そう？ではわたくしもここで失礼しますわ。今度お会い出来たらもう少し有意義な会話がしたいですわね」

有意義な会話って、先に噂の話をし出したのはそっちなのに！！しかもあなたたちは庶民がお嫌いですか、そうですか。

あんたらの暮らしは庶民の生活の上に成り立ってるんじゃないのか！！

「ここで税金を払ってない私がたたける大口ではないので黙ってますけどね。」

呆れた目つきで去って行く二人を見ていたら可愛い溜め息が。

「はあ。お気を悪くしないで下さいね、サイキ様。お母様も姉上も、少し平民を毛嫌いしているところがあつて．．．．．」

「うーん、嫌われたのは悲しいですけど生まれは変え様がないです

から、ここは気にしないことにします」

「あの二人は王族の中でもずば抜けて直系王族ってことに拘りがあるからなあ」

「でもレッテシーム様が王位を継がない限りはどうせ城を出て行くことになるんですよ？いつまでも直系で居られる訳ではありませんわ。レッテシーム様が立太子されるならともかく」

「あの人が立太子い？親父でも議会を通らないのにそりゃ無理な話だろ。っと、別にお前の母親を貶してるわけじゃないからな、レシユカ」

「わかってるよ。僕もお母様に王太子が務まるとは思ってないもん」

「もうその話はよろしいじゃないですか。それよりサイキ様のお世界の話、もっと聞かせてくださらない？」

「イーシンさん、軌道修正ありがとうございます。さすが大人なだけあるわ。」

「この子たちはよほど王太子の話が気になるのねえ。」

「自分のこれからを左右することだから気にするのは当たり前なんだからうけど。」

「王様にさっさと決めて下さいって言いに行きたいくらいだわ。」

城の中の異分子

自室に入るなり、ライナンは荒々しくカウチに腰を下ろした。

「信じられない！運ばれて来た方が平民だったなんて！！あんな人間が同じ城で生活してるなんて屈辱だわ！！」

「ライナン、落ち着きなさい。私も驚きましたけど陛下が正式にお迎えになったんだから仕方ないわ。そのうち出て行かれる方なんだから、こちらから関わらなければいいのよ」

レッシームはライナンの隣にそっと座ると、慰めるように彼女の肩を抱いた。

彼女達に取って王族であることは誇りであり、城に住まうことはその証でもある。

そこに突如やってきた異世界の人間。しかも国王と同等、或はそれ以上の権限を持ってこの国に存在しているのだ。

「でも卑しい身分の人間が王族と同じ様に肩を並べるなんて、冗談じゃないわ！それにあんな噂になるくらいですもの、あわよくば王族と関係を結んで城に居座るつもりなんだわ！」

「確かにあまり分別のある方には見えなかったわね。レシユカにもあまり近づかないようによく言い聞かせておかないと」

「容姿も普通でしたし、教養があるようにも見えなかったわ。たかが異世界から来たというだけで特権を与えるというのもどうかして

るのよ。ねえお母様、陛下に頼んであの人に城下へ移って頂きましようよ。傍系の方のお邸にでも。それなら一応王家の保護の下という面目も保てるでしょう？」

王族は平民の上にあるべくもの、そう考えるライナンにはどうしても平民である運ばれて来た人間が同じ城に住まうことが我慢ならないうようだった。

レットシームとて娘の言いたいこともわかる。
この城において、あの人間は完全な異分子だ。

「でもあの人間が陛下をも超える特権をお持ちなのは確かなのよ。それを傍系のところへなんてやってごらんなさい。いいように利用して王位の篡奪を企てるかもしれないわ。どうしても言うなら王族の居住区へは決して入れないように近衛に言うておくことにしましょう」

「お母様がそうおっしゃるなら。ああ、早く『理由』をなんとかして帰ってもらいたいものね」

もし『理由』を片付けて尚も城に居座るつもりなら、どんな手を使ってもここから追い出してやる。

ライナンは未だ落ち着かない心の中で、それだけは固く誓った。

「すまない」

私の目の前で、哀愁漂う美しい顔を曇らせているのは何を隠そうデ
イゲアさん。かんばせ

あの後しばらく話し込んでたけど、イーシンさんが公務で失礼する
と言うのでじゃあここで開き〜という流れになった。

王族の方々が退室された後、自室に帰ろうとした私を呼び止めた美
少年の開口一番が上記のセリフ。

え？私に謝ることなんかあったっけ？

っっていう疑問符が顔中に浮いていたようです。

「あの噂のことだ。私の不用意な行動のせいで気分の悪い思いをし
ただろう。あと先ほどのレッテシーム殿下のことも……」

「え！噂のことなら私が謝りたいくらいですよ！！いきなり現れて
お世話になったのは私の方なのに、デイゲアさんにまで迷惑かけち
やっでごめんなさい。さっきのことも全然気にしてないです。疾し
いことなんて無いんだし、堂々としてましようよ!!」

デイゲアさんはちょっと不遜な態度くらいでないところっこの気が狂
う。

だからこんな下らない噂でへこんじゃダメだよ!!

そんな気持ちを入れて肩をポンポン叩いたら、キョトンとされた。

でも次の瞬間には……………

「……………わ!」

「ん?どうかしたか?」

何て言う殺傷能力の高い笑顔を!!

私が年頃の男の子なら鼻血吹いて倒れるという大惨事になってたよ!!

あぶないあぶない!!

「いえいえ!!なんでもないです!!それより今日は久しぶりにデ
イゲアさんに会えて良かったです」

「私もどうしているか気になっていたから、こういう場を設けてく
れて助かった。」

「こちらこそ来てくれてありがとうございます!あ、あと今日デイ
ゲアさんのご両親はいらっしやらなかったみたいなので、今度ちゃ
んと紹介して下さいね」

「そうだったな。向こうも会いたがっていたから時間の合う時に連
絡をしよう。父は忙しいと言ってても城内に居るから会おうと思えば
いつでも会いにはいけるんだが、母の方は城下で仕事をしているん
で、昼間は城には居ないんだ」

「へえ〜。王族でも城下で働けるんですね」

「母は元々市井の出身だからな。仕事を続けることを了承する条件
で、父からの求婚を受けたと言っていた。よほどやりがいのある仕

事なんだろう」

「デイゲアさんのご両親は恋愛結婚なの!？」

「なんかロマンチックでいいなあ。ご利益にあやかりたいもんだわ。」

「お母様はなんのお仕事をされてるんですか?」

「教師だ。私も通っていた王立学院で教鞭を取っている」

「そうなんですか!?!じゃあデイゲアさんもお母様に教えてもらったりしたんですね」

「それが、やはり我が子を受け持つと無意識にでも臍盾があつては困るから、と言って在学中は一度も母の授業を受けたことが無いんだ。厳しいと有名ならしいから幸運だったのかも知れないな」

「えー!デイゲアさんのお母様が厳しいとか想像出来ませんね!。日曜に手作りのケーキ焼いて息子とその友達に振る舞って、「お前の母さん若いしきれいでうらやましい!」「いやだわオホホホ。これからもデイゲアと仲良くしてちょうだいね」とか言ってるイメージが.....」

「すまないが、後半部分が良く聞こえなかった」

「いえいえ!ただの独り言ですから!でもご両親が忙しかったら小さい頃は寂しかったんじゃないですか?」

「とは言っても王族だし、お城だし、周りに人が居ないってことはないんだろうけど。」

「でも自分の親とお城に仕えてる人は違うもんなあ。」

「物心ついた時からそんな感じだったから当たり前だと思っていたんだろうな。それに伯父夫婦が代わりのようによく構ってくれたから、あまり寂しいとは思わなかった」

「伯父さんつて亡くなられたマリグエラ殿下のことですよね？お二人には子どもがいらっしゃらなかったって聞きましたから、きっとデイゲアさんのことを自分の子どもみたいに可愛がってたんでしょねえ」

「そうかもしれない。彼らは本当によくしてくれたからな。私も伯父から学んだことは多かった」

小さい頃のデイゲアさんも可愛かったんだろうなあ。

マリグエラ殿下とその奥さんも、子どもが居ないなら尚更可愛がってたことだろう。

養子にして次期王太子に、なんて考えるくらいだし。

でもここでちよつと疑問が。

「．．．．．それでも、王太子が亡くなった後に立太子しようとは思わなかったんですね？そういう話も出てたのに」

マリグエラ殿下がデイゲアさんを気に入って次期王太子についていう話があったとメリエヌさんは言ってたよね。

デイゲアさんがさすがにその話を知らないとは思えないし、口ぶりからしても二人は仲が良かったように思う。

それなのに、なんでデイゲアさんはマリグエラ殿下の遺志を継がないんだろう。

王太子になるところか王族を抜けるとか言ってたし。

「……伯父が亡くなったのは私のせいだ。だから私に王子になる資格は無いと思っっている」

「え、王太子が亡くなったのは事故のせいだって聞きましたよ」

アイヴンさんは事故以外の証拠は何も出なかったと説明してくれた。でも確か王様も殺されたかもしれないって言ってたような。

デイゲアさんも王様と一緒に、王太子は殺されたって思ってるの？

「確かに伯父は事故で亡くなった。だがあれは人的要因の事故だ。誰かの差し金であることは間違いない」

「仮に王太子が殺されたとしても、それがデイゲアさんのせいだっ
て思っるのは考えが飛躍しすぎなんじゃ……」

「伯父が立太子してから30年、もし王太子である伯父が邪魔だと思っならもつと早くに行動に移せたはずだ。それがなぜ2年前だったのか、不思議には思わないか？」

デイゲアさんは右手の親指で下唇をなぞった。
なんとも色っぽい仕草。

「うーん、機を狙ってるうちに時間が経ってたとか」

「私は伯父が私を次期王太子にと考えたからだと思っっている。伯父がそれを打診してきたのは妃殿下が亡くなられた5年前。その時はまだ学院に在学中だったから答えを保留にしていた。だが結局私が答えを出す前、卒業する年に伯父は事故に遭った。あまりにも出来すぎだ」

つまり誰だか知らないけど、王太子を殺した犯人（仮）はディゲアさんが立太子するのを邪魔しようとして事故を企てたってこと？
でもそれなら……………」

「でも普通なら王太子じゃなくてディゲアさんを標的にすると思うんですけど……………」

「だから、伯父が私のせいで死んだと言っているんだ」

「向こうの手違いで王太子が殺されてしまったって言うんですか？
それでも亡くなったのはディゲアさんじゃなくて殺した人のせいでしょ？」

殺されたかどうかは分かんないけど、どう考えたってディゲアさんに責任は無いと思う。

「例え他の人間がそう言っても、私は自分を許せない」

「もし、ディゲアさんが自分を許せないって思うんなら、そこは手を下した人を見つけ出して、罪を償わせるべきです！王太子だってディゲアさんが事故のことを悔やんでくよくよと生きるの望んでないんじゃないですか？私も協力しますから、もっとちゃんと調べてみましょう！！」

こんな若い年で隠居生活送っちゃうなんてよほど気に病んでたんだろうけど、それじゃあディゲアさんが可哀想だ。

「お前はこの問題には関わりたくないんだと思っていたが……………
違ったのか？」

「私はデイゲアさんのために真相を明るみにしたいんであって、誰かを王太子に選ぶつもりなんて毛頭ありません。デイゲアさんにはお世話になったし、もしかしたら私の特権が役に立つかもしれないんで、喜んでお手伝いしますよ」

私の申し出は余計なお世話だったのかな？

デイゲアさんの目は不安げに揺れていた。

「サイキ様！！」

私とデイゲアさんしか残っていなかったところへ、いきなり大きな声が響く。

びっくりするじゃないの。

開け放たれていた食堂のドアからピョコッと顔を出したのはレシユカくんだった。

「まだこちらに居たんですか。あー！またデイゲアと話してる！
！ずるいずるい！！」

え？ずるいつて何？

「僕だつてもつとサイキ様とお話したかったのに！！」

ああ、そういうことか。

てつきり『レシユカくんと仲の良いデイゲアさんと話し込んでた私に対する嫉妬』だったらどうしようかと。

「もうお部屋に帰られるでしょ？僕送って行きますから、今度は僕とお話してください！！」

そう言っつて私の腕を取りぐいぐいと自分の方へ引き寄せる。
こんなにかわいい年下の男の子に慕われて喜ぶべきなんだろうけど、
これっつて『異世界人』っつていう付加価値のせいなのよね。
私が普通にこの世界で育つた25歳だったから見向きもされなかった
んだらうなあ。

「じゃ、じゃあお願いします。ディゲアさん、また今度」

「……………ああ。引き止めて悪かったな」

話はちよつと中途半端だったけど、これ以上話してたらレシュカく
んがうるさそう。

何よりさっきの話はあまり他の王族には聞かれない方がいいような
気がするしね。

ディゲアさんはさっきの不安そうな雰囲気はどこかへ飛んで行つた
ようだった。

でも何となく寂しそうな表情で私とレシュカくんを見送っていたよ
うな。

気の強そうなディゲアさんにしては珍しい。

食堂を出たところでアイヴンさんが私を待っていた。

ずーっとここで待ってたのかしら……………。
もっと早く出て来ればよかったかも。

「アイヴンさん、お待たせしてすみません」

「いえ、お気になさらず。お茶会は楽しめましたか？」

「はい。ディゲアさんとも久しぶりに会えたんで良かったです」

「サイキ様、デイゲアと何の話をされてたんですか？」

大きな目でじーっと私を見つめる子犬、もといレシユカくん。

王太子は殺されたかもしれなくて、その犯人探しを手伝うっていう話をしました。

なんてもちろん言えるわけがない。

「ああ、噂のことですよ。お互いあれで迷惑してるよねーっていう話をしました」

「そうだったんですか。デイゲアは昔っから他人と触れ合うのを嫌っていた節があるんで、きつとサイキ様に親切にしたのを深読みした人がいたんでしょうね」

「親切って言われても、路頭に迷ってたんだから已む無しって感じなんですけどねえ。それよりレシユカくんは私と一緒に居ても大丈夫なんですか？」

あんな噂の上がった私（しかも平民）のことを母親であるレットシームさんは快く思っていないんじゃないだろうか。恐らくライナンスんも。

「お母様のことですか？気にしないで下さい。僕は自分の意志でサイキ様と居たいんですから！」

「レシユカくんがそれでいいなら私はもう何も言わないですけど、後から「うちの息子を誑かさないで下さい！」とか怒鳴り込まれるのはご免ですよ」

「あはは！！サイキ様ってば面白い！！母は基本的に僕に甘いん

で、そういうことは無いと思いますよ」

あっけらかんと言ってくれるけど、我が子に甘い親ってのは得てしてモンペになりがちだってこと、この子は分かっているのかな？ 怒りの矛先がこっちに来るんだってば。

「あーあ、もうお部屋に着いちゃいましたね。もっとお話したかったんですけど、僕のお友達に連絡しないといけないし、また今度遊びにきてもいいですか？」

「うーん、部屋に招くとまた良からぬ噂が立つかもしれないんで、お庭の散歩とかで良いならいつでも。お友達のこと聞きたいし」

「じゃあ次に来る時はなにか良い情報を持って来ますね！」

バイバイと手を振って、無邪気な少年は去って行った。

ディゲアさんと比べると子どもっぽいなあと思うけど、これが普通なんだろうな。

もしかしたらディゲアさんの中には小さい宇宙人が入ってるんじゃないだろうか……？

7日目 2 (後書き)

誤字脱字等ありましたらお知らせ下さい。

7 目 3 (前書)

ちよつとめつちよ。

さて、デイゲアさんの答えを聞かず終いだっただけど、私は彼に協力したいと思ってる。

これが解決してデイゲアさんがこの先過去に捕われずに済めばいいなーと思うし。

確か王太子が事故に遭ったのは偶然ではなく人為的だったと言ってたよね。

その根拠があるってことなのかな？

でも王太子はデイゲアさんの代わりに死んだみたいに言っていた。

デイゲアさんが死んで利益を得る人を考えたら、すごく限られてきそうなんだけど。

次期王太子とかは関係なく個人的にデイゲアさんに恨みを持ってとか？

でもそれだったら2年も城を離れて無事なはずは無いよね。

あっちの方がよっぽど簡単に手を出せるはずだし。

自室のソファに座ってうんうん唸ってる私。

ここに来てたかが1週間の私にはちょっと荷が重すぎるのかな。

「サイキ様、難しいお顔をされてどうしたんですか？」

よほど私の顔がひどかったのか、アイヴンさんが心配そうにこちらを伺って来る。

お茶会から帰っていきなり考え事してるもんだから、また何かあったと思われちゃったかな。

「いえいえ、特に何かあった訳じゃないんですけど．．．．．ねえアイヴンさん、王太子が亡くなった事故ってどういう感じだったんですか？」

「え？マリグエラ殿下がお亡くなりになった事故ですよ？あれは艇ふねの事故でした。公務の外出先から帰城される際に、城に接触してしまっただんですよ」

「事故以外の証拠は出なかったって言いましたよね？そういう事故は結構あるもんなんですか？」

「かなり珍しいですがあり得ないことでもないです。艇ふねは市街地上空を飛行することもあるので、決して墜落しないように設計されています。ただ離陸、着陸の直前直後は安全装置が作動しないので、高度が同じであれば接触の可能性はあるんです。殿下が乗られていた艇ふねも着陸の直前でした」

「城に接触ってというのは運転していた人のミスですか？」

「運転していたのはマリグエラ殿下の側近の方だったのですが、着陸の直前に心臓発作を起こしたようですね。事故直後、すでに意識は無かったようで、搬送先の病院で亡くなられたと聞きます」

「王太子の方はどうして亡くなられたんですか？」

「殿下の座っておられた側が接触し、頭を強く打たれたことが直接の原因でした」

ここまで聞いた限りじゃやっぱ運転してた側近の人が怪しい気がします

る。

推理の得意な私じゃなくてもこいつが犯人じゃ、と思うくらいには。

「その側近の人は元々心臓に持病でもあったんでしようか？」

「いえ、もしそうなら側近としての仕事はともかく艇ふねの運転までは任されなかったでしょう。わたしは2年前には既に城に仕えていたのでその方も面識はありましたけど、持病があるとは聞いた事がないです。もちろん事故直後に毒、薬物の可能性も調べられましたけど、何も出て来ませんでした」

うーん、私には医学の知識なんてないから、その側近の人の心臓発作が普通なのかどうかかわかんないなあ。

若い人でも過労とかストレスでそう言う事って起きるとか言うよね。でも側近の人を含めて、これを仕組んだかも知れない人にそんなに都合良く心臓発作を起こせるもんだらうか。
ますます推理小説のような世界になって来たっぽい。

「サイキ様は殿下のお亡くなりになった事故のことを調べておられるんですか？」

「良くしてくれたっていう王太子が死んだ事で、デイゲアさんは相当傷ついたと思うんですよね。林の家に引越しちゃうくらいに。それにデイゲアさんも事故が偶然だったことには納得してないみたいだったんですよ」

「デイゲア様だけでなく、王族の方々は皆事故を信じていないようでしたね。陛下も徹底的に調べるように仰っていましたし。それでも事故以外の証拠が何一つ出て来なかったんです。もしサイキ様がお望みなら当時捜査に当たっていた者をここに呼びますか？」

「いえ、そこまでしてもらっても私にはわからないと思うんですけど。その側近の人は特に怪しい点とか無かったんですか？」

アイヴンさんはその細い顎に手を当てると、昔を思い出そうとしてるのか宙をじっと見つめる。

「確か殿下に仕えるようになって10年以上は経っていたと思いますが、元はわたしと同じ王室師団の所属だったようですが、殿下の目に止まり抜擢されたと聞いた事があります」

「あ、王太子の方から選んだ人だったんですか……」

「近衛から側近になるのは別に珍しくは無いんですよ。護衛を兼ねている場合もありますから。しかしその方が運転することになったのも偶然なのです。殿下の側近は2名いて、直前までもう一人の側近の方も一緒だったと聞いていますし」

2人も!?

確かにそれくらいいないと毎日カバーできないか。

社長や重役の秘書も秘書室と違って何人も勤務してたりするよね。

「もう一人の人は今何してるんですか？」

「確か四大老付きになられたと聞きます」

「え!?!四大老に付いてるの?どの人?」

「ニージーク様です」

王太子の元側近が今はニージークさん付き！？
なんか怪しくないかあ。

あの人デイゲアさんとも仲悪いみたいだったし。

叩けばホコリが出るかも……………？

善は急げと言う事で、アイヴンさんを引き連れてニージークさんに会いに行く事にした。

目的はニージークさんと言うよりはその側近さんなんだけどね。

ニージークさん含め四大老は政府関連の部署の集まる城の前部に居る事が多いらしい。

彼女は初めて会った時からどうも私と親しくしたいようだったので、そっちに伺いたいと言ったらすぐにOKしてくれた。

「サイキ様、お久しぶりですわね。言ってお下さればわたくしの方がら伺いましたのに」

こないだ赤い髪だったニージークさんは、いつのまにか黒髪になっていた。

黒っていうより紺？日本人みたいに日に透けると茶色っぽく見える黒じゃなくて、青っぽい黒。

わざわざ染めたのかな……………？

「いえ、私も議会とか見てみたかったです。それにニージークさんも城を案内してくれるって言うてくれてたのに、その後連絡しな

いままだったから申し訳ないな」と思つて……」

「そのように気を掛けて頂けて光栄ですわ。では早速ご案内致します。どちらからご覧になります？ 議会？ それとも各省庁が宜しいかしら」

「えーっと、じゃあニージークさんの仕事場からどうでしょう？」

「わたくしの？ サイキ様をご覧になって面白いものかどうかは分かりませんが、そう仰るならご案内しますわ。こちらです」

白いスーツに身を包んだ彼女はくるりと向きを変えると、高いヒールの付いた靴で颯爽と歩き出した。

すぐ近くに控えていた男性が彼女の後ろに続く。

この人が元王太子の側近かな？

「わたくしの管轄は教育、医療福祉、厚生と言つた国民の生活に関することが多いんです。ですから執務室の周りにもそう言つた部署が配置されております」

そう言つて通されたのはそこそこ広い洋室で、正面に窓があり、その前に大きな机が置かれている。

壁の一面は棚が端から端まであり、もう片方の壁の前は応接セット。

「大したものはいませんが、心行くまでご覧になって下さいな。何か説明の要りそうなものがあれば、わたくしでもこのラオアラにでも聞いて下さればお答えしますわ」

そう言つてニージークさんが私たちの前に促したのは、さっきからずっと彼女に付き従っている男性だった。

ニージークさんと同じ年くらいの人その人は固い表情で小さく礼をすると、すぐにまたニージークさんの後ろに控えてしまう。

「ラオアラさんはニージークさんの部下ですか？」

「ああ、紹介しておりませんでしたわね。ラオアラはわたくしの秘書を務めておりますの」

「以前王太子の側近をされてたつてというのは彼ですか？」

その言葉に反応したのは当のラオアラさんだけでなく、上司であるニージークさんもだった。

丁寧に化粧の施されたきつい印象の目がすつとこちらに向けられる。

「どなたにお聞きになったのかは存じませんが、ラオアラがマリグエラ殿下の側近をしていたのは事実です。しかし殿下にお仕える前は政府職員でしたのよ。ですからこちらへ来たのも古巣へ戻った、ということでしょうか」

「ニージークさんが自分の下に付くように言ったんすか？」

「そうですね。能力のある人間のようでしたのでわたくしから陛下にお願い致しましたが、何か問題でもありましたの？」

彼女はわざと惚けているのか、小首をかしげるような仕草をした。この人は私が何でラオアラさんのことを聞くのか分かっていて核心に触れないようにしてるんだろうか……。

「ラオアラ、サイキ様にお茶を淹れて差し上げて」

未だ表情の変わらないラオアラさんはその命令を受けて、部屋から下がってしまった。

しかし彼が部屋を出た途端、ニージークさんがこちらに歩み寄って来る。

私の後ろに控えていたアイヴンさんが前に出ようとするのを物ともせず、私の腕を強く掴み、鋭い目つきでこちらを睨んで来た。

なにになに！？殴られる！？どつかれる！？？

「サイキ様、何を嗅ぎ回っておられるのか存じませんが、無闇に首を突っ込まれて危険な目に遭うのはあなたの周りの人間だと言う事、よく覚えておいてくださいませ」

近くに居ないと聞き取れないような声でそれだけ言うと、パッと私を離し執務机の方へ下がった。

びびびったあ．．．．．。マジで刺されるかどうかかと．．．．．。

やっぱりラオアラさんが王太子の事故と関係あるから脅して来たの？

「大丈夫ですか？」

囁くような声でアイヴンさんがこちらを伺う。

でも視線はニージークさんの方を強く見据えたままだ。

「だ、だいじょうぶ．．．．．です．．．．．」

掴まれた腕のじんじんとした痛みが、彼女の本気を示している。

このままニージークさんとラオアラさんを調べても大丈夫なんだろうか。

きつとこの人は私が何を知らうとしているのか感づいているに違いない。

そろりとニージークさんの方に目をやると、彼女は先ほどの鬼気迫る雰囲気など最初から無かったかのように落ち着いた様子でこちらを見ていた。

私の心臓はまだばくばく言ってるっていうのに……………。

「……………あなたは何か知ってるんですか？」

「一体何の話をされているのか分かりませんわね」

う、そ、つ、け〜!!!!!!

飄々とした態度で、にこりと笑う彼女。

でもその目、笑ってませんよね？

そこへ、ラオアラさんがお茶を載せたトレイを手に帰って来た。

腕を押さえて立つ私を一瞥したけれど、特に何も言わずに応接セツトにお茶を並べる。

この人が淹れたお茶、飲んでも大丈夫……………？

けど逡巡する私のことなんてお見通しのニージークさんだったらしい。

「ラオアラ、サイキ様はご気分が悪くなられたのでお部屋へ帰られるそうですわ。お茶を召し上がって頂けなくて残念ね」

いつか見たチエシヤ猫みたいな笑顔で、言外に『おととい来やがれ』と私たちを追い出してくれた。

7 目 3 (後書き)

誤字脱字等ありましたら是非是非お知らせ下さい。

8 目 1 (前書き)

暴力表現がありますが、それを推奨するつもりはありません。
苦手な方はお気をつけ下さい。

今朝早く、私の部屋にオルティガさんが訪れた。

この人は一体何時から仕事をしているのか知らないけど、漸く身支度を整えた私とは違って、いつもと同じ様にマオカラーのスーツをピシッと着こなし、髪も丁寧に整えられている。

「本日はレシユカ様がお友達の件でサイキ様を城下にお連れしたいと仰っています、どうされますか？」

例のお家がシヨッピングモールを経営しているというお友達ね。

昨日はちよつとシヨックなことがあり、少し落ち込んでいたけれど、私も自分の『理由』をなんとかしなければいけない。

「えっと、是非お願いしますとお伝えしてください」

「かしこまりました。艇ふねの手配をしておきますので、好きな時に声をかけて下さい」

今回は城下まで艇ふねを出してくれるらしい。

私だけならともかく、王孫であるレシユカくんを歩かせる訳には行かないのかな。

本当はもうちよつとラオアラさんのことを調べたかったけど、きつとニージークさんはもう彼に会わせてはくれないだろう。

日本で美容部員として働いていた25歳の平凡女子には、政治の世界で現役バリバリのニージークさんは強敵すぎたようだ。

私に腹芸なんてものは出来ないし、いくら特権があると言ってもそれを使いこなせているとは言えない。

昨日の『突撃！お城の二ージークさん』作戦はRPGで序盤にいきなり中ボスに挑むような、お粗末な結果だった。

ここで敢えてラスボスと言わないのは私の強がりと取ってもらって結構。

レシユカくと城下に行くために乗ったのは、エルタさんが林に迎えに来た時とは違う型の艇^{ふね}だった。

王都のビル群の間を飛んでるのに似てて、主翼がない。

私がそれを指摘すると、向かいに座っていたレシユカくんが説明してくれた。

「これは近距離用だから、主翼は無いんですよ。ビルの間を飛ぶには邪魔になるからっていう理由もありますけどね」

確かに主翼が無い状態でもSUVかミニバンくらいの大きさだから、ビルの間を飛び回るのはコンパクトな形状の方がいいんだろう。タイヤの無い車のようなこういう乗り物が王都上空を飛ぶ様は、遠目には花の周りをクマバチが飛んでいるように見えた。

「今日行くのは僕の友達のお家が経営しているショッピングモールの一つなんですけど、城に通じる大通りに面してて王都では一番人気なんですよ！中に入ってる店舗数も国内最多で、きっと中で買えないものはないんじゃないかなあ」

「大通りに面してるって、もしかしたら私が行ったところもそこかしれませんか。城から歩いて行ったんですけど、大通りにありました」

から」

「きつとそうですよね！サイキ様がお買い物されたなんて知ったら僕の友達も喜びます！！」

いやいや、王族が御用達にしてる事の方がよほど喜ばしいですよ。

私はただの居候だし？

あなたのお母さん&お姉さんが嫌ってる平民だし？

艇ふねはやはり私たちが先日行ったモールに向かっているようだった。

巨大な箱が連なったような外観は、所々がガラスで覆われていて、中の賑やかさが伺える。

階段のように高さに差のあるビルの屋上に艇ふねを止め、隣接する建物の中に入る。

この部分はモールの中にあるけれど商業スペースではなく社用に使っているんだそうな。

パンツスーツを着たキレイなお姉さんが出迎えてくれて、運転していたレシュカくんの護衛も入れた私たち4人は応接室みたいな部屋に案内された。

応接セットの他には特にこれといった調度品はなく、壁に抽象画が掛かっているだけの部屋。

私たち以外には誰もいなくて、物が少ないこともあってかなり広く感じる。

レシュカくんは訳知り顔で中にあるソファに座り、隣をポンポンと軽く叩いて私に座るよう促した。

「今呼びに行かせてるんで、すぐ来ますよ。こっちに座って待ってません？」

「あ、じゃあお言葉に甘えて」

向かい合わせになっているソファの反対側にはお友達が来るだろうから、言われた通りにレシユカくんの隣に腰を下ろす。

アイヴンさんはいつものように私の後ろに立って控えた。

そしてレシユカくんの護衛も同じ様にレシユカくんの後ろに立つ。

「ねね、サイキ様。僕あなたに聞きたい事があるんですけど、いいですか？」

隣に座っていたレシユカくんは徐に顔だけをくるっとこちらに向け、私の目をつじつと見てきた。

「なんででしょう？」

特に心当たりも無いので、少し不思議そうな顔をしていたんだろう。彼はその人懐っこい顔をかわいらしく綻ばせた。

「昨日二ージークのところでは何の話をしていたんですか？」

「え……………」

何故それを？

と思った瞬間。

後ろでドサリと言う重いものが落ちる音がした。

慌てて振り向くと、レシユカくんの護衛がアイヴンさんの腕を後ろ手に捻り上げ、床に膝を着かせている。

なんで……………アイヴンさんを……………？

アイヴンさんも状況が上手く把握できていないのか、双眸を大きく開いて背後にいる男を見上げていた。

「ほら、サイキ様が答えてくれないとアイヴンから無理矢理聞かないといけなくなりますよ〜?」

「つく．．．．．！放せ！！」

レシュカくんがそう言った途端、護衛がさらにきつく腕を捻り上げたようだった。

アイヴンさんは眉を寄せ、その顔を苦痛に歪ませていいる。

「や、やめてください！！アイヴンさんの腕を放して！！」

「だから、サイキ様が答えてくれたら手荒なことはしなくて済むんですよ。ニージークとどんな話をしたんですか？ああ、何を探ってたんですか、って聞いた方がいいのかなあ？」

ソファにゆったりと座り、少年は自問自答するように顎に手を当てている。

後ろでは大柄な彼の護衛が遥かに華奢な体の女性を押さえつけているって言うのに、それが当たり前前と思っっているのか、レシュカくんは一度も後ろを振り返らない。

私はソファから身を乗り出して護衛の腕を掴むが、片手で振り払われてソファに逆戻りしてしまった。

「ニ、ニージークさんには仕事のお話を聞きに行っただけです！それだけです！！」

私はなんとかアイヴンさんを解放してほしくて、一人空気の変わらない自分よりも10も年下の少年に言い寄った。

それでも本当のことを言わなかったのは、彼が聞きたがっているの

は間違いなく私が昨日ニージークさんを訪ねた理由に違いないから。

「サイキ様、本当のことを言って下さいね？僕は別にアイヴンの腕がどうなるかと気にしないけど、あなたはそうじゃないでしょ？」

「本当です……サイキ様は大老の仕事の話聞いてらしただけです……！」

「誰がお前に口を利いていって言ったの？うるさいよ」

「っ……！！！」

あの子犬のような少年から出たとは思えないような冷え冷えとした声に怖気が立つ。

主人に忠実な彼の護衛は、レシユカくんが気分を害した事にすぐに気がついたようだった。

容赦なく彼女の頭を掴み、部屋の床を覆う毛足の長い絨毯に押さえつけた。

「い、言います！言いますからアイヴンさんを放してっ！！ニージークさんの秘書のことを聞きに行っただんです！！王太子の元側近の！！でもニージークさんは何も教えてくれなかったんです！！！！！本当のことを言ったから早くアイヴンさんからこの人を退かせて下さいっ！！！」

25年生きて来て、目の前で暴力が行われるのなんて初めてだった。あつたとしてもせいぜい平手打ちとか、子どもの喧嘩くらいだ。

平凡な私にとって、今見るような光景は映画やテレビの中だけの事だったのに……。

でも目の前で苦しそうに押さえつけられているのは、たった数日の

付き合いだとしても私の護衛で。

そしてそれを指示している人も全く知らない人間じゃない。

私はレシユカくんの腕を掴み、必死で訴えた。

彼の顔に浮かんでるのはいつもの笑顔なのに、今は無表情よりも冷たく見える。

「さすがにあなたじゃニージークの口は割ることは無理かなあ。ねえサイキ様、あんまり余計な事はしないでくださいね？誰にだって探られて痛い腹はあるんですよ」

レシユカくんはそう言いながら右手をすつと上げた。

それを合図に護衛がアイヴンさんを立たせる。

いくらやわらかい絨毯と言っても、カ一杯押さえつけられたせいで彼女の頬は赤くなっていた。

そして両腕も背中中で拘束されたままだ。

「も、もういいでしょ……？アイヴンさんを放して……

・友達の紹介もいらさないから私たちを帰して下さい」

「あははは！本当に僕の友達を紹介すると思ってたんですか！？サイキ様って本当に面白い！！」

「な……！！騙したんですか！！」

「僕だってこんなに簡単に着いて来るなんて予想外でしたよ？」

私の頬がかつと赤く染まったのが分かった。

こんな子どもに自分の行動が軽卒だったと馬鹿にされて……

平和ボケしてると思われても仕方ない。私は今の今までこんな事が

起こるなんて、微塵も予想していなかったんだから。

「それにね、まだ本題は終わってないんで帰してあげられないんです」

そうにつこりと笑う少年。

その笑顔を見てこの子が人懐っこい子犬みたいに思ってたのが遠い昔のことのようだ。

たった一日前のことなのに。

「……………本題って何ですか？」

「まあその話をする前にちょっと……………おい、入って来い」

レシユカくんの呼び声でさらに2人の男が部屋に入ってきた。

みんなアイヴンさんを拘束している護衛の人くらいに体格が良く、その顔からは一切感情が伺えない。

そのうちの一人がレシユカくんに小さなナイフのようなものを差し出した。

果物ナイフよりもすこし長めで、柄の部分には象牙のような白い素材が使われている。

レシユカくんが鞘を取り去ると、切れ味の良さそうな曇りのない刃先が現れた。

それで一体何をするつもり……………？

ナイフに意識を奪われてたせいで、私の傍にもう一人の男が近づいていたことに気がつかなかった。

「サイキ様っ!!!!!!!!!!」

アイヴンさんの悲鳴のような声で振り向くよりも先に、後ろから男が私の両腕を掴む。
素肌を感じる乾いた手の感触にゾワリと背が粟立った。

「いやっ！！放して！！」

必死で腕を引つ張ってもビクともしない。
それどころか男の私を掴む力が増すばかりだ。

「そこのお前っ、サイキ様を離しなさい！！レシユカ様も、こんなことをすればいくら王族のあなたでも相応の罰を受けることになりますよ！！」

「そうかもね。ま、それが露見したら、の話だけど。じゃあサイキ様、ちよつとじゅっとしててくださいよ？」

レシユカくんを止めようと暴れるアイヴンさんに、彼女を拘束する護衛が捻り上げる力を強めたようだ。

容赦ない締め付けに彼女の顔が再び苦痛に歪む。それでも決してその両目をレシユカくんから反らさない。

アイヴンさんが大人しくなったところで、私の後ろにいる男は掴んでいた左腕を前に突き出した。

目の前の少年は笑顔のままナイフを逆手に持ち、ソファの上を私の方へ移動して来る。そして。

次の瞬間には躊躇うことなくそれを私に振り下ろした。

襲い来るであろう痛みには体が強張り、渴いた喉からは自分の声とは思えない音が吐き出される。

「いあああああああつ……！」

8 日目 1 (後書き)

レシユカ・ザ・ハラグロー。

8 目 2 (前書き)

暴力表現があります。

「サイキ様、サイキ様っ！！大丈夫ですか！？」

アイヴンさんの声が耳に届いていたけれど、私は固く目を閉じたまま顔を背けていた。

高いところから落ちた時に感じるような寒気に鳥肌が立つ。心臓は体の外に飛び出してしまったんじゃないかというくらいにうるさく鳴っている。

「……………ふん、やっぱり彼の方の庇護の元ではあなたに傷をつけることは不可能なのかぁ」

なんとなくガツカリしたような声に恐る恐る自分の左腕を見ると、レシユカくんの握るナイフが深々と刺さっていた。

ナイフは柄の部分で止まり、その切っ先は私の腕を貫通して反対側で鈍く光っている。

血が……………出していない……………？

それどころか痛みが一切感じられない。

「全く手応えが無くて煙にでも突き刺した気分。便利な体にしてもらって良かったですね。天上の方に感謝しておいた方がいいですよ」

次の瞬間、少年は刺した時と同様にあっさりとナイフを引いた。一切の抵抗を感じさせないで、それはするりと私の腕から抜ける。刺さっていた部分からはやはり出血もなく、見る限りでは小さな傷ですら残っていない。

「．．．．．エルタさんが言っていた『私の命は天上の方に保証されている』ってこういうこと？」

私に『理由』があつてここへ運ばれて来たから？

「．．．．．た、確かめるために刺したんですか．．．．．？
本当に刺さつてたらどうするつもりで．．．．．」

「誰だつて自分の身はかわいいでしょう？だから実際にあなたを傷つけることが出来たらそれはそれで好都合なんですよ。でもそれが無理なら標的を変更するしかないんですよ」

レシュカくんは私の腕から引き抜いたナイフの先に左手の人差し指をそつと当てた。

ほんの瞬きの間だけ当てたその指にはぷっくりと血の雫が浮く。

彼はそれを一瞥したあと軽く唇でその血を吸い、そのままその指で私の方を指した。

「あなたを直接傷つけることが叶わなくても、いくらでも脅し用はあるんです。あなたは随分とお優しい方のようなだから。例えば．．．
．．．そのアイヴンを使うとかね？」

「え．．．．．？」

呆然と彼の話を聞いていた。

目の前の少年が一体何の話をしているのか、上手く理解できない。

私を脅すためにアイヴンさんを使う……？

首を横に向けて、アイヴンさんを見ると彼女は私と違ってレシユカくんの言いたい事が分かっているようだった。

その顔を蒼くしながらも、私の方を強く見つめている。

「サイキ様、わたしのことなど構わず何を要求されても拒否なさって下さい」

「勝手に口を開くなつて言っただろ？言う事が聞けないんなら無理矢理にでも黙らせるよ」

そう言うが早いか、後から入って来た男の一人がアイヴンさんの方へ近づいた。その手には片手にすっぽりと入るくらいの小さな塊が握られている。

アイヴンさんは男に気付いてなんとか逃れようと体を擦るけど、後ろで彼女の両腕を捻り上げる男がそれを許さない。

男が暴れる彼女の首筋にその塊を押し当てると、途端に力を無くし頽れるアイヴンさん。

後ろ手に拘束していた男がそのまま彼女を床に転がす。

その時に露になった彼女の顔はやはり青白いままで。ただ、いつもは意志の強そうなその双眸は閉じられ、彼女の意識が無いことが分かった。

「アイヴンさんっ！！彼女になにをしたんですか!？」

彼女に駆け寄ってその無事を確かめたくても、私の両腕はまだ背後にいる男にがちりと掴まれたままだ。

それでもなんとか彼女の方へ少しでも体を近づけようとソファから乗り出す私の顎を、レシユカくんがぐいっと自分の方へ向ける。

取り乱す私と違って、彼は落ち着いたままだった。今まで見た彼の無邪気な姿が他人だったんじゃないかと思える程、まったく違う空気を纏っている。

「ちょっと眠ってもらっただけです。あなた方二人を連れ出したのが僕だつてことは公になつてるんですから、ちゃんと無事に帰すに決まつてるじゃないですか。ただ、ちょっと僕の言う事を聞いて欲しいだけです」

「……言う通りにしたらアイヴンさんにこれ以上ひどいことはしないんですね」

「それはあなた次第ですよ」

たった今アイヴンさんの気を失わせた男が、今度は私の方へやって来る。

そして先ほどナイフを突き刺された私の左腕に細い腕輪のようなものを填めた。

一見するとシンプルなバングルのようなそれは合金か何かで出来ているのか、ひんやりと冷たい。

繊細な彫刻が施されていて品のいいアクセサリの様だけど、この状況でこれが彼からの好意のプレゼントだと思えるほど、私だつてお気楽な頭はしていないわよ。

腕輪を付けられた後、漸く私の両腕は解放された。

「それね、盗聴器になつてるんです。で、次はこつち」

言いながらレシユカくんは男の一人にナイフを渡し、代わりに受け取った注射器のようなものを目の前に掲げた。

私の知っている注射器と形は似ているけど、全体がスチールのように

な金属で出来ていて中身はわからない。

「今からアイヴンの中に埋め込むんだけど、これね、中に小さいカプセルが入ってるんですよ。毒の。あ、カプセルが割れない限り毒は出ないんで、安心して下さい。僕が持つてるリモコンの操作一つで割る事は出来るんですけどね。もし毒が体に廻ったらしばらく苦しむだろうけど死に至ったりはしませんから。でも手足に麻痺が残るくらいの後遺症は出るかなあ？そうしたらアイヴンは近衛じゃないならなくなりますね。もしかしたら自力で生活することも出来なくなるかも」

「毒って……そんなこと絶対にやめて下さい！！お願いします！！」

「悪いけど、アイヴンにこれを埋めるのは決定事項なんです。でも、あなたが大人しくこちらの指示に従ってくれたら、カプセルは割らないと約束しますよ？」

「い、言う通りに従いますから！！！」

「いい答えですね」

さつき注射器をレシユカくんに渡した男が再びそれを受け取り、アイヴンさんの首筋に躊躇う事なく射した。彼女の意識はよほど深く沈んでいるのか、身じろぎ一つしない。

「まず、今日のことは誰にも口外しないで下さいね」

アイヴンさんに注意を向けていた私は、レシユカくんの声に視線を戻した。

相変わらずその顔にはにこやかな笑みが浮かんでいる。

私は自分がどんな顔をしているか分からなかったけど、笑っていないことは確かだろう。

「わかりました……………」

「あと、マリグエラ殿下のことを詮索するのは止めて下さい。王子に誰が相応しいかなんてことも言わないで下さいね。もちろん新しい王太子を選出することも言語道断です」

「……………王太子のことなら最初から誰も選ぶつもりはありません」

「それならいいんですけど。あと最後に、明日から四大老の会議に出席してください。僕がいいと言つまで毎日ね。とりあえずはここまでかな。後のことはまた指示します。あ、それとその腕輪ね、取ったら同じようにアイヴンのカプセルが割れちゃうようになってるから。気を付けて下さいね？」

その説明にゾットとして、思わず右手で腕輪を庇う様に胸に抱き込んだ。

こんな小さなものでアイヴンさんの一生が左右されてしまうなんて……………。

急に自分の左腕が砂でも詰まっているかのようにずしりと重く感じた。

「それだけ、ですか……………?」

「さっきも言いましたけど、それでああなたの会話はこっちに筒抜けなんです。だから滅多なこととは言わないで下さいね?僕も優秀な近

衛を失うのは惜しいし。もちろんアイヴン本人にカプセルの話をするのもダメですよ？ そうだなあ、あまりその腕輪が目につくのも都合が悪いから、後で何か上に着れるものを用意しますね。明日からは袖のあるものを着て下さい」

彼の目的が全然分からない。

四大老の会議に出席？ 彼は四大老から何か知りたい情報でもあるんだろうか。

それに死んだ王太子について詮索することを嫌がる理由もわからない。

この二つがどう関係あるんだろう。

でも今さらそれを疑問に思ったところで私にはどうしようもない。彼の言う通りに行動する以外に。

「全部言う通りにします。それで、いつアイヴンさんからカプセルを取ってくれるんですか？」

「あなたが元の世界のお帰りになるとき、かな？」

「そんな……！！いつになるかも分からないのに！！」

「だから頑張つて『理由』をなんとかして下さいね？」

私が『理由』を見つけないと、アイヴンさんはいつその自由を奪われるか分からない。

漠然と帰りたいとは思っていたけど、こんな形でそれを渴望することになるなんて……。

アイヴンさんは自分の体にそんな恐ろしいものが埋め込まれてるなんて知らずに、未だその目を閉じたまま横たわっていた。

レシユカくんが言いたい事を話し終わると、護衛の人を残して他の二人は部屋を出て行った。

私は過ぎ去った恐怖に怯えながらも、のろろとアイヴンさんの元へ寄り膝を着く。

静かに横たわる彼女の顔色はまだあまりよくない。

そつと髪を掻き分けると、首筋に本当に小さな、針で刺したような痕が残っていた。

彼女が自分で見る事は叶わない場所だし、他人が見てもよほど注意深く見ない限り気がつかないだろう。

大体彼女はいつも髪を下ろしている。

はやくこの忌まわしいものを取り去ってあげたい。

私の護衛に選ばれたばかりにこんな目に遭うなんて、申し訳なくてじわりと涙が滲む。

「アイヴンが起きたら、ちゃんと今日の事は他言無用って念を押しおいた方がいいですよ。知らずに自分で自分の首を絞めるような真似させたくないでしょ？」

レシユカくんはソファの背もたれに肘をつき、こちらを眺めていた。

「わかりました．．．．．でもここまでして．．．．．レシユカくんは私に何をさせたいんですか？」

目の奥がじわりと熱い。でもこの子の前では泣きたく無かった。

質問は意外でもなんでもなかったんだろう。彼は少しも動じることなくその口に弧を描かせた。

「いずれわかると思いますよ。ま、強いて言うならあなたの持つ陛下をも超える権力でないと出来ないこと、ですかね」

「それは王太子が空位ってことと関係あるんですか？」

彼は二つ目の質問には答えず、やはりいつものように笑うだけだった。

私たちが部屋に案内してくれた女性が薄手のカーディガンを持って来たので、それを羽織る。

袖がすっぽりと手首を覆うくらい長いので、腕輪を見られることは無いだろう。

アイヴンさんをソファに移動させたかったけど、レシユカくんにも護衛にも手を借りたくなかったのでそのまま床に寝かせて置いた。代わりに私も彼女の横に座り、目覚めるのを待った。

20分くらいそうしていただろうか。

抱えた膝に額を付けて頂垂れていた私の耳にかすかなつめき声が聞こえた。

ハツとしてアイヴンさんの方を見ると、閉じられた瞼がピクリと動いている。

「アイヴンさん!!!大丈夫ですか!?!」

「うつ．．．．．サイ、キサマ？．．．．．わたし、一体．．．．．」

彼女はまだ意識が混濁しているのか、苦しそうに眉を寄せながら体を起こそうとする。

慌ててその背中に手を添えて彼女を支えた。

アイヴンさんは何度か瞬きをして、周囲を確かめた後、ソファに座るレシュカくんに気付いたようだ。

途端にその顔を陰しくし、私を背後に庇う。

「一体何の真似です、レシュカ様。この事は陛下にご報告差し上げますから覚悟なさって下さい」

「待つて、アイヴンさん！．．．．．今日のことは誰にも言わないで下さい。お願いします」

「何故です！？この方があなたにした仕打ちは許されることではありません！いくらその身に彼の方の庇護があるうとも、あなたに刃を向けたことが既に罪です！騙す様にここにお連れしたことも！」

「アイヴン、サイキ様の言う事に従えないのかな？彼女がいつて言ってるんだからお前は黙ってればいいんだよ。ナイフのことだつてちよつとした好奇心だし、僕はサイキ様には何もしてないんだから。ね、サイキ様」

「そう、です．．．．．。えつと、結局何もされなかつたし．．．．．あまり大事にしたいくないんで、アイヴンさんも今日のことは忘れて下さい」

私はなんとか彼女が納得できそうな理由を考えたけど、結局何も思

い浮かばなかった。貧相な想像力め。

アイヴンさんは何度も「本当にいいんですか？」と聞いて来た。私だって出来ることならこの子の憎たらしい笑顔にグーパンチの一つでもかまして、王様のところに引きずってやりたい。

それでも私は彼女に今日のことを口外させる訳には行かない。他でもない彼女のために。

本当は嫌だったけど、帰りもレシユカくんとその護衛と共に艇ふねに乗った。

でも行きと違って誰も口を開かなかった。

風景に目をやる余裕も無く、私は腕輪の部分をカーディガンの上から強く握る。

私の手首の少し上の部分にぴたりと張り付くように留まっているそれが、何かの拍子に外れやしないかと気が気ではなかった。

城に着くと、レシユカくんは何事も無かったかのように護衛を連れて去って行った。

「また今度遊びに行きますね！」とあの屈託の無い声で別れを告げて。

ほんと二度と来なくていいですから。

自室に帰ると、アイヴンさんはやっぱり納得がいかなかったのかイライラした様子で人払いをする。

きつと私を問いつめて来るんだろつなあ……。納得がいかないのは私も同じなのよ、って言ってしまうたい。

「まず、本日のことをお詫び致します。わたしの怠慢のせいでサイ

キ様を危険な目に遭わせてしまいました。でもどうしてレシユカ様のことを不問になさるんです？確かに天上の方の庇護のおかげで何事も無く済みましたが、それでもあの方のはたらいた無礼は許されるものではないです。．．．．．このような事態になったことは護衛のわたしの落ち度でもありませんからどんな罰も受けます。ですからレシユカ様のこともご報告させて下さい！」

「アイヴンさん．．．．．」

どうしよう、この会話も聞かれてるんだよね？

彼女の怒りも十分に理解できるけど、レシユカくんを刺激したくない。

「お願いです、もう今日のごことは一切話さないください。誰にも絶対に言わないで欲しいんです」

「．．．．．わかりました。もう二度とこの話は致しません。あなたのご命令に従います」

アイヴンさんの顔には『不本意』とデカデカと書いてある。

彼女が私の言う事を命令と捉えても仕方ない、とにかくこの事を他の人に知られないことが大事だ。

「それですね、アイヴンさん、実はお願いがもう一つありまして．．．．．明日から四大老の会議とやらに私も参加したいんですけど．．．．．」

レシユカくんに言われた指示の一つ、四大老の会議に出席すること。どういふものかは知らないけど、出ると言われたら出るしか無い。アイヴンさんは私のお願いに、眉をピクリと動かした。

「それはレシユカ様に要求されたことですか？」

ギックーン!!!

ってどうかこの流れではそう思いますよね!!

「ちちちち違います!!ほら!もしかしたら『理由』の手がかりもあるかもしれないし!!!」

「.....」

「おねがいします~!!」

ああ!アイヴンさんの視線が痛いです!!

私にはやっぱり腹芸は出来ないみたい。でもでも、ここで引き下がる訳には行かないのよ。

年上の同性にやられてもグラッとはこないだろうけど、私は両手を組んで必死に訴えた。

「.....了解しました。明日から参加できるように手配致します」

はあ、と溜め息をついて折れてくれたアイヴンさん。やっぱり女神!!!

この厄介な腕輪のせいで、いちいち会話に気を付けないといけないのが面倒くさい。

どこかでポロつとレシユカくんの気に入らないことを言ったりしなければいいけど。

口に出せないイライラを携帯にぶつける。
とりあえず今日起こったことを整理するためにも。

- ・レシユカくんは私の特権を利用したい。
- ・王太子を選んで欲しく無い。
- ・私に死んだ王太子のことを調べられたく無い。
- ・四大老の会議に出席させたい。

最初の2つはなんとなく関係があるように思う。

王太子を選んで欲しくないってことはやっぱり自分か母親を立太子
させたいから？そうすると特権の利用もそれってことになるよね。
でも死んだ王太子のことを調べられると困るのはなんでだろう。レ
シユカくんは王太子の事故に関わってたとか？それにしたって王太
子が死んでもデイゲアさんが死んでも彼が得することなんてあるん
だろうか。

それと四大老の会議。

これはどんなに考えても目的が分からない。
一体彼らの何を知りたいんだろう。

会議室に入って来た私を見て、4人の大老は言葉には出さないものの驚いた様子だった。

「会議に参加されたいというお話を伺ってはいましたけど、本当にいらっしやるとは。何か気になる事でもありましたか？」

エイカーさんは自分の隣の椅子ー円卓には元々四脚しかなかったので、他の部屋から椅子を持って来てもらったーを私の為に引いてくれながらそう口を開く。

「いえ、特に何かあったわけでは無いんですけど．．．．．『理由』を探す手がかりになるかと思って。しばらくの間は毎日参加させてもらっていいですか？」

「僕は一向に構わんですなあ。若いお嬢さんがおるだけでつまらん会議にも花が咲くというもんですのう」

「レイジエったら、それはわたくしに対する嫌味かしら？」

「ほっほっ。そう怖い顔をせんでもいいじゃろう。だいたいお前さんだってサイキ様を気に入ったじゃないか」

「そうですわね。わたくしもサイキ様が参加されることを歓迎いたしますわ。『理由』に関わる情報があればよろしいんですけれど」

「ううう．．．．．歓迎しますとか言いながら、こっち見てる二ー

ジークさんの目が鋭い気がするのは私の勘違いでしょうか。別にあなたのことを引き続き探ろうと思っただけで来たんじゃないですから！レイジエさんはニコニコしてるから本当に私が参加することに異議は無いようだけど。

「バルデナもいいですね？」

「構わない。どうせ俺がこの会議に出席する意味は儀礼的なものだけだからな」

「そうなんですか？」

バルデナさんの声を初めて聞いたよ！！お腹に響くようななかなか渋い声だ。

私の席はエイカーさんとバルデナさんの間に用意されているので、首をひねるようにして彼の方を向いた。

服の上からでも分かる筋肉質そうなたい腕を組んで、彼は机の一点を見ている。

「バルデナの管轄は軍部なので、行政に関わることが殆どの四大老会議では有事以外にあまり彼が議論する事柄が無いんですよ」

「その有事もここしばらくは無いからのう」

「国が平和でよろしいじゃありませんか。それこそバルデナが忙しくなればわたくし達だって暇では居られませんわよ？」

「俺だって会議で発言する事がないだけで執務はそれなりに忙しいぞ。いつも仕事が無いみたいに言うんじゃない」

厳つい顔を少し赤く染めて、こちらの方をちらちら伺って来るバルデナさん。

いや、別に私はあなたを暇人とは思ってないですから!!

「では、あまり無駄話をしていてもこの後の予定が押すだけなので会議を始めましょう」

エイカーさんの鶴の一声で皆の顔が引き締まる。

その空気に私も緊張してきてしまった。が、私は特に口を出す事もないので、皆の話を聞くだけだ。

そもその目的はこの腕輪を通して会議をレシユカくんにも聞かせることだし。

会議の内容は私に分からないことだらけだった。

財務がどうのとか、税金がどうのとか、貿易がどうのとか。

一つだけ理解できた議題はガルダさんのお父さんである第二王子のことだった。

「またオルバ殿下の立太子を推す声があがってますわね。前回承認が得られず棄却されてからまだそんなに時間は経ってませんのに」

「僕はオルバ殿下の立太子には賛成なんじゃがのう。しかし本人も渋っておられるようなんであまり強く推すのもどうか、ということころじゃなあ」

「俺は反対だな。あの方の研究は国益に繋がるものだ。このまま続けて頂く方が国のためにもご本人のためにも良いと思う」

「そうは言っても王太子がいつまでも空位と言う訳にも行かないでしょう。今陛下に何かあれば国は混乱を避けられません。第一に体

面も良く無い。いくら我が国が超大国と言われていても、国内に憂慮を抱えていては民は安心しませんし、他国に付け入る隙を与えかねないですからね」

「しかし継承権第一位であるオルバ殿下が議会の承認を得られないのであれば、他の王族を推挙したところで結果はそう変わらないのではなくて？」

堂々巡りって感じだなあ。

結局八方上手く治まるいい案はなさそう。

「サイキ様のお国には王族が居ないと伺いましたけど、そうすると国家元首はどうなっているのですか？」

エイカーさんが急にこっちに話題を振って来たよ！！

完全に聞き役に徹してたから、まさか意見を求められるとは思ってもみなかった。

「え〜と、私の国では議会の中で議席の多い党派のトップがそのまま総理大臣となって国を治めています。王族じゃなくて皇族っていう元々国を治めてた一族なら存在してますけど、今は政治的権力は持つてないですね」

「議会がある点では我が国と同じようです。だが王が政治に関与せんというのは興味深い」

「あ、今も王制を取っている国は私の世界にもありますよ？ただ私の国はそうじゃないってだけで……」

「国の数だけ政治体制もあるということですね。我が国では王制

を続ける必要がありますけれど、王太子の話はわたくしたちだけでどうすることも出来ませんし、再度陛下の意見を伺った方がよろしいんではないかしら

「俺もそれが良いと思う。いくら議会の方で話を進めても、陛下が否と仰つたらそれまでだ」

「陛下が決めかねておいでなのは承知じゃが、さすがに2年も待つたんじゃ。何がしかの答えは出してもらわんとう」

「では次期王太子については議題に上げるとは保留とします。陛下にはその旨を書面にしてもう一度催促するとして、今日はここまでにしましょうか。サイキ様も初めての四大老会議でお疲れでしょう?」

「いえ、色々と勉強になりました!分からないこともいっぱいありましたけど」

「つていうか分からないことの方が多かったですけどね!!
でも一々質問して中断させるのも悪いし、説明してもらっても理解出来るかどうか分からなかったからいいんだけど。」

「サイキ様がお分かりにならない部分は説明してもいいんですが、きつと『理由』に関係は無いでしょうね」

「そうですね」

わざわざ説明してもらわなきゃ分かんないような事が『理由』だったらすすがに私も神様を恨むよ。

会議室を出たところで待機していたアイヴンさんと合流する。でもなんだかひどく固い表情をしている。何かあったのかな？まさかカプセルのせいじゃないよね……………？

「アイヴンさん、顔色が悪いみたいですけど大丈夫ですか？」

「いえ、実はたった今レシユカ様から連絡がありました、屋上庭園でお話がしたいとお待ちのようです……………。どうされますか？」

「レシユカくんが……………？」

十中八九この四大老の会議内容を聞いたからだろう。何か彼の知りたかった情報があったとか？

「今すぐですよ？行きます」

レシユカくんが私に何をさせたいのか分からないけど、彼の気が済めばカプセルを取ってくれるかもしれない。

レシユカくんは以前ディゲアさんと話していた四阿で私を待っていた。

いつもと同じ様な笑顔だけどなんとなく機嫌が良さそうに感じる。

「サイキ様〜！！待ってましたよー！！」

「……………話ってなんですか？」

四阿に取り付けられているベンチに腰を下ろしているレシユカくんは、私に気付いてブンブンと手を振っている。

でもそんな態度に騙されないからね！あんたの腹が真っ黒だってことは私の脳みそにふかーく刻まれてるから！！

「アイヴンは下がっててくれるかな？心配だって言うなら僕の護衛も下がらせるし、なんだったらここが見えるところに居てくれていいから」

「私なら大丈夫ですから少し離れたところで待っていて下さい」

アイヴンさんが心配そうにこちらを伺いながらも、指示通り少し離れたところまで距離を取る。

本当は私だって傍にいてほしいんだけどね。

「四大老会議、ご苦労様。中々良かったですよ？これならそんなに長く出席する必要も無さそうですね」

「そうですね」

「僕はあなたの働きに満足してるんですよ？その特権を行使して頂く日も遠く無いかな」

「……………それが終わったらアイヴンさんのカプセルを取って下さい」

私が帰る時なんて、それこそデイゲアさんに聞いた医師だった人みたたくこつちに居着く事になったらどうすんのよ。

「うん。考えておきますね。今それをお約束することは出来ないんで」

日本人の私にとっては『考えておく』NO』なんですけど……。

こっちは人はずうでないことを祈るばかりだわ。

「で、話はそれだけですか？」

「いえいえ、まだありますよ。ねえサイキ様。この城に来てすぐ、あなたとデイゲアに不名誉な噂が流れましたよね？」

「ああ、そんなこともありましたね。言っておきますけど全く根拠の無い嘘ですよ、あれは」

「知ってますよ。だってあれを流したのは僕なんですから」

「は？」

レシユカくんがああ噂を流した……？

9 日目 1 (後書き)

ディゲアがまだ出ない・・・。

この子は本当に私を混乱させるのが好きみたい。

あの馬鹿げた嘘っぱちの噂を流したのが、デイゲアさんの従兄でもあるレシユカくん？

とりあえず思った事。

「なんで？」

「一番の目的はあなたとデイゲアを引き離したかったです。僕が近づくと邪魔そうだったし。あとはもちろんアイツを貶めるためですよ」

「だって……レシユカくんは王孫の中でもデイゲアさんと仲が良いって……」

「あなたの言う通り王孫の中で一番親しいのは僕でしょうね。大抵の人間はデイゲアの冷たい態度にそれ以上踏み込むのを止めますから。でも僕はそうしなかった。しつこくアイツに話しかけて、部屋を訪ねたりもしました。だから仲が良いと言ってもそれはデイゲアが特別僕に心を許してる訳じゃなくて、ただ単に他の人間が近寄らないだけなんです」

「でもそんなに構うんなら少なからずデイゲアさんに好意はありますよね？なんで彼の立場を悪くしようとするんですか？」

私を貶めたいって言うならまだ納得も出来る。

なんて言ってもぼつと出の平民だ。しかも異世界人。
でもデイゲアさんは仮にも従弟なのに。

「サイキ様は僕とデイゲアを見て似てるなって思いませんでしたか？」

「遠目に初めて見た時は何となく似てるとは思いましたけど．．．
．．．近くで見たら全然違いますよね」

「僕はね、デイゲアと同じ年で学院にも全く同時期に通っていたんです。そしてご存知の通りアイツはマリグエラ殿下が次期王太子にと望むくらいに優秀でした。何となく想像が付きませんか？同じ年なのに優劣の差がある王孫が二人、同時期に学院に通うとどうなるか」

それは．．．．．もしかしなくても比較されたってことだろうか。

「オルバ殿下はマリグエラ殿下と2つ年が離れていたにも関わらず、ずっと比べられて来ました。そして僕も学院にいた10年の間、ずっとデイゲアと比べられて来たんです。優秀なデイゲアと至って普通のレシュカって刷り込みのように何度も言われて来ました。僕だってそれなりに努力したんですけどねえ．．．．．小さい頃からずっと、暗い水の中で溺れているような息苦しさしか感じなかった」

レシュカくんはもう笑っていなかった。

そこに居たのは取り繕うことをやめた16歳の少年。

「でもね、そんなデイゲアにも不得意なことがあったんですよ。アイツ愛想が無いでしょ？だから僕はアイツに当てつけるように明る

く振る舞うようにしました。王族であることを驕らず、親しみやすいようにずっと笑顔で。そうするとね、最初はデイゲアに媚び諂っていた奴らも結局は僕の周りに集まって来るんです。それからわざわざデイゲアと同じ様な髪型にしたり服装にしたりして、より僕らの内面の違いを際立つようにしました。デイゲアに人心を掴むことが出来ないと知れば、誰も彼が王太子に相応しいとは思わなくなる

と考えて」

「レシユカくんはデイゲアさんのことを憎んでいるんですか……」

「憎んでいるというか、僕の前から居なくなればいいのと思います。マリグエラ殿下が目をかける以前のアイツはただの無愛想な子どもだった。だから殿下が事故で亡くなられた時、もうアイツの居場所はこの城には無いと密かに喜んだんですよ。それなのにマリグエラ殿下が亡くなってもデイゲアを王太子に推す声は未だに無くない。だから噂を流したんです。さすがに国賓扱いのあなたに手を出したと噂されればアイツの立場も危うくなると思ったんですけど……さして影響は無かったみたいですね。もつと糾弾されればよかったのに」

「わざわざ噂まで流さなくても、デイゲアさんは王位継承権を放棄するつもりでいますよ」

「自分から放棄するのと、剥奪されるのでは訳が違います。後者と外聞は悪くなるし、何よりアイツの矜持を傷つける事ができる」

「まさか……それを私にしろって言うんじゃないでしょうね……」

「1」名答」

漸く笑顔を取り戻したレシユカくんは、組んだ足の上でパチパチと
気の無い拍手をした。

こんなの言い当てたって嬉しくないわよ！！

「デイゲアさんは私を保護してくれたんですよ？そんなことできる
わけないじゃないですか！」

「どうしてです？あなたは彼が継承権を放棄したいことを知ってる
んでしょ？じゃあ一言『デイゲアには王の資質無し』って言えば終
わりですよ。アイツの希望も叶うし、僕も満足。それにあなただっ
てアイヴンを助けたいんじゃないですか？」

ハツとしてアイヴンさんの方を見た。

彼女はさっき移動した場所ですつとこちらを眺めていたようだ。

急に振り向いた私を訝しむようにその目を眇めたけど、私たちの会
話が聞こえていた様子は無い。

「僕はもうアイツの後ろに行くのは嫌なんです。前に行く事が出来
ないなら引きずり下ろすしかないですよね」

「どうして．．．．．デイゲアさんは何も悪い事なんてしていな
いの、そこまでする理由がわかりません。彼が王族を離れたいつ
て言うならそうさせてあげればいいじゃないですか．．．．．」

「アイツの罪はマリゲエラ殿下を思う余り、答えを出さなかったこ
とです。王位に興味がないなら王太子の仕事なんて手伝わなければ
よかったですよ。とにかく僕はずっと比べられて来た挙げ句、傍
系となって城を去り、王となるアイツを見るなんてご免です。デイ

ゲアなら臣に下つてもなんとかやっつけていけるでしょうけど、僕には王族ということ以外には何も無いんです」

彼の心の悲鳴を聞いた気がした。

きつとレシユカくんは自分を認めて欲しいんだろう。

やり方は激しく間違っているけど。

「それでも継承権を剥奪なんて……」

「あなたは『理由』さえ片付けば自分の世界に帰るんでしょう？なら何の柵もないじゃないですか。デイゲアに恨まれたとしてもそれだけです。それとも噂はあながち間違いでまなかつたですか？デイゲアに情でも湧いたんですか」

「情とかじゃなくて、恩があるんです。親切にしてもらったのにそれを仇で返すような真似出来ません」

「デイゲアを裏切ると、アイヴンの人生を狂わせるのとじゃどっちが寝覚めが悪いでしょうね」

「そ、れは……」

「とにかく、僕の指示には従ってもらいますから」

彼の目が私に拒否権なんて無いと言っている。

足が張り付いたように動かない私を置いて、レシユカくんは一度も振り返らずに四阿を去って行った。

「サイキ様……」

「部屋に、帰ります．．．．．」

すぐ傍までアイヴンさんが来ていたことにも気がつかなかった。彼女が私の背を優しく撫でてくれて、漸く足が動き始める。

言いたい事を言えないのってこんなにストレス溜まるんだ。

王様の耳はロバの耳って穴に向かって叫んでやりたいけど、それすら出来ないこの状況。

アイヴンさんを犠牲にしたくない。

あのカプセルが割れればアイヴンさんは苦しむことになる。一瞬じやなく一生。

でもデイゲアさんの継承権を剥奪しても彼のその後の人生を左右することは間違いないだろう。

もう本当に嫌だ。神様はなんで私をこんなところに連れて来たのよ。

茶会 (デイケア視点) (前書き)

更新お待たせしました・・・。
そしてやっとここにデイケア登場です。

茶会（デイゲア視点）

『サイキリツカ』は食堂に着いて早々に伯母や従姉に囲まれてしまった。

噂のことを詫びたかったが、挨拶する間も無い。

「お前なんでサイキ様と一緒に来たワケ？」

「迎えに行ったからだよ。ガルードとメリエ又はもう会ったって言うじゃないか。僕だってお話してみたかったんだけど、ここだとお母様や姉上がうるさそうだからさ」

私の聞きたかった事はガルードがあっさりと問い質してくれた。この男も役に立つことがあるものだ。

それにしても彼女達はどんな話をしているのだろうか。『サイキリツカ』の表情はあまり楽しそうには見えない。と、そう思っていた瞬間、彼女が遠慮がちにこちらを見て来た。

どうせあの噂のことも話しているのだろう。いくら彼女が気にしていないとは言え、この場で話題にすることじゃない。

十数歩の距離ももどかしく彼女の傍に寄ると、レットシーム殿下は蔑んだ目で『サイキリツカ』を見ていた。

「レットシーム殿下、何のお話をされているのですか？」

「あら？聞いていたんじゃないの？あなたの話よ。サイキ様は随分あなたをご贔屓にしているらしいからね、って言っていたの。間

「違うではないでしょう」

やはりか。信じる方がどうかしているような噂話を敢えて本人の居るこの場で話すとは。

「あの噂のことを仰っているなら馬鹿馬鹿しいの一言に尽きます。もし殿下がそれを信じておられるんなら器が知れると言つものです」

「なんですって！！わたくしを侮辱するつもり！？言葉を選びなさい！！」

「それなら彼女を侮辱したことをまず謝って下さい」

「わたくしがいつ侮辱したと言つもの！？勘違いも甚だしいわ！！」

「私も侮辱したつもりはありません。『もし信じておられるなら器が知れる』とは言いましたが。侮辱されたと思われるんなら、あの馬鹿馬鹿しい噂を信じたと仰るんですね？」

「よくもそんな口が聞けたものね！！マリグエラお兄様の教育が無くなった途端にこの有様とは、お兄様もさぞかし嘆かれていますに違いないわ！！」

「伯父上は関係ありません」

一瞬怒りに感情を支配されそうになったが、ここで理性を失っては彼女の思つままだ。私がここで我を忘れれば、火に油を注ぐだけに違いない。

「えっ」と、私からも言いますがあの噂なら本当に嘘ですから。

あり得ませんから。あと別に侮辱されたとは思ってないんで謝ってもらわなくてもいいです。でも今後この話はしないでくれると有り難いです」

彼女が言った事は噂を否定するためだと分かっている。

10も年下の私なんて子どもとしか見ていないことも。

それでも胸がじくりと痛む事を止めることは出来なかった。

結局その場はレシユカが乱入したことで場が和み、ギスギスした雰囲気は無くなった。

『サイキリツカ』が謂れの無い事で侮辱されることが我慢出来なかったとは言え、却ってレッテシーム殿下を煽ってしまった私とは大違いだ。

自分の無力さに呆れ、王族に囲まれて自分の世界のことを話す『サイキリツカ』に近寄ることが出来なかった。

それでもどうしても彼女に一言謝りたくて、食堂を出て行くつもりでいた『サイキリツカ』を呼び止めた。

彼女がいくらあの噂を気にしていないとは言っても、不愉快な思いをしたことは間違いない。

足を止めこちらを向いた彼女を直視出来ず、自分の足元を見ながら一言を告げる。

「すまない」

しかし彼女は私がなぜ詫びるのか理解していないようで、その円な瞳でこちらを見つめ、小首を傾げる。

「あの噂のことだ。私の不用意な行動のせいで気分の悪い思いをしただろう。あと先ほどのレッテシーム殿下のことも……」

「え！噂のことなら私が謝りたいくらいですよ！！いきなり現れてお世話になったのは私の方なのに、デイゲアさんにまで迷惑かけちゃってごめんなさい。さっきのことも全然気にしてないです。疾しいことなんて無いんだし、堂々としてましようよ！」

彼女はそう言っで私の肩を慰めるように軽く叩いた。自分が貶されるよりも、私が噂で迷惑していると気にかけている様子なのは昨日フィンエルタから聞いてはいたが……。普段は煩わしく思える他人の配慮が嬉しく思う日が来るとは。思わず顔が綻ぶのが自分でも分かった。

それから暫く私の両親の話になった。二人とも本日の茶会には参加していなかったのだが、『サイキリツカ』は私の両親に会えなかったことを残念がって、後日紹介して欲しいと言う。母はともかく、父は会えば余計なことを喋りそうで余り気が乗らない。しかしここで父だけを除け者にすれば、後からうるさいのも目に見えている。両親は共に仕事でいつも忙しくしているが、少くなら時間も取れるだろう。

「でもご両親が忙しかったら小さい頃は寂しかったんじゃないですか？」

「物心ついた時からそんな感じだったから当たり前だと思っていたんだろ？。それに伯父夫婦が代わりのようによく構ってくれたから、あまり寂しいとは思わなかった」

「伯父さんって亡くなられたマリグエラ殿下のことですよね？お二人には子どもがいらっしゃらなかったって聞きましたから、きっとデイゲアさんのことを自分の子どもみたいに可愛がってたんでしょうねえ」

「そうかもしれない。彼らは本当によくしてくれたからな。私も伯父から学んだことは多かった」

私の幼い頃の記憶は殆どが伯父夫婦との思い出に占められている。彼らが居たから私は城に居ても孤独を感じることはなかった。両親も敢えて私を伯父夫婦に託している節があった。きっと子ども出来ない二人を慮ってのこともあったのだろう。

「．．．．．それでも、王太子が亡くなった後に立太子しようとは思わなかったんですよね？そういう話も出てたのに」

少し過去に飛ばしていた意識が『サイキリツカ』の声に引き戻される。彼女は恐る恐ると言った様子で私に問いかけて来た。

伯父が私を次期王太子に考えていたことは彼女には話していない。きっとガルーダかメリエヌにでも聞いたのだろう。

「．．．．．伯父が亡くなったのは私のせいだ。だから私に王太子になる資格は無いと思っている」

「え、王太子が亡くなったのは事故のせいだって聞きましたよ」

「確かに伯父は事故で亡くなった。だがあれは人的要因の事故だ。誰かの差し金であることは間違いない」

「仮に王太子が殺されたとしても、それがデイゲアさんのせいだ
て思うのは考えが飛躍しすぎなんじゃ……」

「伯父が立太子してから30年、もし王太子である伯父が邪魔だ
と思うならもつと早くに行動に移せたはずだ。それがなぜ2年前だ
たのか、不思議には思わないか？」

伯父は私から見ても王に相応しい人物であった。優しく、厳しく、
公平で人の痛みの分かる人。それでも彼を疎ましく思っていた人間
が居ないと言い切れない。

だが、彼の弑逆を企むのなら30年も待つ必要は無い。むしろ彼が
王太子としての地位を固める前の方が都合が良かった筈だ。

「うーん、機を狙ってるうちに時間が経ってたとか」

「私は伯父が私を次期王太子にと考えたからだと思っている。伯父
がそれを打診してきたのは妃殿下が亡くなられた5年前。その時は
まだ学院に在学中だったから答えを保留にしていた。だが結局私が
答えを出す前、卒業する年に伯父は事故に遭った。あまりにも出来
すぎだ」

「でも普通なら王太子じゃなくてデイゲアさんを標的にすると思っ
たんですけど……」

「だから、伯父が私のせいで死んだと言っているんだ」

「向こうの手違いで王太子が殺されてしまったって言うんですか？
それでも亡くなったのはデイゲアさんじゃなくて殺した人のせいで
しょっ」

「例え他の人間がそう言っても、私は自分を許せない」

最後に見た伯父の顔が今でもふと脳裏に蘇る。別れ際にいつもの笑顔で私を褒め、優しく頭を撫でてくれた。

またすぐに会えると信じていたが、次に見た時には青白く血の通わない顔で横たわっていた……。

本当ならあそこで死んでいたのは私だった筈だ。

「もし、デイゲアさんが自分を許せないって思うんなら、そこは手を下した人を見つけて出して、罪を償わせるべきです！王太子だつてデイゲアさんが事故のことを悔やんでくよくよと生きるのは望んでないんじゃないですか？私も協力しますから、もっとちゃんと調べてみましょう！！」

『サイキリツカ』は力強い声で私に訴えかけた。

伯父の事故で自分を責める私を気の毒に思ったのかもしれない。彼女は優しい人間のようなから。

「お前はこの問題には関わりたくないんだと思っていたが……
・違つたのか？」

「私はデイゲアさんのために真相を明るみにしたいんであって、誰かを王太子に選ぶつもりなんて毛頭ありません。デイゲアさんにはお世話になつたし、もしかしたら私の特権が役に立つかもしれないんで、喜んでお手伝いしますよ」

私は彼女の『理由』を半ば確信していながらも、その話題を彼女が避けていることを知っていた。

林の家で以前運ばれて来た人間の話聞いた彼女は、出来るなら王家に関わる『理由』でないことを願っていた筈だ。

しかし私のために自らこんな面倒な問題に協力すると言った『サイキリツカ』に、私は喜びを感じながらも不安で仕方なかった。もし本当に何者かが伯父を手にかけていたら、それを明るみにしようとする彼女は邪魔になるだろう。ましてや彼女は陛下をも超える特権の持ち主だ。

安易に彼女の申し出を受けては、彼女の身を危険に晒すことになる。

「サイキ様!!」

私の思考の糸は第三者の声によってプツリと切れた。

食堂に現れたのは既に去った筈のレシユカだ。少しは遠慮しろと声高に叫んでやりたいが、変に勘ぐられるのが落ちだろう。

「まだこちらに居たんですか。あー！またデイゲアと話してる！
！ずるいずるい！！僕だってもっとサイキ様とお話したかったのに
く！！」

レシユカは『サイキリツカ』と話しているのが私だと気付くと、ズカズカと音のしそうな勢いでこちらへやって来た。

「もうお部屋に帰られるでしょ？僕送って行きますから、今度は僕とお話してください！！」

そう言つて少し私を睨むようにしてから『サイキリツカ』の腕を取り、自分の方へ引き寄せる。

レシユカはよほど彼女を気に入ったようだ。元から人懐っこい性格ではあつたが、ここまであからさまに好意を露にする姿は見た事がない。

その行動に何故か胃の中が熱くなるような錯覚を覚える。先ほど飲んだ茶が良く無かつたのだろうか……。

レシユカの強引さに『サイキリツカ』はこのまま話をするのは無理と判断したようで、腕を引かれたまま食堂を去って行った。本音を言えばもう少し話をしたかったが、彼女は自分一人に構っていられる存在では無い。

一人取り残された自分の周りの空虚さに反比例するように、肺の中に重苦しい空気が溜まって行くのを感じた。

女傑（デイゲア視点）

翌日、私の元へ思いがけない人物が訪れた。

「お前が私のところへ来るとは、珍しいこともあるものだな」

自室のソファに座ったまま出迎えた私をさして気にも止めず、フィンエルタの開けたドアから落ち着いた足取りでこちらへ来たニージークはしかし、あまり機嫌が良いようには見えない。

普段はここで嫌味の一つでも言いそうなところであるのに、彼女はそれをしなかった。

静かな口調で「かけてもよろしいですか？」と聞くと私が頷くのを見るや投げやりな態度で向かいに腰を下ろす。

ニージークは暫く私を睨み据えていたが、こちらが口を開かずにいると耐えかねたように大きく息を吐いた。

「サイキ様がわたくしのところへいらっしやったのはあなたの指図ですの？」

「……いや、初耳だ」

『サイキリツカ』がニージークのところへ？

少し引つかかるものはあるが、初めて対面した折りに彼女の気を惹こうとしていたのはニージークの方だったはずだ。

訪問を喜びこそすれ、厄介事のように言う理由がわからない。

「わたくしも政務についてでしたら喜んでお答えしますけれど、2年も前の事故のことで秘書について探りにいらっしやるなんてあんまりではなくて？この国にいらしたばかりのサイキ様がラオアラのことを知る筈がありませんし、ここはあなたが何が仰ったと考えるのが妥当ですわよね」

「確かに伯父の話はしたが．．．．．」

まさか本当に手を下した者を探し出すつもりか？

二ージークの秘書であるラオアラは当時もかなり厳しく取り調べられた筈だ。何と言っても直前まで伯父と居たもう一人の側近であったのだから。

だがあの男が無実であるのは私がよく知っている。

誰よりもこの私が。

「ラオアラの話はしていないが、彼が無実であることは私も知るところだ。彼女には私から言っておこう。私が謝るのもおかしいかも知れないが、迷惑をかけたな」

「分かって頂けたのならそれでよろしいんですよ。それにしても．．．．マリグエラ殿下のお亡くなりになった事故について納得がいかないのは理解できませんけれど、サイキ様がお調べになることではないですわよね？特権があるからと言って、みだりに城の人間を刺激して混乱を招くような真似は如何なものかしら」

「彼女は悪く無い。伯父のことを気に病んで城を去ろうとする私に気を遣ったのだらう」

「継承権を放棄されたいというのは本当でしたのね。でも王太子が空位のこの状況で、あなたのご要望が通るとは思えませんわ。大人

しく来るべくその日まで城にいらっしやっただほうが賢明ですよ」

直系とは言っても末席の私など、居ようが居まいが大差ない。だがニージークの言う通り、王太子が決まらない限り継承権の放棄は受理されないだろう。

伯父の手伝いをしていたことを引き合いに出して、次期王太子に薦める人間がわずかばかりにも残っていることも関係しているはずだ。しかし私という人間の本性を見ればその考えも霧散するに違いない。私はこんなに無力なただの子どもで、未だ過去に捕われている不甲斐ない人間だということに、彼らも気付くべきなのだ。

ニージークが退室した後、知らずと溜め息を吐いていたらしい。フィンエルタの苦笑する空気を感じた。

「言いたい事があるなら言ってもいいぞ。許可する」

「いやあ、やはりサイキ様は行動力のある方なんだと再認識しました。なんだか落ち込んでいる様子ですけど、ここは喜ぶところじゃないですか？あの方がデイゲア様のために行動してくださったんですから」

「．．．．．しかしそのせいで彼女が悪し様に言われるのは本意ではない。既に噂のことで迷惑を掛けたのだから、彼女の申し出はきっぱりと断るべきだった」

「ラオアラ様のことは十中八九アイヴンが話したと見て間違いないでしょう。確かにサイキ様の影響力を考えれば下手に動くのは危険かもしれないですね。ラオアラ様のことはまだ広まっていないようですが、サイキ様が疑いを持たれたと誤解されれば、あの人の城での立場も危うくなるかもしれません」

『サイキリツカ』の行動は城の人間が目下のところ一番気にする行動と言ってもいい。

今ここで伯父の事故についてラオアラの元へ訪れたことが知られれば、深読みをする人間が出て来ることは容易に想像できる。

そのうちにラオアラこそが伯父を手にかけた弑逆者と実しやかに囁かれるのだろう。真実を知りもしないで。

「……………彼女に事情を説明する。アイヴンに連絡は取れるか？」

「了解しました。少々お待ち下さいねー」

フィンエルタは通信機を取り出すと、手慣れた仕草で指を動かす。しかしすぐに手を止め、難しい顔でその表面を睨み据えた。

「出ませんね。城に居るとは思っんですけど……………オルティガ様に聞いてみましょうか」

「そうだな……………」

彼女の予定を逐一把握している訳ではないが、連絡が着かないというのは何か胸騒ぎがする。

誰かと面会中ということもあるし、気にすることはないのかもしれない。

それでも言い様の無い不安に胸が苦しくなるのを止められなかった。

「オルティガ様、こちらフィンエルタです。実はデイゲア様がサイキ様にお会いしたいんですけど連絡が着かなくて。今どちらに出来るかご存知ですか？……………そうです……………はあっ

!？」

静かな部屋にフィンエルタの大きな声が響いた。

この男が取り乱す様は特別珍しくもないが、一体どうしたのだろうか。

『サイキリツカ』に何かあったのか……？

「す、すみません！いえ、ちょっとびっくりしただけで、ほんとう
いません！……いや、いいです！いいです！！では失礼しま
す！！！」

「……どうした？随分驚いていたようだが」

「いえ……サイキ様、本日はレシユカ様と城下に行かれて
るらしいです。なんでもレシユカ様のご友人のところへ行かれて
とか。お戻りがいつ頃になるかは伺ってないということです」

またレシユカか……。

あの男が彼女に興味を示している事は昨日十分に分かった。

レシユカが『サイキリツカ』に会いに行っても、何ら不思議はない
はずだ。

だが……心のどこかで彼女が真っ先に頼るのは自分だろう
と驕りがあった。

「ではアイヴンに伝言を残しておけ。城に戻り次第こちらに連絡す
るように」

「了解しました」

しかし帰城したアイヴンが寄越した返事は、『サイキリツカ』は今日
はもう部屋で休むと言ったもので、その日彼女に会う事は叶わな
かった。

腕輪 (デイゲア視点) (前書き)

ちょっと長めです。

腕輪（デイゲア視点）

翌日、あまり早すぎない時間に『サイキリツカ』の元へ向かった。もちろん伯父のことについてだが、昨日レシユカと外出したきり部屋に閉じこもっていたことも気にかかる。

ところが部屋に彼女の姿は無く、部屋つきのメイドの話では四大老会議に出席しているという。

『サイキリツカ』に与えられた特権から言えば、四大老会議だろうが軍部会議だろうが出席する事は可能だ。

しかし何故いきなりそんなことになったのか見当が付かない。まさか伯父のことを調べるために……？

昨日ニージークに釘を刺されたまま、『サイキリツカ』には事情を説明していない。

なんとなくまずい気がして焦る気持ちを押さえられず四大老会議の行われている会議室へと急いだ。

私には四大老会議に立ち入ることは許されていない。それは例え陛下であるうとも同じだ。

我が国は立憲君主制と言えど、現行の法の元では国王の権力の方が議会のそれを上回る。

そのため国王と議会との力の均衡を損なわないように、基本的に議会に直系王族の継承権を持つ人間は関与出来ない。王家による独裁を忌避する目的で。

もし会議の最中であれば終わるのを待つつもりでいた。

『サイキリツカ』がこれ以上伯父のことで城の人間から心証を悪く

する前に。

だが会議室のドアは開き、四大老会議が終了していることが分かる。中にはエイカー以外の3人の大老がまだ残っていた。ニージークがこちらに気付き、絨毯にヒールを沈ませながら近づいて来た。

「今日は珍しい方がよくいらっしやいますわね。サイキ様も昨日いきなり四大老会議へ参加されたいと仰って驚かされましたのに、デイゲア様まで？ですが生憎と会議はもう終了しましたのよ」

「会議に用があつて来たのではない。彼女はどこだ」

「サイキ様でしたらアイヴンを連れてお戻りになられたはずですよ」

「たつた今彼女の部屋から来たのに道中で会わなかった。部屋には戻っていない」

「そう仰られても、わたくしは存じ上げませんわ。大体、何をそんなにお急ぎになられてるの？サイキ様から何かお聞きになりたいことでもありませんか？それで四大老会議に参加されるようにお勧めになったの？」

ニージークはその強い印象の目を眇め、探るように私を伺つて来た。私が「サイキリツカ」を利用していると？彼女の特権を利用してまで遂げたいような目的など有りはしないのに。

他の誰が彼女を利用しようとしても、私だけはそれをしないと誓つて言える。

「四大老会議に参加するように言ったのは私ではない。私とて先ほど彼女の部屋で侍女からその話を聞いたばかりで驚いたくらいだ」

「まあ．．．．．意外ですわね。サイキ様が自らの意志で会議の参加をお決めになったとしても、デイゲア様にはご相談しそつに思いましたけど。あの方は随分とデイゲア様を信用なさつておいででしたし」

自分でも心の底でそう思っていたことを指摘されたようで、思わずニージークから目を逸らす。

しかし彼女は私の後ろ暗さには気が付かなかったようで、『サイキリツカ』の行動にしきりと首を捻っていた。

「デイゲア様が仰つたのではないなら、何故急に会議に参加されることにしたんでしょう？内容はお話出来ませんけれど、サイキ様は分からないことも多かつたと仰っていましたし、政治にお詳しいようにもお見受け出来ませんでしたのに」

「．．．．．何か考えがあつてのことだろう。明日も参加すると？」

「ええ。暫くは参加されると聞いております」

『サイキリツカ』が会議に参加することになった切欠はなんだ？伯父のことだと思っていたが、ニージークの態度からは『サイキリツカ』があれ以上ラオアラのことを尋ねた様子は無い。

一昨日の茶会ではそんな話は無かつた。ということは昨日彼女にそつ決意させた何かがあつたはずだ。

．．．．．レシュカに言われて？それとも訪ねたというレシュカの友人の方が。

しかし四大老会議の内容など、レシュカが『サイキリツカ』を使つ

てまで知りたがる理由はない。友人の方もそうだ。
ならば『サイキリツカ』に何かをさせるつもりでいるのか……
？

四大老会議の後どこかへ行っていた『サイキリツカ』と漸く面会を
果たせたのは、その日の午後だった。
部屋を訪ねた私を出迎えた彼女の顔色は冴えない。しかもこちらを
あまり見ない様になっている節がある。

「……何か気にかかることでもあったのか？ 顔色が良く無
い様だが」

「い、いえ……何でもありません。それで……今日
は一体どういう用件ですか？」

彼女の口ぶりからあまり歓迎されていないことが伺えた。

何か気に障ることもしたのだろうか、思い返してみても心当たり
が無い。

そもそも茶会の後で会うのはこれが初めての筈だ。会わなかった一
日の間でこうも態度が変わるのが解せないけれど、それを問いただ
す勇氣は無かった。

「ああ、茶会の後で言っていた伯父の事故についてだが、やはり協
力は遠慮することにした。事故が仕組まれたものだという証拠も無
いし、お前の手を煩わせることも無いと思う」

「そうですね．．．．．。じゃあこのことはもう関わらないでおきますね。確かに2年も前の、私がこっちに来るずっと前に起こった事を私が調べるのは不自然ですよね」

私の言葉に『サイキリツカ』がホツとした顔を見せたのは見間違いだろうか。

もしかするとラオアラを訪ねた際にニージークに何か言われたのかも知れない。

「ところで今日から四大老会議に参加するようにしたと聞いたのだが、随分と急な話だな。政治に興味があるとは知らなかった」

「えっと、あの、政治に興味があるっていうか．．．．．ずっとお城に居るんで、少しでも『理由』が見つかる切欠になればいいな」と思つて．．．．．」

「まあ探そうと思つて見つかるものでも無いが、何もしないよりはマシだろう。だが退屈だったのではないか？」

「そうですねえ、私に政治や経済の知識がもつとあれば楽しめたかもしれませんが」

「参加しているうちに分かることもあるだろう。私も伯父の政務を手伝い始めた当初は書類1枚理解するのに半日かかりで調べたりしたものだ」

「書類1枚で半日だったら、会議を理解するには何年かかることやらって感じですね」

その何年後かに、果たして『サイキリツカ』はここに居るだろうか

.....

彼女が帰りがたっていることは知っているが、それを考えるとどうしても焦燥に駆られるのだ。

「自分の国の国会ですら話してる内容が分からないのに、来て10日くらいのこの国の政治を理解しようなんて無謀っちゃ無謀なんですよ」

『サイキリツカ』は眉を下げて困ったような顔をしながら、茶を飲もうとテーブルの上にあるカップに手を伸ばした。しかし右手でそれを取ったその瞬間、指が滑ったのかバランスを崩し、もう片方の手を慌ててカップに添えた。

その時、珍しく着ている上着の袖からちらりと何かが見えた。銀色に光る腕輪のようなものが彼女の細い腕に嵌っていたように思う。私が『サイキリツカ』の左腕を凝視していたのを彼女自身も気付いたようで、持っていたカップを口に運ぶ事無くテーブルに置くと、その腕輪のあった辺りを服の上から反対の手で押さえた。

『サイキリツカ』がここに来てから先日の茶会まで、あの腕輪が彼女の腕に嵌っているのを見た事が無い。

しかし腕輪自体はどこかで見た事がある気がするのだ。一体どこで.....

口を開こうとした私に『サイキリツカ』は、青い顔を泣きそうに歪めながら必死に首を横に振る。

腕輪のことに触れられたくない様子なのは分かったが、彼女がこんな風に怯える理由は何だ？

「どうかなさいましたか？」

急に口を噤んだ『サイキリツカ』を訝しみ、アイヴンが声を掛けた。『サイキリツカ』は何かを話そうと口を開いたが、なかなか上手く言葉が出て来ないようで、もどかしげにその眉を顰めている。

「．．．．．あの、少しお茶が指にかかってしまつて驚いただけです」

漸くそれだけを絞り出すと、また口を引き結び黙りこくつてしまった。

「火傷などはされてませんか？今、何か冷やすものを持って来させましょう」

「いえ！そこまで大したことないから大丈夫です！えーっと、もしかしたら服にもかかったかもしれないのでちょっと見て来ますね。デイゲアさん、悪いんですけど今日はここまでで．．．．．」

「ああ．．．．．そうだな、長居して悪かった。フィンエルタ行くぞ」

体よく追い出された感じは否めないが、彼女の言う事に従つて今日は辞することにした。

それにしても今日の『サイキリツカ』の様子はどこか普通ではなかった。

フィンエルタも同じ様に思ったのか、私の部屋へと帰る道中もしきりと首を傾げている。

「なんか．．．．．サイキ様のご様子がおかしかったような気がしますませんでした？お茶を飲もうとされた時に腕を押さえてらしたし、どこかお加減でも悪いんじゃないですか？」

「いや、そうではない。お前見えなかったか？彼女の腕に腕輪が嵌っていただろう。あれを隠していたようだ」

「は？腕輪……ですか？でも何でそれを隠すんです？別にアクセサリーとして別段変わっているものと言う訳ではなかったんでしょう？」

見た目はいたって普通の腕輪だった。女性が身につける装飾品としては些か地味な装いではあったが、隠すほど趣味が悪いものにも見えなかった。

「ただの腕輪のようだったんだが、私がそれに気付いて口を開こうとするのを嫌がっていたように思う。それに……あの腕輪に見覚えがある気がするのだ……」

「前にサイキ様が着けてらしたとかではなく？」

「彼女が着けているところをみたのは先ほどが初めてだ。私が見たのは全く別の人間で、彼女がこちらに来るよりもずっと前だったよ
うな……」

つい最近のことではない。

確か着けている人間が意外な人物で驚いた覚えがある。

あれは……

……お前が装飾品を着けているなんて珍しいな。

「――婚約者から送られて来たのです。最近忙しくて会いに行けない私にお守りとして用意してくれたみたいです。」

「――愛想をつかされる前に、私からも伯父に少し休みを頂けるようをお願いしてみよう。」

「――それはありがたいお話です。もし休暇が取れたら真っ先に会いに行かないといけませんねえ。」

蘇って来た記憶に心臓が大きく音を立てた。

私が見たあの腕輪を着けていたもう一人の人間の顔。

「フィンエルタ……ラオアラをここに呼べ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2771o/>

帰宅途中

2010年12月7日19時17分発行